



TITLE:

周樹人の役人生活 - 通俗教育研究 會との關係 -

AUTHOR(S):

竹内, 實

CITATION:

竹内, 實. 周樹人の役人生活 - 通俗教育研究會との關係 -. 東方學報 1987,
59: 217-321

ISSUE DATE:

1987-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66668>

RIGHT:

周樹人の役人生活

——通俗教育研究會との關係——

竹 内 實

小 引

一 周樹人と通俗教育研究會……………	二二九頁	四 分科會の審議と周樹人……………	二五二頁
二 通俗教育研究會の成立……………	二三五頁	五 禁止處分・推薦された小説……………	二六七頁
三 袁世凱・湯化龍・張一麐……………	二三九頁	六 周樹人の關與……………	二七六頁
		七 結 語……………	二九二頁

小 引

文學者として知られる「魯迅」の本名は周樹人であつて、かれは長い期間にわたつて教育部に勤務していた。この間に、社會批評的な小説や隨想などを發表、そのさいの筆名の一つ「魯迅」が世間で通用するようになったものであるが、部内では依然として周樹人であつた。肩書は教育部社會教育司第一科長である。

一九一二年二月に教育部に就職、一九二六年八月に辭職、あしかけ十五年間、かれは日本におきなおせば文部省の役人という立場であつたのである。中華民國の中央官廳に勤務し、教育行政の一端を實務的にも擔當した、その公務の一つに、通俗教育研究會における活動がある。

通俗教育研究會は教育部の外郭團體で、教育部に獻策し、教育部がこれを実施するという關係にあったが、會員はじつさいは教育部の部員が多かった。本稿はこの會の活動と周樹人がどのようにこれに關與したかをみようとするものである。^①通俗教育研究會は二度、發足している。第一次は一九二二年、第二次は一九一五年である。第一次は成立後三、四年で有名無實と化し、第二次は一九二三年ごろまで、あしかけ九年にわたって存在した。とくにめだつた成果をあげたのは一九一五—一七年の三年間で、この間に世間に出版され流布している小説六百三十餘篇の小説、および數十種類の新聞雜誌を審査した。まだ上演中の演劇、および脚本についても審査、改編をおこなつた。^②

小説も演劇も、これを享受する民衆からいえば娛樂であつたが、教育部という役所からいえば社會教育の一環であつた。教育部のねらいは社會教育の普及にあつたが、たんに普及するというよりは、民間の活動を統制し干涉するという一面があつた。とくに第二次はこの傾向がいちぢるしい。

周樹人は、この第二次の通俗教育研究會と關係が密接であつた。たんに會員であつたにとどまらず、一九一五年九月の成立當初から小説分科會（原文は「小説股」）の主任であり、これは翌年二月に辭任するまで續いた。この間、約半年である。同年十月には改めて同分科會の小説審査幹事に任命された。^③

この小説審査幹事に任命されるのと前後して、教育部は小説の優良なものの推薦を公表するようになり、これは約一年つづいた。推薦は六回にわたるが、第六回を除き、第一回から第五回まで、すべて周樹人が關與していたと想像される。どの程度の關與であつたか、これを考察するのが本稿の一つの意圖である。推薦にあたつて公表された、通俗教育研究會の小説審査の報告書（いわゆる批語）のあるものは、周樹人が直接執筆したと考えられる。

これらの報告書は現在までの『魯迅全集』には收録されていないが、慎重に考慮して數篇は收録されるべきものである。あるいは當時、かれがおかれていた立場から考えると、さらに多くのもの（ただし、第六回は除外する）が、かれの

文章であった可能性がある。このように考えるに至ったのは、本稿執筆の過程でしだいに熟したものであって、これは筆者のささやかな收穫であった。ただし、本稿より以前に、報告書（批語）のあるものを「魯迅」執筆とし、またほとんど全部を「魯迅」執筆といわんばかりに扱った中國の研究者は存在する。このことは明記しておかなければならない。

すでにのべたように、周樹人の役人としての生活はあしかけ十五年にわたる。いくつかの筆名をもって文筆活動をおこなうのは、その後半である。はじめて魯迅という筆名を使ったのは三十六歳のときで、一九一八年、民國七年（大正七年）であった。かくて小説や雜文の筆者、「魯迅」の顔と、教育部の役人、周樹人の顔と二つの顔をもつことになったわけである。

通俗教育研究會の活動に關與したとき、周樹人はまだ周樹人であった。この周樹人とのちの「魯迅」（もしくは二つの顔をもつ周樹人）とは關係があるのか、ないのか。わたしは、この會に關與したことは、周樹人にとっては、のちの「魯迅」に變身、あるいは變貌する一つのきっかけになったのではないか、という豫感があつて、本稿もこれを確認するための手がかりとして執筆を開始したものである。しかし、當の周樹人本人は關與したとき（關與せざるをえなかったとき）おそらくそのようには、豫感しなかつたであらう。

一 周樹人と通俗教育研究會

第一次の通俗教育研究會は、一九一二年四月、南京において成立した^①。これは教育部の外郭團體とみられるが、教育部との制度上の關係はあきらかでない。臨時政府の北京移轉にともない、會の事務所を上海に移し、北京の教育部に通信處を設けた。

會の名稱の「通俗」は社會とか啓蒙的とかの意味である。實行の方針として提起したのは、衛生、生活、公衆道德、國家觀念の四つを重んじる「四つの主義」である。

理事のひとり、伍達^{ごたつ}は會員をふやすのにすこぶる熱心だった。かれは教育部社會教育司の第三科の科長であった。この科が管掌するのが、ほかならぬ「通俗教育」で、公衆道德の普及、圖書館・巡回文庫の運営、展示・講演會の開催といったことが肩にかかってくる。

かれは自分の科が社會的に活動するためにも、このような外郭團體が存在するのは便利であつたであらう。教育部が臨時教育會議とか、讀音統一會とかを開催して、部外の参加者が多く集まる機會を利用して入會を勧誘した。部内にたいしては、いうまでもない。

周樹人はこれに入會した。一九二二年八月六日の日記に「つぎのようにみえる。

雨。伍博純^{ごはくじん}來り、通俗教育研究會に入らんことを勧め、甚力^{はげま}む。却^{かえ}むも得^えず。遂^{ついに}に允^{ゆる}す。〔下略〕

博純は伍達^{ごたつ}の字である。

これよりさき日記には「午前、上海通俗教育會の手紙ならびに通俗教育研究錄一冊を得」とある（七月八日）から、いくら好奇心もあつたのだろう。

かれは七月三十日にこの會に顔をだしている。その日の日記にいう。

〔前略〕午後、中國通俗教育研究會に赴く。傍晚^{たそがれ}に乃散^{ようやく}ず。この會は即ち教育部に地を假^かりて設けらる。中國を稱^{いふ}すと雖^{いえど}も、實^{じつ}は乃吳人^{すなわち}の爲す所、那有好事^{うきごとがあるうか}！〔下略〕

「吳人の爲す所」というのは、教育部内において推進しているのが江蘇省武進の人間、伍達であるからであらう。伍は吳とも音が通じる。日記で伍達を罵ったのかもしれない。伍達と同郷の江蘇省人が多く入會したのでもあらう。

會長の唐文治は字は蔚芝、茹經、江蘇省太倉の人で、すなわちかれも「吳人」である。清朝の進士。商部右侍郎まで昇進し退職。上海で實業教育に従事するうち辛亥革命が勃發、江蘇省の獨立を援助したという。伍廷芳と連名、清帝の退位を奏請したのもこのときのことであつたらう。四十七歳^③。

もうひとりの理事、黃炎培も江蘇省川沙縣人である。字は任之^{あきな}。清末の舉人。同盟會會員で、辛亥革命のあと江蘇省教育司長に任命されていた^④。臨時政府がおかれた地元の省の教育擔當者である。一枚かんでもらわなければならない。ついでにいえば、のち中華人民共和國成立のあと、副總理であつた。三十三歳。

そのほかの理事については、未詳である。

とにかく、顔をだしたのがひっかかって、入會せざるをえなかったのであろう。入會を承知したあと、伍達に手紙を出している（八月二十九日）。年末には『通俗教育研究錄』が送付されてきた^⑤（第三期）。翌年三月にもこれが送付されてきた（第六期）。そして、通俗教育研究會との交渉はこれをもって、たち消えになるのである。

第二次の通俗教育研究會は、一九一五年に發足している。この研究會の主要な活動をになつたのは小説分科會で、すでにのべたように、主任は周樹人であつた。

かれが日記に、この研究會について、どのように記しているか、みてみよう。

教育部が教育部の職員にたいし、この研究會の會員を兼職するよう發令したのは八月三日であつた^⑥が、この日の日記にはなんらの記事もない。

三年前、やはりこの通俗教育研究會にしつこく入會を勧誘してかれを困惑させた伍達は、その翌年に死去した。わがもの顔にふるまって、かれに反感を抱かせる「吳人」も、今回はない。しかし、上からの命令による加入である。以前

と同様な腹立ちが、あったのか、なかったのか。

最初に日記に記事が登場するのは、教育部秘書處が準備會議を召集した日である（八月十九日）。

午後通俗教育研究會に在り。

ついで小説分科會主任に任命されたことはまた記さず、成立大會が舉行された日に、「午後通俗教育研究會に往く」（九月六日）と記す。

これからあとは、日記に、出席したという記事がみられるようになる。すなわち、九月はつづいて十五、二十一、二十九日、十月は六、十三、十九、二十七、二十八日、十一月は十七、二十四日。

いずれも、

午後通俗研究會に赴く。

というように簡単に記すだけであるが、ほぼ記載もれはない。毎週一回の分科會の定例會議に必ず出席していたのである。主任として議長をつとめるのであれば、缺席もできないであろう。十月二十八日は第二回大會なので、二十七日につづいてすぐ開かれた。十一月三日は開催されず、十日は記載がないが出席している。

十二月は一日に會議があつて出席したが記されていず、日記には「晴。無事」とあるだけである。そして、中旬に、つぎのように記す。

二十二日 晴。午後通俗研究會を開く、集る者四人に止まる。會を輟とどず。

二十七日には第三回大會がひらかれ、小説分科會主任として報告をおこなったにもかかわらず、日記には記載がない。

この大會では、とくに蔡元培が招かれて講演をおこなった。それは通俗教育、すなわち社會教育がいかに重要であるか、西歐諸國における見聞をまじえて、力説したものであつた。

周樹人の日記はほとんど外界のうごきを記さないから、このことを記さないというのは（大會についても記さないのを含め）、さして異例とするに足りないであろうが、大會に出席し、分科會主任として報告し、前總長の講演を聞いたという事實は、かれと通俗教育研究會との關係を考えるさい、見逃してはならないであろう。

翌一九一六年一月十三日の日記には、「午後、通俗教育會員新年茶話會開かれ、撮景して散ず」とみえる。

「撮景」というのは、記念寫眞をとることであつたろう。

十九日の會議には出席しているにもかかわらず、日記に記載がない。

かれは二月十四日付で小説分科會主任を免職になっている。かれが願ひでたということになっている。

この免職のことも、この間の経緯も、このあとの出席も日記には記載がないが、三月二十二日、七月五日の會議には出席している。

この年の十月、周樹人を小説分科會の審査幹事に任ずるといふ辭令がでたが、これも記されていず、審査幹事として活動した模様をうかがうに足る、なんらの痕跡も日記にはない。

要するに一九一六年の日記には、一月十三日の新年茶話會のことだけしかみあたらないということである。

翌、一九一七年も同じく一條だけである。二月四日に、やはり茶話會があつて、書畫の展觀もおこなわれた。そこで「通俗教育研究會茶話會に往き、列するところの書畫を觀る」。

これは教育部の講堂でひらかれ、六朝いらいの有名な人物の書畫百五十餘點を展示し、さらに古樂を演奏した催しであつた。この日は日曜日であつた。

以後、通俗教育研究會の記事は消えるのである。

要約すると、通俗教育研究會（第二次の）が日記にはじめて登場するのは一九一五年八月十五日で、この年は頻繁に出

現するが、一六年以降は各年一條だけ、最後に記されたのは一九一七年二月四日である。

これはかれの熱意の程度を反映しているのかもしれない。もし、そうであれば一九一六年の秋からみられる、審査の結果の公表について、かれは無關係だということになる。

しかし、はたしてそのように斷定できるであろうか。

推薦の教育部令は都合六回にわたって發令されている。すなわち――

- 【第一回】 一九一六年九月二十三日
- 【第二回】 同 十一月二十一日
- 【第三回】 一九一七年三月二十一日
- 【第四回】 同 六月二十五日
- 【第五回】 同 九月二十二日
- 【第六回】 同 十二月二十一日

少なくとも第二回以降は、審査幹事としての職責をはたさなければならなかったはずである。中華民國政府教育部の發令を、僉事にして科長である人間が、雲煙過眼視できるわけがないとおもわれる。そして、この任命はおそらくかれの手腕と實績をみたうえで發令されたのであるから、第一回から關與していたのであろう。研究會内の役職はともかく、教育部内においてかれは社會教育司第一科の科長として當然、これに無關係ではありえないのである。

第六回の推薦はかなり傾向が異なってきたが、教育部の覆審はやはり周樹人が擔當したであろうと思われる。

二 通俗教育研究會の成立

通俗教育研究會を新しく設立することを思いついたのは、ときの教育總長、湯化龍であつた。かれは意見書を袁世凱大統領のもとに呈し、袁世凱はただちにこれを裁可した。意見書の提出が一九一五年七月十六日、一日をおいて十八日には裁可が下るといふ早さである。しかも袁は、一萬五千四百元の經費を支出したのである。^①

湯化龍の意見書は、學校教育のほかに社會教育が必要であることを力説したものであつた。すなわち、つぎのようになつてゐた。^②

……學校ヨリ外、尤モ社會教育アルヲ借り以テソノ速バザルヲ補フ。……コノ國基甫メテ定マリ民習未ダ純ナラザルノ時ニ値リ、コノ項ノ教育ヲ積極提唱スルニ非ザラシムレバ、徒ニ人民ノ德慧開カズ社會ハ將ニ日ニ下ニ趨カントスルノミナラズ、シカモ蚩蚩タル者ハ氓ク、適宜ノ訓ニ乏シ。化龍尤モ志氣ヲ定メテ趨向ヲ正スナキヲ以テソノ國家ノ前途ニ關係スル甚ダ巨キヲ惧ル。故ニ通俗教育ハ實ニ現今ノ刻トシテ容緩スベカラザルノ圖ト爲ス。……現ニ會員ヲ選集シテ期ヲ定メテ開會セント擬シ、……亟カニ……妥善ナル辨法ヲ謀リ、以テ頽俗ヲ挽キ人心ヲ正サントス。

裁可があつたのと同時に、湯化龍は（つまり教育部は）會則、「通俗教育研究會章程」を公布した。^③これは研究會の趣旨は、「社會ヲ改良シ教育ヲ普及スル」にあるとうたつていた。會の名稱の「通俗」というのは、一般向きであること、大衆的であることで、これはつまり、社會教育を立案し普及する團體であると名乗つたわけである。

具體的には小説、演劇、講演の三分科會を設け、それぞれ全國（主としては北京）で出版され上演される各種の小説、書籍、新聞、雜誌、演劇、唱本、評書、詞曲、映畫フィルム、幻燈、畫報、掛圖、年畫、講演資料などの調査、審査、編

集、改良の作業に従事するとうたわれていた。

審査というのは、審査の結果、禁止する（出版禁止、販賣禁止、上演禁止）ことを含んでいた。改良は、「忠孝節義ノ精義ヲ宣揚スル」ために圖書を出版し、歌曲や繪畫を制作することも含んでいた。とくに小説分科會には「編譯」（編著、翻譯して出版すること）の任務もあたえられていた。

また、會長には教育部次長が就任すると定めてあった。

ついで教育部によって、教育部の職員二十九名が會員に任命された。教育部員のまま、研究會員を「兼職」したのである（八月三日）。それからしばらくして、これらの兼職會員を教育部秘書處が召集、研究設立のための準備を打合わせた（十九日）。

さらに、分科會主任が任命された（九月一日）。

教育部僉事で社會教育司第一科長である周樹人は、兼職會員に任命され、さらに小説分科會主任に任命されたのである。當時、三十四歳。演劇分科會の主任に任命されたのは、これも教育部の僉事で（所屬の司、科は未詳）、講演分科會主任は京師學務局通俗教育科長であった。

小説分科會には二十四名の會員の所屬することになり、そのなかから調査幹事三、審査幹事三、編譯幹事三、が任命された。

成立總會がひらかれたのは、九月六日のことである。會場は教育部の管轄下にある通俗圖書館で宣武門内路西にあった。以後、各分科會もここで會議をひらいている（やがて教育部内でひらくようになった）。

初代の會長は教育部次長の梁善濟で、かれは總會で訓示をおこなった。

翌日、三分科會主任の會議がひらかれ、分科會の開催日などがきまった。小説分科會は毎週水曜日午後にはひかれるこ

とになった。各分科會はその主任によって主宰されるが、會の總務幹事、庶務幹事、會計幹事も列席することとされた。總務幹事は社會教育司司長の高步瀛、庶務幹事は社會教育司第三科食事の徐協貞、會計幹事は教育部主事の王丕讓であつた。ほかに交際幹事というのがあつた。

小説分科會はまず分科會としての會則（細則）を定めた。これはつぎのようなものであつた。

小説分科會事務處理細則^③

第一節 總 綱

第一條 本分科會ハ會則第四條ニ規定セルモノ以外ハコノ細則ニヨリ執行ス

第二條 本分科會ハ會則第九條ノ規定ニヨリ調査、審査、編譯ノ幹事各三人ヲ設ケソレゾレ本分科會ノ事務ヲ處理ス

第三條 本分科會員ガ提案スル事項アルトキ議案ヲ具申シ分科會ニテ議決セルノチ本分科會主任ニ手交シ大會ニ提出ス

ルモノトス

第四條 本分科會ハ會外ノ各機關アルヒハ團體ニ連絡スベキ事項アルトキハ本分科會ヨリ涉外幹事ト協議シテ處理ス

ルモノトス 前項ノ連絡事項ハ報告書ヲ作成シ本分科會主任ヨリ分科會ニ報告スルモノトス

第二節 調 査

第五條 國內國外タルト新舊ノ小説タルトヲ問ハズ本分科會ハ方法ヲ設ケ調査スルモノトス

第六條 前條ノ調査スベキ小説ハソノ種類、販賣數、表紙、挿畫ナド實地ニ調査スベキモノトシ事實上ノ便利ノタメ

ニハ委託シテ調査スルコトヲ得

第七條 調査員ハ調査ニ從事セルノチ調査目錄ヲ作成シ意見書ヲ添ヘ本分科會主任ニ手交シ主任ヨリ分科會ニ報告ス

ルモノトス

第三節 審査

第八條 本分科會ハ調査員ノ報告ヲ得タルノチ調査目錄ニ照ラシテソレゾレ搜集シ審査員ニ手交シテ審査スルモノトス

第九條 審査員ニ手交シテ審査スル小説ハマズ分配シテ閱讀セシムベシ、審査員ハ論評及ビ意見書ヲ添ヘ本分科會主任ニ手交シ主任ヨリ分科會ヲ經由シテ大會ニ報告ス

第四節 編譯

第十條 本分科會ノ編譯員が執行スベキ事務ハ左ノ如シ

- 一 小説ノ論評ヲ選譯スル
- 二 小説ノ歴史及ビ小説家ノ傳記ヲ選譯スル
- 三 本分科會ノ文書ヲ編集スル
- 四 調査目錄及ビ意見書ヲ編集スル
- 五 審査ノ論評及ビ意見書ヲ編集スル

第十一條 前條ニ列セル編譯ノ各項ハ隨時本分科會主任ニ手交シ主任ヨリ分科會ヲ經テ大會ニ報告ス

第五節 附則

第十二條 前三節ニ列セル各項ノ事務ハ指定サレタル幹事ガソレゾレ處理スルホカ本分科會員ガ一項アルヒハ數項ヲ選ビコノ細則ニヨリ處理スベキモノトス

第十三條 本細則ハ教育部ニヨリ批准サレタル日ヨリ實行ス、モシ事宜ヲ盡サザラバ本分科會ニヨリ改訂シ教育

部ニ請フテ確定スルヲ得

要するに、つぎの二項目の作業をおこなうということである。

(一) 小説を審査する。

そのさい表紙（おそらく表紙の圖案）挿畫についても審査する。

(二) 外國の小説、評論、文學者の傳記などを翻譯する。（第十條一は「小説ノ論評」となっているが、以後の討論のなかでは小説の翻譯も議論されている。）

ところで、審査をおこなうためには基準がなければならない。そこで、つぎのような基準が作成された。

これは、小説を八種類に分類し、分類別に基準を定めたものである。この基準にてらして、小説は上等、中等、下等の判定をうける。そして、上等は推薦し、中等は放任し、下等は禁止するという措置がとられるのである。

小説審査ノ基準^①

小説ノ種類ハ實質上ヨリコレヲ言ヘバ分ケテ八トナスベシ

一 教育ニ關スルモノ

二 政事ニ關スルモノ

三 哲學及ビ宗教に關スルモノ

四 歴史地理ニ關スルモノ

五 實質的科學ニ關スルモノ

六 社會情況ニ關スルモノ

周樹人の役人生活

七 寓言及ビ諧語

八 雜記

教育ニ關スル小説ハ理論適切ニシテ吾國ノ國情ニ合スルモノヲ上等トシ、詞義平穩ナルモノヲ中等トシ、思想偏僻或ハ毫モ意義ナキモノヲ下等トス

政事ニ關スル小説ハ宗旨純正、敘述詳明、國民ノ常識ニ有益ナルモノヲ上等トシ、未ダ精美ナラザルモ流弊ナキモノヲ中等トシ、立意偏激或ハ敘述ノ誤多キモノヲ下等トス

哲學及ビ宗教ニ關スル小説ハ理想ハ高尚純潔、以テ道德教育及ビ國民教育ノ速^キバザルヲ補助スルモノヲ上等トシ、平正通達ナルモノヲ中等トシ、意ノ荒渺或ハ迷信ニ涉リ^テ過^リグルモノヲ下等トス

歴史地理ニ關スル小説ハ取材精審、觀感ニ資スルニ足ルモノヲ上等トシ、事實ノ謬ラザルモノヲ中等トシ、疏誤太リニ多ク或ハ語猥褻ニ涉ルモノヲ下等トス

實質科學ニ關スル小説ハ眞理ヲ闡明シテ學識ニ裨スルモノヲ上等トシ、敘述ニ訛^ヲリナキモノヲ中等トシ、學術研究ノ名ヲ借りテ支節離奇、頗ル流弊ニ^ナズムモノヲ下等トス

社會情況ニ關スル小説ハ社會ヲ改良スルヲ以テ宗旨トシ、詞ト意ト俱ニ精美ナルモノヲ上等トシ、記載翔實、見聞ヲ廣ムルニ足ルモノヲ中等トシ、描寫ハ猥褻ニシテ道德及ビ風俗ニ害アルモノヲ下等トス

寓言及ビ諧語ノ小説ハ言ハ近キモ指ストコロハ遠ク人ヲシテ深省ヲ發セシメルモノヲ上等トシ、精意ハナケレドモ尙^ナ誕妄少キモノヲ中等トシ、輕薄佻達、風化ヲ傷ツクルモノヲ下等トス

雜記ノ一類ハ内容最モ雜、ソノ最モ重要ナ部分ヲ擇ブニハナホ以上ノ七項ノ基準ヲ以テ審査スベシ

附 注

上等ノ小説ハ方法ヲ設ケテ獎勵シ、中等ナルモノハ放置スルガヨク、下等ナルモノハ方法ヲ設ケテ制限シ或ハ禁止ス

各種ノ小説ノ表紙及ビ線畫ノ挿畫ナドハ、イズレモ上列ノ基準ヲ參考トシ、ソレゾレ審査スベシ

ところで、小説分科會は基準を定め、それにもとづく措置を定めたが、「小説審査ノ基準」は小説分科會の申し合せのようなもので、現實にこれを実施する力は分科會にはない。それで教育部をつうじ、教育部から警察や書店組合に通告し、でもらわなければならない。そのためにはまず教育部に上申しなければならないのである。上申は分科會で決議することに始るが、決議するには分科會に提出する議案を準備しなければならない。

議案（原案）は主任の指名した會員によつて起草されている。

このようにして、まず、つぎの議案が採擇された。

小説ノ善導改良及ビ禁止辦法議案^①

小説分科會議決

小説ヲ改良スルニ専ラ禁止スルヲ事トスルハ、仍恐^{ナホ}ラク本ヲ正シ源ヲ清クスルノ法ニ非ズ。一面ニハ公文書ヲモツテ自ラ取締リヲ行ハシメテソノ本源ヲ理シ、禁止ノ時ニハアハセテ各關卡ニ通知シ、眞劔ニ搜檢シ、以テソノ來路ヲ絶チ、マタ書賣ノ販賣ハ書ノ内容ヲ問ハズ、禁止ノ時ハ禁止ノ書目ヲ各商人ニ通知シ自ラ戒慎セシムベシ。今辦法ヲ左ノ如ク定ム。

一、部ニ請ヒテ書業組合ニ通知シ、並ビニ各省巡按使ニ通達シ組合ニ命ジテ出版社ニ轉達セシメ、今後自ラ取締リヲ行ヒ、社會ニ有害ナル小説ヲ復タ印刷發行セザラシム

一、新聞社ガ附載スル小説ニシテ毎ニ甚ダ風俗ヲ妨害スルアルモノハ、部ニ請ヒテ内務部並ビニ各省巡按使ニ公文ヲ發シ、各新聞社ニ轉達セシメ、注意セシム

一、部ニ請ヒテ禁止ノ書籍目錄ヲ順次財政部及ビ稅務處ニ公文ヲ發シ各關卡稅局ニ轉達、書目ニ照シテ搜檢處置セシム

一、部ニ請ヒテ禁止ノ書籍目錄ヲ順次書業組合ニ通知シ、并セテ各省巡按使ニ通達シ、各組合ニ命ジテ書舖ニ轉知シ、自ラ取締リヲ行ヒ、販賣ヲ停止セシム

これを教育部に上申するにさいしては上申書が添付され、教育部はこれを裁可したが、裁可には批語が記されている。

上申スルニ本會ニ於テ議決セル小説ノ勸導改良及ビ禁止辦法議案謹ミテ鑒核施行ヲ請フ事

窃ニ維^ヒフニ小説ヲ改良スルハ必ズ勸導ト查禁ヲ兼ネ施シ並ビ進メテソノ效乃チ彰カナリ。茲ニ本會ノ議決ヲ經テ小説ノ改良勸導及ビ查禁ノ辦法四條ヲ清單ニ理合抄シ、上申シテ大部ガ鑒核施行センコトヲ請ヒ、謹ミテ教育總長ニ上申ス

教育部批。上申ニ據リ已ニ悉ス。議スルトコロノ小説ノ改良ノ勸導及ビ查禁ノ辦法ハ尙ホ行フ可キニ屬ス。惟ダ第三項ハ先ヅ北京稅局ニ由リ試辦セシムベク、察知ヲ俟チ并ビニ窒碍無クンバ、再ビ各省ニ推及シテ可ナリ。此ニ批ス。しかし、まえにものべたように、禁止するばかりではなく、「優良ナル小説」を推薦する方法も講じたのであった。

優良ナル小説ノ目錄ヲ公布スル議案

小説分科會議決

基準ニ照シテ下等ニ編入セル小説ハ法ヲ設ケテ制限或ハ禁止ス。スレバ則チ上等ノ小説モ亦、法ヲ設ケテ提唱スベシ。今法ヲ擬スルコト左ノ如シ。

一、上等ノ小説ハ審核ノトキ評語ヲ加ヘテ社會ノ參考ニ供スベシ
一、上等ノ小説ノ目錄及ビ評語ハ本會ノ議事録ニ登載スル外ニ教育公報及ビ各種ノ新聞雜誌ニ送リテ掲載スベシ
右の「公布スル議案」の上申書と教育部の批語はつぎのとおりであつた。

本會ノ議決セル優良ナル小説ノ目錄ヲ公布スル議案ヲ上申シ謹ミテ核定ヲ請フ事

窃ニ維フニ小説ヲ改良スルノ道ハ消極ト積極ノ兩端ヲ並重シ制限ト禁止ノ辦法アリ以テソノ不良ヲ屏斥セシム。スレバ則チ亦必ズ兼籌シテコレヲ提唱鼓勵シ方ニ風聲ヲ樹テ以テ正鵠ヲ懸ケン。庶バ善書競ヒ出デ風化日ニ良キニ幾ン。茲ニ本會ノ議決ヲ經テ優良ナル小説ノ目錄ヲ公布スル案一件アリ、理合抄録シテ大部ニ上申送致シ核定施行ヲ請ヒ、謹ミテ教育總長ニ上申ス。

教育部批。上申ニ據リ已ニ悉ス。議セルトコロノ優良ナル小説ヲ公布スルノ一案ハ尙ホ合ハザルハ無ク、仰グニ即チ議セルトコロニ遵照シテ妥慎ニ辦理セヨ。此ニ批ス。

以上のような事務處理上の規則を制定しても、なお實際上の進行に支障があつたのだろうか、通俗教育研究會は、さらに「小説獎勵規則草案」、「小説分科會進行手續案」を制定している。

前者は草案であるが、教育部は、さらに褒狀、すなわち表彰狀の形式などを定めて上申せよ、という條件をつけて承認している。したがって、右の規則の表題の下「草案」の二字は削つてもよいのである。

これによれば、「上等」と判定された小説には、さらに甲種、乙種、丙種のどれかの表彰狀が授與されるが、甲種は創

作にかぎられ、翻譯は乙種である。隨筆、筆記の類は丙種である。

小説獎勵規則草案

第一條 凡ソ新著新譯ノ小説ニシテ本會ノ審査基準ニ依據シテ上等ト認メラレタルモノハ分別シテ左ニ列スル褒狀ヲ授與ス

甲種褒狀

乙種褒狀

丙種褒狀

第二條 自撰ノ小説ニシテ本會ノ審査ヲ經テ人心風俗ヲ裨益スルアリト認メラレタルモノハ甲種褒狀ヲ受領スルヲ得
第三條 外國人ノ舊著アルヒハ新撰ノ著名小説ヲ逐譯セルモノニシテ本會ノ審査ヲ經テ我國人ノ道德智識ヲ補助スベシト認メラレタルモノハ乙種褒狀ヲ受領スルヲ得

前項ノ小説ハ本會ニヨリ原書ヲ調取シソノ譯セルトコロノ當否ヲ審査スベシ

第四條 古今中外ノ雜事瑣聞ヲ采輯シテ彙メテ一書トナシ劄記ニ類スルアリテ本會ノ審査ヲ經テ社會ニ有益ト認メラレタルモノハ丙種褒狀ヲ受領スルヲ得

第五條 褒狀ハ著作人ニヨリコレヲ受領ス

第六條 凡ソ褒狀ヲ受有シタル書ハ本會ニヨリ登報シテコレヲ表彰スルヲ得

つぎの「小説分科會進行手續」(案)には、かなり積極的な姿勢がうかがわれる。すなわち(四)乙の「現今社會ニ於ケル某種ノ事項風俗ニ對シ勤懲スルトコロ有ラント欲シ」というような箇所である。審査する小説についても、單行本、

雜誌小説（一）乙。原文「小説報」の「報」はこんにちでは新聞をいうが、當時は雜誌にも用いた」、新聞小説というように、出版型態ともあわせて考慮にいれている。

小説分科會進行手續案 小説分科會議決

謹ミテ按ズルニ小説ハ本會ノ研究ノ一部ニシテ小説分科會ノ一切ノ規則細則ハスデニ具備セリ、茲ニ特ニ進行手續ニ就キテ一草案ヲ具シ敬シク公決ヲ請フ

（一）小説ノ種類

甲 小説

乙 雜誌小説

丙 新聞ニ附載ノ小説

（二）審査基準

已ニ規定アリ

（三）徵取

甲 會内ニテ自ラ購備ヲ行フ

乙 通俗圖書館ニ所有スルモノヲ借ル

丙 書信ヲモツテ各書坊ガ已ニ出版及ビ續イテ出版ノ小説ヲ本會ニ一部贈送セシメル

丁 私人ノ投贈

（四）編譯

周樹人の役人生活

甲 小説ノ單行本雜誌ノ關係及ビ要旨ヲ撰敘シ以テ編譯ノ基準トナス

乙 本會ハ現今社會ニ於ケル某種ノ事項風俗ニ對シ勸懲スルトコロ有ラント欲ス、コレヲ書坊ト商シコノ方針ニ本ヅキ照ラシテ撰擬ス

丙 本會ハ某種ノ體裁ノ小説ハ最モ社會ヲ歆動シ易シト認定ス、コレヲ書坊ト商シ照ラシテ撰ス

丁 以上ノ二項ニ限定セズ祇ダ世道人心ニ有益ナル範圍内ニ於テ撰擬ヲ勸令セシム

(五) 獎勵

甲種褒狀

乙種褒狀

丙種褒狀

細則ハ別ニコレヲ訂ス

(六) 禁止

甲 部ニ上申シテ辦理ス

乙 書信ヲ商會ニ致シテ協助辦理ス

以上の二つの規則は一九一六年三月十五日に教育部により承認されている。この年は一月一日より袁世凱が帝政を實現したので、日付けは「洪憲元年」と記されている。

周樹人はこの年の二月十四日に小説分科會主任を辭めているので、この二つの規則にどの程度關係したかわからない。ただし社會教育司第一科長としては、無關係ではありえなかつたであらう。

小説分科會のこうした細則と基準は、ほぼほかの分科會にも共通するものであるが、演劇、講演分科會の細則はわからない。しかし演劇分科會の審査の基準とそれが意圖する措置は『教育雜誌』に紹介されている「演劇改良議案」によつて知ることができる。

「演劇改良議案」はつぎのようなものである。⁽¹⁶⁾

演劇改良議案

演劇分科會議決

演劇ノ道ハ至ツテ風化ニ關シ良ケレバ忠ヲ教ヘ孝ヲ教ヘ良カラザレバ盜ヲ誨ヘ淫ヲ誨フ。吾國舊ニ演劇アリ、ソノ編製ノ初ト實ニ勸善懲惡ノ苦心アリ、以テ風ヲ移シ、俗ヲ易フルニ足ルモノ固ヨリ所在スル多ク有リ。然レドモ有意本ヨリ自ラ正シカラズ、或ハ後來演唱善ナラズ本意ヲ失フヲ致シ、以テ誘ヲ啓キ性ヲ惡クスルニ足ルモノ亦少ナカラズ、浸淫濡染、人心風俗ニ影響スルモノスデニ深シ。故ニ今日ニ在リテ社會ヲ改良セント欲セバ演劇ヲ改良スルニ非レバ功ヲ爲サズ。演劇ヲ改良セント欲セバ、亦苛細ニ流ルルハ宜シカラズ。此ノ議案ノ主張ハ先ニテハソノ太ニ甚シキモノヲ去ラントスルニ在ルノミ。辦法ヲ擬シ具ス。

一、全部禁止

(甲) 基準

凡ソ全部情詞淫邪、風化ヲ傷フアリテ匡正ヲ施ス能ハザルモノハ宜シク全部禁止ヲ加ヘ根株ヲ絶チ社會ニ流毒セシムル無キヤウ務ムベシ

(乙) 辦法。約シテ二種ニ分ツ

周樹人の役人生活

- 一、各種ノ劇目ヲ調集シ、本分科會員が先ズ北京ノ各劇園ニ常演ノ演劇、皮黃、秦腔等ノ如キ查明シテ分別ニ記シ出デ、以テ審核ノ預備ト爲ス。ソノ戲目詳悉スル能ハザルモノハ則チ本分科會ノ委員臨時ニ之ヲ調査ス
- 二、各會員及ビ調査員ノ演劇禁止ニ關スル報告ハ須ラク本分科會ノ議決ヲ經テ後、隨時ニ演目ヲ開列シ、部ニ詳シテ内務部ニ咨行シ警察廳ニ轉飭シテ禁止ヲ實行ス

二、部分刪改

(甲) 基準

凡ソ一二ノ過場或ハ一二ノ語淫邪ニ涉及シ風化ヲ傷フアル、及ビ情節離奇ニシテ觀聽者ヲ淆亂スルモノハ宜シク酌豫シテ刪除スルカ或ハ更易スベシ

(乙) 辨法

約シテ三種ニ分ツ

一、各種ノ脚本ヲ搜集ス。

搜集ノ方法ハ分チテ三項トス

一、清宮南府ニ向ヒテ借鈔ス

二、正樂育化會及ビソノ他ノ演唱機關ニ向ヒテ徵集ス

三、本分科會員ニヨリ實地ニ調査ス

二、本會が蒐集セル脚本ハ本分科會ノ主任ヨリ若干員ヲ指定シテ審核ニ從事、酌シテ刪改ヲ加ヘシム。但シ深文ヲ用ヒズ能ク演劇ノ體裁ニ合スルモノヲ以テ主ト爲ス

三、刪改ノ完竣セル後、本會ノ會員ニヨリ私人ノ資格ヲ以テ演劇中ノ人ニ聯絡シソノ遵從ヲ勸ム。如シ實效無

クンバ則チ本會ヨリ部ニ詳シテ内務部ニ咨行シ警察廳ニ轉飭スルカ或ハ直接ニ警察廳ニ函知シテ諭令シテ暫ク該劇ヲ演唱停止セシム

以上のいくつかの文書は、こんにちでいう「法令」に類した性格のものである。「小説審査ノ基準」は分科會内の申し合せのようなものであるが、しかしこれも具體的措置を定めている。通俗教育研究會は、主としては檢閲をおこなう官製の團體であつたといえよう。

ただし、これが推薦もおこなつたことに留意しなければならない。

三 袁世凱・湯化龍・張一麐

成立の経緯。會員。立案された法令。その強制力。經費の出所。どれをとってみても通俗教育研究會が官製の團體であつたことは、疑うべくもない。そして、これの發足を命じたのは、中華民國大總統、袁世凱であつた。

周樹人、のちの魯迅は、くりかえしていえば、この官製團體の會員であり、かつ分科會の主任、審査幹事であつた。かれは、この袁世凱による官製の通俗教育研究會にどのような感想を抱いたのだろうか。

こんにちの一般的なみかたとしては、袁世凱は「惡玉」である。國を竊み、帝政を復活しようとした。そして一般的な評價として、魯迅は「善玉」である。中國の近代、現代の暗黒なる側面に、斷乎として抵抗した。したがって、のちに文豪、魯迅となる周樹人が、通俗教育研究會に所屬し、ともかくにも實際的な活動をおこなつたのは、かれにふさわしくない。じつは、かれは抵抗し反撥していたのだ。壓制にたいしては抵抗があるものなのである。

このような圖式で兩者の關係をとらえ、この圖式から通俗教育研究會を評價することは可能であろう。じじつ、つぎの

孫瑛の一文はそのような圖式を前提として書かれている。^①

辛亥革命が失敗してのち、袁世凱は國家の政權を盗みとった。袁賊の獨裁支配に反對するため、孫中山らは「第二革命」を發動したが、まもなく袁賊に鎮壓されて失敗した。袁世凱はひとつひとつ敵をつぶしていったあと、皇帝になろうというたくらみを実現すべく準備をすすめた。かれは一方では手下をそのかして「籌安會」を成立させ、公然と「ニセの共和を去って眞の君憲をおこなう」、「民主を廢して君主を立てる」ことを要求すると宣言、帝制復辟のための反革命世論をでっちあげた。また一方ではファシズム特務機關として「軍政執法處」を足がかりに、帝制に反對する革命分子を逮捕し殺害した。

これとともに、もとの「通俗教育研究會」をわがものにし、改組することによって、思想文化を統制し、世論に訴える宣傳の機關に變えようと企てた。一九一五年七月、袁世凱は教育總長湯化龍をして改組の準備工作をおこなわしめ、八月三日に湯化龍は命令を發して魯迅を含む教育部の二十九名の部員を通俗研究會に加入せしめた。しかし、はたしてこのように斷定できるであろうか。

袁世凱と周樹人は直接的に對しあっていたのではなく、その間には教育部というものが介在した。教育總長、あるいは次長が、どのような政治的態度をとったかを、まずみなければならぬ。そのためには、まず袁世凱が、當時どのように動いていたかを、概觀する必要がある。

もともと、袁世凱は帝政を實施しよう、皇帝になろうとする野望を抱いていた。とくに一九一五年の後半、これが露骨にあらわれるようになり、具體的な方策、措置（むしろ策略、陰謀とでもいうべきもの）が表面化した。それが潰えたのは、翌年の三月である。

通俗教育研究會が發足したとき、袁はすでに文官官秩令⁽²⁾を公布して「官」と「職」を分離し、「官」を九等に分けていた。それぞれ三級をもつ「卿」、「大夫」、「士」といった稱號は、その最高位に「皇帝」があるべきであった。皇帝の御璽に相當するものとして國璽を用いることを定めた⁽³⁾。一九一四年十二月二十三日、冬至の日に天壇で天を祭る儀式をおこなった⁽⁴⁾。翌年二月には孔子を祀った⁽⁵⁾。

ひとびとは袁が君主制を復活して皇帝になろうとしているのだと感じたが、かれは平然とこれを否定した。

しかしまもなく、袁の政治顧問、グッドナウ博士が政治機構についての論文を書き、中國のような國では大總統の繼承に困難が生じるから、君主制の設立を提案すべきであり、繼承が法律によって明確に規定されるなら君主制に轉換すべきだ、とのべた。

そのすぐあと、籌安會の最初の宣言が北京の各新聞に掲載された。それには、「アメリカ合衆國は世界で一番古い共和國である。しかし、アメリカの政治理論における偉大なる専門家グッドナウ博士は、政治體制としては君主制の方が共和制よりよいものであり、中國は君主制の方を採るべきだと宣言した」とあった（八月十四日）⁽⁶⁾。

籌安會は一九一五年八月、湖南の政治家、楊度がほかの五人を誘って組織した。ほかの五人というのは胡瑛、孫毓筠、李燮和、嚴復、劉師培である⁽⁷⁾。

籌安會はさらに、各省の將軍や長官（巡按使）、各團體に電報を打ち、國體の問題を討論するために代表を北京に送るよう要請した。しかし、代表が揃うのを待ちきれず、八月二十三日に正式に會の成立を宣言した。さらに北京に住む各省の人間にそれぞれ「公民團」なるものを組織させ、九月一日の參政院の開會を待つて請願書を提出した。山東、江蘇、甘肅、雲南、廣西、湖南、新疆、綏遠などの各省の民意は、國體を變更すること（すなわち袁が皇帝に即位すること）を望んでいる、という形式をととのえたわけである⁽⁸⁾。

袁世凱一派に屬する梁士詒は全國請願連合會を組織、これをもって參政院にたいし、いわゆる國體變更の總請願をおこなった。梁はさらに同會の代表をとおして、參政院が多數の國民の公意を集める機構を設けるように請願させた。

參政院はこの請願をうけいれ、「國民代表大會組織法」を公布した。これにもとづいて各省で國民代表が選舉され、各省に成立した代表大會は、國體について投票をおこない、十一月二十日、全國的に投票が終了した。全國の合計、千九百九十三票がすべて立憲君主に賛成し、反對票、白票は一票もなかったのである。

各省の代表大會はさらに、「謹ミテ國民ノ公意ヲ以テ恭シク今大總統袁世凱ヲ戴キテ中華帝國皇帝ト爲シ並ビニ國家最上完全主權ヲ以テ皇帝ニ奉ジ天ヲ承ケテ極ヲ建テコレヲ萬世ニ傳フ」という推戴書を發した（すべて同文であった）。

十二月初旬、參政院は各省の國民代表大會の委託をうけて總推戴書を袁に上呈した。袁はこれをうけいれず、參政院はさらに第二次の推戴書を袁のもとに上呈した。袁は翌、十二日これをうけいれるとの聲明を發表した。この第二次の推戴書は、參政院で發議があつてから案文が提出され、審議ののち採擇されたものであるが、この間、わずか十五分しかたつていなかった。

袁世凱は帝位に即くことを受諾したあと（正式の即位の式典はまだおこなっていないから）、大總統でもあれば皇帝でもあるという奇妙な状態になった。公文書に「臣」と自稱したり、改行して頭を他の行より高くして「奏請皇帝陛下聖鑒」と書くものであった。政府公報は「大總統命令」ではなく「政事堂奉策令」（政事堂は策令を奉じ）と記し、そのなかでかれは從來「本大總統」といつていたのを「予」と自稱するようになった。「朕」にかなり近い口ぶりである。

袁世凱は、はやくも十二月十二日、懷仁堂において文武官吏（簡任以上）二百餘人の朝賀を受けたが、二十五日には明年を洪憲元年と改元すること、元旦から總統府を新華宮と改稱することなどを定めた。

反對をやわらげるため、かれは長老格の政治家には「臣」を自稱することを免除する案をたて、人選もすませた。さら

に四名には「嵩山四友」の稱號と宮中での特權、年金などをあたえることとした。爵位を設け百二十八人を封じた。宮中では宦官をやめ女官を用いるとも定めた。¹⁵

袁世凱はこれよりさき、九月に、すでに即位式の準備をおこなう大典籌備處を發足させていた。これは外部にはかたく秘密が守られ、十二月中旬になって、ようやく公然たるものとなった。即位（登極）と祭天の儀式のため宮殿の瓦の色を赤色に變えるなどのほか、御座や龍袍、冠、玉璽など、あわせて二千餘萬元の費用がみこまれた。¹⁶

一九一六年の元日からは、中華帝國の稱號と洪憲の新元號を用いた。ただしこれは國內にたいしてのみであった。¹⁷

袁世凱の以上のようなうごきを民衆や政界が甘んじてうけいれていたわけではない。

袁世凱の野望があらわになるにつれ、國內國外の反對も強まった。かれが一步步、皇帝の位に近づくことは、同時に一段また一段と反對が猛烈になることでもあった。

袁が參政院の請願をうけいれるとすぐ、徐世昌（國務卿、袁の義兄弟）は病氣になり、引退、その職務は陸徵祥にひきつがれた。段祺瑞、馮國璋ともに「病氣」となった。¹⁸

梁啓超は「異なる哉、いわゆる國體問題」を發表、楊度や籌安會の方向に反對した。梁の論文の出版をやめさせた袁は、嚴復に反論を依頼したが斷られた。梁は天津の日本租界で暮らして、アメリカにゆくと稱して旅券を申請して袁をあざむき、上海へゆき、馮國璋と反帝政運動について協議した。¹⁹

かつて雲南の都督であった蔡鍔も雲南省の昆明にゆき、この省を支配していた唐繼堯らと會談した。²⁰十二月二十三日、かれらは袁世凱にたいし、帝政の廢止と（楊度ら）十三人の有名な帝政推進者を處刑することを求めた最後通牒を發した。雲南は獨立を宣言した。

蔡鍔は三千名の軍隊を率いて四川に入った。四川にいた袁の腹心は五個師團をもって、これを迎えうった。袁は三個師團を援軍として送った。内戦がはじまり、はじめは勝っていた蔡は撤收せざるをえなくなった。袁の軍隊が廣西省にはいったので、廣西は反袁の旗幟を鮮明にし、獨立を宣言し、袁の軍隊を全員武裝解除した。廣東も獨立を宣言しようとしていた。袁軍にたいする反撃がはじまった。

徐世昌が天津から袁に手紙を送り、雲南と妥協をすすめた。²¹

袁が信賴してきた馮國璋は、表面では袁を支持しているようにみせかけていたが、有力な四名の軍閥と連名で電報をうち、帝制を廢止するよう要請しようとひそかに畫策していた。密告によってこのことを知った袁は、すっかり落膽して、「終った。すべては終った」と口ばしした。²²

康有爲からは、痛烈な文面で引退の勸告がきた。²³

國外からの帝政反對の壓力も強まるばかりで、十月中旬、北京の日本代理大使はイギリス、ロシア公使とともに外交部をたずね、帝政實施の延期を申し入れた。十一月にはいると、フランス、イタリアが三國の反對に同調した。袁が帝政實施の請願をうけいれると、これらの國はまたもや抗議した。²⁴

大正天皇が即位したのにたいし、袁世凱は特使を派遣して大總統と同格の大勲位を贈呈する、と日本に申入れ、親王の待遇で特使を歡迎するという内諾をえてあった。いよいよ特使が出發するにあたって、北京の日本公使館は饌別の宴まで設けた。ところが翌々日、日本は突如、特使のうけいれを拒否してきた。秘密のうちに進行していた特使派遣の機密文書が漏洩し、日本は袁と取引して帝政を承認するのではないかとの疑惑の聲が、歐米各國に起ったからである。かれは國際的にもまったく孤立した。²⁵

三月二十二日、袁世凱は、帝位をみとめた十二月十一日の公文書、各省の推戴書をすべて破棄し、準備の活動を停止す

る、と発表した。十二月十一日からこの日まで、八十三日間の皇帝であつた。

袁世凱は實際に「皇帝」だったのだろうか。帝位に即くことを承知した當初は、「臣」を自稱する部下をいましめてはいたが、すでにのべたように一九一六年元旦から、かれは國內では中華帝國の稱號、洪憲の年號（紀元）を用いていた。さらに上海租界内の新聞（中國紙）に洪憲の年號を強制した。しかし、對外的には、なお中華民國、民國總統を稱し、一月二十日には外交部をつうじ、登極の日程は南方の戦争が終るまでは決定しないと通告した。自分を中心とした狭い範圍では、皇帝だったのである。

參政院は帝位承認を取り消すという袁の提案を採擇した。三月二十五日のことである。十二月十一日と同じく、滿場一致だった。

帝制が取消されても、國內は平靜にもどらなかった。山東省、四川省、湖南省がさらに獨立を宣言し、廣東省には軍事政權が樹立された。

袁世凱は段祺瑞を首相に任命し、政府の全責任をゆだねた。袁が引退すれば、副大總統の黎元洪の昇格となるが、一九一二年の臨時約法と一九一四年の憲法では規定を異にし、段祺瑞はいすわりを續けることを欲していたので、南京の馮國璋が第三勢力として浮上した。袁世凱に忠誠を誓うのは、安徽省の倪嗣冲と淮河地方の張勳だけだった。

病氣が進行しつつあつた袁世凱は六月六日に死去した。あと三カ月と數日で、滿五十七歳になるはずだった。

まえにものべたように、馮國璋ら五名の面從腹背の畫策を知ったとき、かれは「すべては終つた」とくちばしつたのであつたが、それにつづいて、「昨夜大きな星が落ちるのをみた。これは二度目で、一度目にみたときは文忠公（李鴻章のこと）が死んだ。こんどは自分が死ぬかも知れない」といって歎息したのだった。そして、先祖代々、五十九歳以前に死んでいるから、すでに五十八歳になっている以上、五十九歳を迎えることはできないかも知れない、といった。これは數

え年でいったのである。かれは自分が恐れたとおりの死を迎えたといえよう。

以上のような袁世凱の動きをみると、かれのもとにあった各部の總長、すなわち各省大臣がまったくかれに服従していたと考えることはできない。かりに服従していたとしても、急速に政治的には別の活路をさがすようになったであろう。あるいは、服従は、じつは面従腹背であった。

通俗教育研究會を發足させた、教育總長、湯化龍はどうだったろうか。

湯化龍。字は濟武。湖北省蘄水の人。當時四十一歳。

すでにみたように、湯化龍は、たしかにこの會の改組（ほとんど新しく組織した）を推進した。教育部員に命令を發して、會に加入させ、兼職させた。袁世凱に協力したといえよう。

しかし、袁世凱の帝政實施への野望が露骨になると、教育總長を辭職している（十月五日付）。

辭職したのは本意でなく、袁によって罷免されたととることもできるが、罷免されたとすれば、いっそう袁との矛盾は深いものがあつたとしなければならない。

清末にすでに湖北省諮議局長であつたかれが袁にたいして態度が明確でなく、はじめに協力し、ついで絶交したと考えるのは困難である。辭職したあと、北京を去って天津、さらには上海に赴き、反袁運動を展開している。

民國初期の教育總長のうち、教育にたいして自己の見解を表明したのは、蔡元培、湯化龍、范源濂の三人であつたといわれる。

湯化龍の理想とする教育は「國民教育」であつた。世界にたいして國民固有の特性を發揚するとともに、世界の競争に伍することのできる、生活能力を養成するというものである。かれによれば、國民固有の特性の模範的人物は孔子であつた。

袁世凱の見解もまた「國民教育」の重視にあり、湯と袁は見解を一にするかのものであったが、袁は國民固有の特性は、大仁、大智、大勇にあり、これを發揮する基礎は忠、孝、節、義にあると主張した。大勇をかかげるのは、かつて清朝のために西洋式の軍隊を養成、訓練した経験からきているのかもしれない。

通俗教育研究會のことに着手するよりさき、湯は國家豫算のなかに教育費の占める割合があまりにも少ないのに憤慨、建白書を提出している。袁が通俗教育研究會にたいし、一萬五千四百元の經費の支出をみとめたのは、湯の憤慨をなだめる意圖もあつたであらう。だが、ただそれだけでなかったのも事實である。

袁はいよいよ帝政を實現しようとしていた。湯にたいして要求するところがあつたろうとおもわれるのである。帝政の世論づくりである。

しかし、湯化龍は自説を曲げなかった。湯と氣脈を一にする次長、初代會長の梁善濟は成立總會において、つぎのように訓示した。

湯總長はあいにく病氣のため休まれ、出席できません。諸君にたいし、とくに鄙人に本會の宗旨を概略つぎのように告げよと申されました。

社會を改良するのは、こんにち最も緊急の任務である。……こんにち社會はまことに腐敗しており、……ここに本會は成立をみたのであるから、社會改良の責任は他に轉嫁することはできない。

本會の今後の目的は二つあるのみ。一つは國民の自發性を發動させること、一つは國民の愛國心を發揮させること、これである。……自發性も愛國心も……多くの教育家が種々の方法をもってこれを育成しなければならぬ……。

その方法が一に曰く小説、二に曰く演劇、三に曰く講演なのであります。

……外國の演劇はつねに冒險尙武の精神を含んでおります。……舊社會の習慣を利用して新社會の知識を輸入する

なら、その効果は必ずや大であります。

この訓辭のように通俗教育研究會が進むのは、袁世凱は不満であつたという。そこで教育總長を更迭する決定を下した。後任は政事堂機要局長の張一麐であつた。

張一麐。字は仲仁。江蘇省吳縣の人。當時五十歳。

かれはもともと、袁世凱が直隸總督であつたとき、幕僚として文書の起草にあたっていた。袁が軍機大臣として北京入りするさい、これに隨行、袁のために詔令、起草した。袁が大總統になると秘書官となり、國務院が政事堂に改組されると、その機要局長となつたものである。

教育總長に任じられた張が、大總統に謁見し、重要な指示をあたえられたことは、張の登廳第一日の訓示にみえている。それによると、袁は「社會教育は普通教育と並んで重要である」といつたという。張は袁のこの指示を傳達したあと、「通俗教育研究會の各會員、またよくこの意を仰ぎ體得して、會務の進行にその力を盡されたい」とつけ加えた。

張はさらに次長の梁善濟の免職を上申、梁は罷免される（十月十九日付）。つぎの次長の袁希濤が着任するや否や、これを待つていたかのように通俗教育研究會の第二回總會をひらく（十月二十八日）。

成立總會でもあつた第一回總會から二ヵ月たないうちに、教育總長、次長がいれかわるという、あわただしさであり、しかもこのあわただしい人事異動は通俗教育研究會に關係する性質のものであつた。

張一麐は總會でつぎのように訓示した。

中國の社會は遊牧時代から宗法時代にはいつた。そして宗法社會は中國社會の精神となり、家族は家長の命に従い、孝悌貞節が美德となり、人心にあらわれ普及して風俗にまでなつた。これ、まことにわが社會の特長である。世界をみわたしても通じるもので、わが國が長じるところは保存しなければならぬ。

さらに、つぎのようにのべた。

積極面においては忠孝の意を寓したきわめて興趣ある小説を編纂し、しかも文詞情節は人をひきつけ、社會でひろく讀まれるようにする。

湯化龍は、社會改良のために、國民の自發性、愛國心を養成することが、通俗教育研究會の任務である、とした。これにたいし、張一鶚は、家長の命に従い、孝悌貞節の美德を保存し、さらには忠孝を中心においた小説を普及することである、となえたのである。これは袁世凱に近い見解であって、孫瑛は、「新しく任命された教育總長張一鶚は大會において大いに封建主義を鼓吹し、公然と賣國奴袁世凱の帝制復辟のためにラッパを吹いた」といっている。³⁵

とはいえ、張一鶚は翌年の春に、辭職する（一九一六年四月二十三日）。

かれはもともと、帝政にあまり熱心に協力しなかったともいわれ、「袁ノ帝政運動ニ不同意ヲ唱ヘテ〔機要局長を〕辭シ」たと記す人物事典さえある。「袁世凱の帝制復辟のためにラッパを吹いた」と斷定するのは無理ではないだろうか。陶菊隱はつぎのように、のべている。³⁷

袁が帝政をすすめたことは、全國人民の切齒唾罵をうけた。親戚親友、およびかれにしがみついて立身出世をはかる政治的寄生蟲のなかに、袁とのあいだに矛盾があるため、異なる程度の非協力的態度がみられた。

趙爾巽は籌安會の宣言をみるや、床になげすて、それっきり清史館に出勤しなかった。徐世昌は辭職が准許されるのをまたず、官邸をでて蝴蝶胡同に移った。

教育總長湯化龍、總檢察長羅文幹、參政熊希齡らもつぎつぎに辭職、あるいは休暇を申請して北京を離れた。政界の人物が辭職し、休暇に申請することは、新しい皇帝が即位するまえ、ひろまっていた風潮であったのである。

政事堂機要局長張一鶚は帝制運動に熱心でなかったため、袁によって表面は榮轉、實際は降任といった手段で教育

總長に轉出させられた。

しかしひるがえって考えると、張一鑾の教育總長就任は徐世昌が辭職した直後であり、辭任したとはいっても、袁が帝制をとり消したあとである。それほど袁にたいして強い拒絶を示したとは思えない。長い期間にわたって秘書をつとめたつながりは、急には絶つことができなかったのかもしれない。

總會における訓辭は、袁世凱のためというよりは、かれの平素の思想を開陳したという面も多分にあったのかもしれない。あるいは袁の策略にひかかって「榮轉」だと信じ、得意満面、ながながと訓辭をたれたとも考えられる。長年にわたって、かれは秘書、それも文書の起草という裏方であったから、突如、はなやかな舞臺にひっぱりだされて、このときばかりは袁のために協力するつもりがあったのかもしれない。

かれは教育總長を辭めたあと、副總統馮國璋の秘書長に返り咲き、馮の大總統就任にともなうて總統府秘書長、徐世昌が大總統になると顧問となった。民國初期の官界を圓滿に歩いた人物といえよう。

では、教育部次長はどうであつたらうか。

袁希濤。字は觀瀾。江蘇省寶山の人。

清朝のときの舉人で、上海廣方言館教員にはじまって教育畑を歩き、教育部入りをしてからはず普通教育司司長であつた。張一鑾が辭職すると、かれもこれに同調するが、范源濂總長のもとでふたたび次長、以後、總長代理をつとめると二回であつた。「人物溫良、すこぶる人の困窮を助け、青年の教育のために私財を分つことを惜まなかつた」。當時四十五歳。

通俗教育研究會の三つの分科會を統轄し、小説分科會にも毎回出席した總務幹事の高步瀛はどのような人物であつたか。高步瀛。字は閔仙。京兆霸縣の人。當時四十二歳。

清朝の舉人で畿輔大學、直隸優級師範學堂の教員をへて日本に留學。歸國後は直隸省の教育界にあった。ついで清朝の學部に入り（主事）、中華民國成立後、教育部僉事、一九一五年七月から社會教育司長であつた。

昇進したばかりの司長として、通俗教育研究會ではかなり熱心に推進役をつとめている。

かれの司長在任は、一九二七年七月までつづく。總長や次長、あるいは參事、他の司長がよく交替したのに比べると、異例ともいふべき長期にわたつた。

當時の中國の政治家は、むしろ政客とでもいふべきであつたろう。國務總理（國務卿）は、袁世凱大總統のもとで、唐紹儀、陸徵祥、趙秉鈞、段祺瑞、熊希齡、孫寶琦、徐世昌、といれかわつている。

教育總長は、蔡元培、范源濂、劉冠雄、陳振先、董鴻禕、汪大燮、嚴修、湯化龍、張一鶚、張國淦といれかわつている。しかし、次長になると、范源濂、董鴻禕、梁善濟、袁希濤、李國珍、というようにやや安定している。政客として政界を遊泳するということが比較的になつたであらうと想像されるのである。この階層が結びついたのはせいぜい總長までであつたろう。總長をとり越えて、國務總理、あるいは大總統と結びつくということは、不可能であつたろう。

通俗教育研究會の會長が教育次長であることはまえにものべたとおりである。次長は總長のおもわくをたえず考慮したといへ、そこにおのずから異質のものがあつたと考えられる。ただし、湯化龍——梁善濟、張一鶚——袁希濤の總長——次長の上下關係は比較的に安定していたから、それだけ袁世凱の意圖の上意下達は順調であつたと考えられる。

しかし、袁世凱をとりまく政界のうごきは、すでにみたように、必ずしも袁にとって満足すべきものではなかつた。したがって、通俗教育研究會が、一見、もっぱら袁の帝制實現に奉仕したかのようであつたとしても、固定的に考えることはできない。

四 分科會の審議と周樹人

周樹人が主任として主宰した、小説分科會の會議は、あわせて十二回であつた。

かれは毎回の會議の議長をつとめたが、どのように討論をまとめたのだろうか。

分科會は記録係において議事の進行を記録していた。要約筆記であるが、討議の模様をうかがうことができる。すなわち、『通俗教育研究會報告書』收録の「分科會會議錄」である。

また、この「會議錄」をもとに、分科會における周樹人の活動を再構成した勞作、孫瑛『教育部における魯迅』があり、參考とするに足りる。必要なあいには、これを「會議錄」と對照しよう。ただし書名にみられるように、これは周樹人を「魯迅」として扱っている^①。

まず、第一回、第二回の會議は、事務處理の「細則」作成にあてられた。第一回の會議で、起草者三名が、主任である周樹人によって指名されているが、「細則」になにをもちこむか、討論された様子はない。「細則」が定めた小説分科會のなすべき作業については、この分科會が発足したときに、すでにわかつていたのである。おそらく、教育部が召集した豫備會議で、すでに小説の審査をおこなうという大綱は決定していたのである。第二回の會議で起草者の原案をもとに、若干の字句を修正、「細則」は採擇された。その内容は、すでにかかげたとおりである。

主任としては周樹人は、この小説の審査をおこなうという大綱に疑問を呈していない。

第三回から第六回までは、採擇された「細則」にもとづいて、分科會をどのように運営するかが議論された。小説を審査するとしても、世上に泛濫する小説はあまりにも多い。まず調査して、審査すべき對象を決めなければならないのでは

ないか。

そこで、第三回の會議において、主任である周樹人は、小説分科會のなすべき作業は、編譯、調査、審査、の三項目であるが、編譯については問題はないとして、討議の對象外におき、調査と審査といずれがさきか討論したい、と提起した。これをうけて、庶務幹事、徐協貞が三項目の作業に輕重をつけ難いが、手続きからすれば調査がさきであろうが、その必要がなければ審査にかかってよい、と發言した。

このあと、周樹人は、審査を實施したあと、つぎのように分類できよう、と發言している。すなわち――

一 絶対に禁止するもの

二 禁止も推薦もしないもの（推薦の原文は「提唱」）

三 社會に有益なもの。推薦してよい

これに賛成したのが、總務幹事の高步瀛で、つぎのようにのべた。

――宗旨が純正でないもの、社會風俗に有害であるものは禁止すべきであろう。推薦については、舊小説は複雑すぎるから調査困難だが、新小説のなかに實際に社會風俗に有益なものは、方法を講じて推薦すべきである。

そこで討論は、では審査にあたつて基準をまず示すべきであるが、教育部にそのような基準があるのか、ということになった。また、新舊の小説は數千を下らない。これを調査して表に作成できるのか、という疑問もでた。各人が表を作成してもちより、それを集めて總表を作成するという提案があり、まず禁止すべきものは一日も早く禁止せよ、でないと社會が一日の殃わざわいをうけるという發言もあつた。

徐協貞が、數人を推薦して基準を作成するか、それとも各人がそれぞれ意見書を提出し、これを討論するか、と發言。高步瀛が教育部にある基準はきわめて簡單なので、起草者を指名してあらためて作成するのがよい、と提案。これにたい

し、起草したものをさらに討議して完全なものにする、かつ主任は小説の審査にすこぶる経験があるから、協議できようという發言があり（發言者は畢惠康）、周樹人が起草者二名を指名して、解散した。

この第三回の討議からうかがわれるのは、教育部ではこの通俗教育研究會の發足以前に、すでに小説を審査していたということである。しかも討議のなかで周樹人はこれに経験があるとして名前があげられている。周樹人はすでに、小説の審査を擔當していたのである。小説分科會主任に任命されたのも、これと關係があろう。

このあたりのことは、いままで知られていなかった。教育部にすでに小説審査の基準があったこと、周樹人が教育部にあって小説の審査に従事したことは、分科會の議事録から知られる新しい事實である。

ただし、目下のところ、この教育部にあった小説審査の基準については、わからない。周樹人がわざわざ三種に分類することを提案していることから推測すると、基準はただ禁止するものの範圍を定めたにすぎず、審査は禁止するためのものであったろう。

そこで周樹人は審査の結果「推薦」するものがあってよい、と提案したのであろう。ただ禁止するための審査に、かねて不満を抱いていたのではないかと想像される。

しかし、すべての小説が禁止されるか、さもないければ推薦される、ということはありません。禁止もされず推薦もされず、という部類もありうるわけで、こうして三つの分類（三段階の評価）が提案されたと考えられる。

周樹人のこの提案は、教育部の外郭團體の事務處理上の（審査も事務處理と考えるなら）一つの思いつき、として、周樹人であった魯迅の傳記につけ加えることができよう。しかし、それまで禁止することが唯一の措置であったのに對峙して、推薦というもう一つの措置を新しく設定したとみるなら、やや誇張して、これは文化政策の新しい方向であると評價できるであらう。

もちろん、ではどのような小説が推薦されたか、が問題である。また、推薦の一方で禁止措置は依然として存在したことも忘れてはならない。

第四、五、六回の會議は、審査の基準をめぐって討議が進行する。

第四回には、起草者が、「小説審査ノ基準」を報告、小説はあまりに繁多なので、まずこれを分類したとのべ、分類した名稱をめぐって討論がおこなわれ、原案に若干の修正が加えられた。

政治小説については、起草者から、これに含まれる無政府主義、社會主義は、わが國は共和國であるとしても、やはり制限を加えるべきである、と説明があった。

高歩瀛はさらに、上、中、下の三等に分け、上等は推薦し、中等は放任し、下等は禁止し、區別するなかにも褒貶の意を寓したらよい、と提案。

討論ののち、これらの意見をいれて修正することになり、修正加筆者を指名、第五回を修正案が提出され遂條審議した。こうして、すでに前述した、「小説審査ノ基準」が採擇されたのであった。二二九頁参照。

いよいよ、この「基準」にもとづいて、小説の審査にとりかかろうとしたとき、研究會の第二回大會が開催される。

教育部の總長、次長が更迭し、新任の總長が訓辭をのべ、そこで、孝悌貞節、忠孝といった封建的徳目、イデオロギーが注入された。二四八頁参照。

新任の總長、張一麀がこのような強壓的な態度をとった以上、これは周樹人の反感と抵抗を招かずにはいないであろう——と想像することは容易である。そして孫瑛はこのような想像に出發して、大會以後の小説分科會を再現している。

まず、第七回の出席者が平素の出席十四、五名を越え、十九名にたっしたのをとらえ、「あきらかに事前に手がうたれていた」という。あるいは、そうであったかもしれない。しかし新總長が大會を召集し、訓辭をおこなった直後の分科會

である。訓辭のききめはまだ残っていて、出席者が多かったともとれる。

また、出席者が増加したとと関連して總務、庶務、會計の三名の幹事がすべて出席したと指摘するが、じつはかれらは第一回からほとんど毎回、うち揃って出席しているのである。

孫瑛は、魯迅の筆名を用いる以前の周樹人も「魯迅」と呼んでいる。そこで、この小説分科會における周樹人を、「魯迅」的に描く從來の「魯迅」像をなぞることになったのではないか。このように出席者數や三幹事の出席といったことを意味ありげに指摘するのは、これがある種の陰謀として印象づけ、これに抵抗する「魯迅」を強調したかったのであろう。もちろん、陰謀はありえないことではない。しかし、周樹人はすでに主任として忠實に職務を遂行しているのである。「事前に手をう」つほど、敵對的な存在であつたらうか。

開會を宣したあと、周樹人が（孫瑛は、魯迅が、とする）編譯の基準を議題として告げた。すると、總務幹事——わざわざ出席したと孫瑛はいつている——が、すなおに議題を討論せず、いきなり自説を主張した、と孫瑛はいうのである。

開會ののち、分科會主任魯迅が會議の内容は編譯の基準の問題であると宣告しているにもかかわらず、「總務幹事」高步瀛は會長袁希濤が「すでにこれに言及している」といった旗じるしをかがげ、あらためて討論すべき内容を強調するとともに、いかにも性急に、できるかぎり「女子供にもわかる」小説を編譯して、「もって普及」を期すべきである、と提起した^③。

これは、「會議錄」のつぎのような一段に照應しよう。

はじめに主任周樹人君が開會を宣し、あわせて小説を編譯する基準について提起、もし本分科會がこの小説の編譯に着手するとするなら、先きに基準を定めるべきか否か、またその基準はどのようであるべきか、討論を願いたい、とのべた。

高歩瀛君は、本日會長もまたこれに言及し、わが國の小説のやや佳なるものはいずれも深奥であるから、本會が編譯に従事するとすれば女子供にもわかるものを編譯して普及を期すべきである。しかし、編譯の基準、および段取り「原文「規程」」についても先きに規定しなければならない、とのべた。

「會議錄」からすれば、高の發言はそれほどつひなものともおもわれない。自説を主張するのに、やや性急であつたと認められるが、その發言の末尾においては、議長の提案に同意している。しかしながら、孫瑛は、この高の發言は周樹人にとって——孫によれば、魯迅にとって——、鼻もちならないものであつたと想定し、會議のやりとりをつぎのように再構成する。

かれのこういった舉動に、魯迅はかなりの反感をあらわした。かれはまず發言のなかで高歩瀛にかなり太い釘をさし、

「編譯をするには、まず參考書を備えなくては着手できない。本會に參考に供すべき書籍があるか否かも問題である」とのべ、そこで、まず審査をすすめるべきことを主張した。

これは、「會議錄」のつぎの一段に對應している。

周樹人君は、編譯をするには參考書を備えなくては着手できない。本會に參考に供すべき書籍があるか否かも問題である。まず審査するに如くはない。それで本員はまず通俗圖書館の小説から着手し、第一號から始め、順を追って審査すべきことを主張する、とのべた。

周樹人の議事のとりさばきは、やや意外である。編譯の基準を定めるべきか否か、またその基準はどのようなものであるべきか、自分が議長としてこの議題を提起したのである。編譯の仕事そのものを推進せよ、と高歩瀛が主張したとしても、けつきよくまず基準があるべきだといって、周樹人に賛成したのである。ここでは、はじめの自分の提案に即して基準を定

めることを確認し、基準の制定に議事を運ぶべきところであらう。

それをそうせずに、編譯について議論すること自体をうちきってしまった。その發言からすれば、編譯の仕事そのものを推進せよという高の主張にこだわって、高が自分に賛成したことは、耳にはいらなかったようである。あるいは、耳にはいらなかったようにふるまっている。

孫瑛が描いてみせたように、周樹人は反撥したとすることは、できるかもしれない。

周樹人が反撥したとすれば、それは高の發言がとくに袁希濤會長の意を體したところにあつたのかもしれない。高が發言したように、袁が「すでにこれを言及し」たのだとすれば、周樹人が編譯の基準のその基準に重きをおいたとしても、ともかくにも編譯を議題として提起したのは、やはり袁の「言及」をうけてのことだつたのではないか。

しかし、それは氣のすすまぬ議題であつた。高にたいする反撥は同時に本音の吐露ともなつたのであらう。

周樹人には編譯の仕事そのものが急がれていることは、わかつていた。同じ教育部にいたのである。そして、それに反對ではなかつた。だが、編譯にも基準があるべきだと考え、小説の審査にならつて、まず「基準」を作成しようとした。これにたいして、高が、かれの手順を無視した發言をした。これは周樹人にとって、一種の壓力としてうけとられたとおもわれる。

たしかに、それは壓力であつた。

こうした壓力は當然、教育總長の張一麐に由來していよう。通俗教育研究會の大會における訓辭はすでにみたとおりであるが、かれは教育總長としての登壇第一日に、部員を召集して談話をおこなっている。そのなかで、總長に任命されて大總統に「覬見」したとき、「一般の學校と同様、社會教育を重視すべきである」とお言葉を賜わつた、とのべた。さらにつづけて、通俗研究會會員は大總統の意を體して會務に盡力されたい、とのべた。

かくて、袁世凱大總統の意嚮は張一麐教育總長をつうじて教育部員、とくに兼職の通俗教育研究會會員に傳達された。おそろくさらに、教育部次長にして通俗教育研究會の會長である袁希濤をつうじ、かさねて通俗教育研究會の實際の運営について指示があつたのではないか。

大會で訓辭のあつた翌日、周樹人の日記につきのような一行がみられるのは、注目すべきではないだろうか。

午後張總長召見す。

周樹人だけを「召見」したのか、教育部全員を「召見」したのか、わからないが、この書きぶりでは、かれ個人が呼びつけられたようである。大會の翌日のことであるから、小説分科會の主任をとくに呼んで、奨勵したのではないだろうか。社會教育司長である高歩瀛は、部下である第一科長周樹人が總長の「召見」をうけたことを知っていた。知っていたどころか、かれを経由して呼びだしがあつたにちがいないのである。それで周樹人が議題を提起すると、もっと積極的に推進せよと、發言したのであらう。

周樹人がこれにたいし、自分の提案をひるがえし、小説の審査からまず着手するよう主張したことは、すでにみたところである。

それからの討論の模様を、孫瑛はつぎのように描いている。

だがつづけて、「審査するといつてもきわめて難しい」とのべ、一同に審査にかける時間の長短の問題を討論してもらいたいのべた。

高歩瀛は多數の會員が魯迅の意見に賛成しているのをみて、やむなく大勢に順應して賛意を示した。しかし、できるかぎり審査にかける時間を短縮して、いわゆる「忠孝節義」を宣揚するしろものを「できるかぎり早く編譯」することができるようにならんのである。魯迅はこれにたいし斷固として譲歩せず、正面から對決して「これの期限

は規定するのが難しい」といった。その結果、この回の會議は「審査ノ時間ハ暫ク規定セズ」を決議して終了した。^①このような再構成からうける印象は、惡玉の高步瀛にたいし、善玉の魯迅が丁々發止と斬りむすぶ壯絶なチャンバラ劇である。だが、「會議錄」によれば、主任は一つ一つ問題を整理しているにすぎない。

審査にかける日數にしても、以下にみるように周樹人は期限を定めるのは困難だといながらも概略の日數を決めようとしている。高にたいする妥協といえる。これにたいし、孫壯、王家駒が反對し（周樹人にも反對し）、「暫らく規定しない」に落着くのである。もし高が「事前に手をう」っていたとすれば、ここで孤立しなかったはずである。

高步瀛君も、まず圖書館の小説から審査し、これを審査し終ってから、他所の小説の審査にとりかかることを主張した。徐協貞君がいうには、圖書館内の小説に雅正を缺くものがあれば、本會で審査してのち閱覽を停止するのがよい、と。

主任がいうには、審査の方法もきわめて難しい。本員^{わたし}には圖書館からとってきて登録ずみの小説について審査するとともに、圖書館で購入したばかりで未整理の小説について審査し、兩者を並進させるなら加果をあげるのが早いとおもわれる。この方法について異議はありませんか、と。一同賛成して採擇。

周樹人君がまたいうには、各審査員が審査する期限の長短について討論はありませんか、と。

高步瀛君がつづけているには、この期限は明確に定めておくのが望ましい。嚴格に制限することはできないにせよ、だいたいの規定があったほうがよい。結局どうするかは、衆議によって決定していただきたい、と。

周樹人君がいうには、これの期限は規定するのがきわめて難しい。何日間かけて〔小説〕一部を審査する、と概略のところで決めておけばよい、と。

孫壯君がいうには、現在の新舊の小説は冊數が同じでなく、多いものもあれば少ないものもある。畫一的に規定する

のは難しいとおもわれる、と。王家駒君がいうには、本會の會員の半ばは兼任であるから期限を定めて束縛すると、實際上は不便が多いだらう、と。討論の結果、審査の期限は暫らく規定せず、ただ事實上は敏速であるよう努力するものとする、に一同賛成、表決して採擇。

ついで孫壯君が、各書肆が邪淫小説を販賣するのを禁止する議案を提出したいと希望。高步瀛君が次回の分科會に正式の議案として提出してから審議するよう委囑。時刻はすでに四時であつたから主任が散會を宣告。

くりかえしていえば、右の「會議錄」から正面きつて、一から十まで高步瀛に反對する「魯迅」の姿を描くことは困難である。かれは高步瀛に反對しないのではないが、それはただかれ一人が反對しているのではない。高はときに高壓的であるとしても、議長である「魯迅」に一から十まで壓力を加え、討議を左右しているのではない。

とにかくここでは、討論がおこなわれているのである。

第八回以後、第十二回までの會議は、どのようにして禁止するか、具體的な方策について議論がおこなわれた。

この方策は一種の法令を制定するもので、分科會の審議は、したがって法令の文案をめぐっておこなわれることになる。その法令は二件あつた。一つは「小説ノ善導改良及ビ禁止案」である。二三一頁参照。いま一つは「優良小説ノ目錄ヲ公布スル案」である。二三二頁参照。いずれも第十一回會議のあとひらかれた第三回大會で採擇された。

この間の周樹人の立場は、孫瑛によれば巧妙なる方法をもって、帝制を實施しようとする一派の人間とたたかたというところにある。孫瑛の見解は、すでにみたように、教育總長、次長が袁世凱の意圖、指示に沿って活動したという前提にたっている。

たしかに上記二つの法令は、運用のしかたによっては帝制實施にも役立つことができるようにおもふ。もちろん、周樹人が帝制實施に手を借そうと考へて、これらの法令を審議したのでないことはいふまでもない。また、實際にも、法令は

帝制實施の潤滑油の役割をはたさなかった。とすれば、周樹人以外の人間も、べつに袁に協力する意圖はなかったのではないかと疑ってみることができるようにおもわれる。

「會議錄」によつて、分科會の進行のぐあいをざっと眺めてみよう。

まず、第八回の會議である。

ここでは（審査幹事）孫壯の提出した「小説ヲ査禁スルニハ宜ク預メ通知スベシノ案」を審議した。書店で販賣するのを禁止するばあい、書店組合があるなら教育部から正式に通告してはどうかという意見がでて、上海、天津には書店組合があることが確認され、この案に一同は賛成した。

ところが、全部禁止（部分的削除による許可は認められないということ）の小説は新聞掲載のものに多い、新聞が裸體畫を附録につけて販賣している、とくに口語新聞に低級なものが多い、と報告され、そこで周樹人は新聞掲載の小説が多い以上、新聞を禁止の對象とすべきであると提案、これに孫壯が賛成した。そして新聞を取締るのは警察廳の管轄であるから、禁止するなら事前に警察廳に連絡しなければならない、とつけ加えた。

そこで周樹人は、禁止には二種類あるべきだ、と提案した。一つは新聞に掲載することの禁止、もう一つは書店が出版し販賣することの禁止。

禁止するさい各省の長官（巡按使）を経由するか否かが問題にされ、公文書が轉々すると効果がおくれるから、書店組合があるところは、直接通告する方が實施するうえで簡單であるうと高歩瀛がのべた。さらにつけ加え、組合以外にも内務部、財政部、警察廳、稅務處などにも連絡をとるのがよい、とのべた。

（この議論は、教育部に小説禁止、ひいては新聞雜誌の販賣禁止（出版禁止）の權限があることを自明の前提としておこなわれている。しかし、いまはこの問題にたちらないことにする。）

つぎに、第九回の會議である。

前回の修正案が法令の名稱も「小説ノ勸導改良及ビ禁止案」と改められて提出され、遂條審議字句が修正された。

つづいて、「優良小説ノ目錄ヲ公布スル件」が提出され、高歩瀛が「優良ナル」を「上等」と改めよと主張、修正された。この二件はいずれも議決とされ、大會開催を待つて提出されることになった。

第十回は準備された議案はなく、周樹人は、近日中に大會が開催されるから、大會提出の二件について、さらに意見があれば討論したいと提案。これには庶務幹事の徐協貞が反對、すでに議決したのだから討論の必要はない、むしろ小説を審査することが重要なので、その進行状態について報告されたいと發言。周樹人は、現在のところ成果なし、と答えた。

すると徐は、兼職の會員が多いのだから、打開策を講ぜよと主張、討論ののち、審査幹事だけではなく、分科會員がすべて審査に従事することになった。さらに、中等に屬する小説を中上と中下に分けたいという提案があったのにたいし、高歩瀛が、中下は下等にいれ、禁止しない扱いにすればよい、と發言。次同に審査の批語を騰寫版印刷にして配布し、それにもとづいて等級を決定することになった。しかし、その次回、第十一回は参加者が半數にたっせず流會となった。

このあと、第三回大會が開催され、ここで周樹人は小説分科會主任として、つぎのような報告をおこなっている。

小説分科會が議決したものに二件あり、一つは「小説勸導改良及ビ禁止辦法案」、一つは「優良小説ノ目錄ヲ公布スル案」であります。いずれも本分科會において討論したのはいうまでもありませんが、一分科會のわずかな人間の意見にすぎません。ここに大會が開催され、三分科會員が出席しておられる。諸君がこの二つの案になんらかの異論を有するか、修正すべき個所があるなら、さらに討論していただき、完全を期したのであります。これにたいし討論はなく、採擇。周樹人はこのあと、つぎのようにのべた。

小説の審査について申しますと、現在、本分科會ですでに審査を終ったものが數十冊にたっしております。概略、

多くは中等と判定されております。諸君がこの件にはなほ注目されておられるので、つけ加えて報告する次第であります。

周樹人は、分科會ではまだ議論していない等級判定を報告したのである。第十回では、次回に批語にもとづいて等級を定めると決めたものの、第十一回は流會になっている。

ところで、いったん採擇されたこの法令が、第十二回の會議でまた審議される。「會議錄」は「小説ノ勸導及ビ禁止案」は會長がこの案は考慮の餘地ありとし、大會に提出されなかったと記している。しかも、このように周樹人が開會にあたって發言し、會長の到着を待つて討論すると、のべたと記している。午後三十分の開會を宣したが、會長は二時十五分に到着、ようやく審議が始った。

すでにみたように、大會で、この「小説ノ勸導及ビ禁止案」は採擇されているのである。あきらかに、袁希濤が横車を推したと考えられる。周樹人が、大會で採擇された法令を、大會に提出されなかったと發言したのは表面をとりつくろつたのだろうか。

横車を推した袁の見解は、要旨つぎのようなものであった。

これを點檢すると、多くは消極面から着手している。¹¹

この「消極面」というのは、日本語に適譯がない。要するに禁止するばかりで、獎勵、宣揚がない、というのである。イデオロギーを旗幟鮮明にかかげよ、といっているのである。しかも、各條項とも、つぎのような缺點がある、というのである。

第一條——實行が困難な規定である。

第二條——わが國の權力が及ぶところはともかく、租界内では實施できない。

第三條——實施が難しい。阿片、密輸入品、各種の危険物でさえ検査が困難であるから、書籍はいうまでもない。

かつ検査を実施するのは警察であるが、その程度たるに首都はなお文明的で、捜査、検査のさいなんな事件は發生しないだろうとしても、各省においては紛争が發生しないとはいえない。

第四條——空文をもって禁止するなら無益であるばかりか有害であろう。慎重にすべきであつて、なお詳しく討論を願いたい。

これにたいし、周樹人は、會長の意見に従えば、第一條、第二條は討論の必要はない。第三條は削除すべきであろう。

第四條はなお討論の必要がある、と提案した。

徐協貞が、第三條は残す必要があり、第四條の目錄を配布しなければ、警察が禁止しようには依據するものがない、とのべた。目錄の配布を主張する聲は、ほかにもあったが、袁はふたたび發言、この種の小説は秘かに販賣されるから、禁止しても面從腹背、嚴重に禁止すればするほど巧妙に逃れ、流弊はいうべからざるものがあるう、とのべた。

高步瀛は利が多く害が少なければ實施すべきである、徐協貞は實力をもって實施すれば効果がないということはない、とそれぞれ發言。

これにたいし袁希濤は、第三條は運送中に検査するのは可能であるが、零細な書店まで検査するとなると面倒であろう、とのべた。

長時間の討論の結果、第三條は若干修正を加えるが、第一、第二、第四の各條は修正せず原案どおりとする、となった。四時散會（會長が分科會に出席したのは二時十五分であつた）。

會議のやりとりをたどると、袁がこの法令のあらさがしをしたのにたいし、高步瀛と徐協貞が抵抗していると感じられる。この對立は、高や徐が總長、次長の走り使いではなかったことを示してはいないであろうか。

公平にみて、袁希濤の指摘は當っているとおもわれる。しかし、會をかさねて審議してきた人間にとっては、はなはだ不満であつたろう。この第十二回の會議では、周樹人と高步瀛、徐協貞は同一の立場にたっている。

おそらく、この日の會議は相方にとって不愉快なものであつた。このあと、小説分科會は會議がひらかれていない。

そして、翌月（一九一六年二月）、周樹人は主任を辭した。

このあと、周樹人は小説分科會に出席しなくなったようであるが、しかし、まったく出席しないというのではない。いまのところ、第一七回（一九一六年三月二十二日）、第二一回（七月五日）の會議には出席し、意見をのべたことがわかっている。

第一七回には、小説の上等と認定されたものに、甲種、乙種、丙種、三種類の表彰狀を授與するに案ついて發言、それぞれの異った色の用紙を用いるように主張した。

また、分科會が審査した小説をさらに覆審（原文は「覆核」）する手續きについても、討論した。

第二一回では、小説、雜誌類を禁止する件が議論された。かれは、禁止すべきであると認定された小説については、すでに絶版になったと否とを問わず、すべて一律に公表すべきであるとしても、各人の見解は同じくなく、同じ小説でも、禁止すべきであるという意見、禁止すべきでないという意見があるだろう、さらには表彰せよという認定もありうる、したがって討論のうえ慎重に處理すべきで、拙速であつてはならないと主張した。また、ある雜誌が、ときに良好なる小説、ときに悪い小説を發表しているばあいには、その雜誌の主たる傾向をみて禁止するか否かを定めるよう主張した。

五 禁止された小説・表彰状を授與された小説

いま、小説分科會の小説審査の状況を各年度別にかかげると、つぎのようになる。そのうち年畫とあるのは、正月（舊正月であるのはいうまでもないが）に賣りだされる飾り畫で各家庭がこれを室内の壁に貼つてたのしむ。参考圖書は講演にさいしてのもので、おそらく講演分科會の選定であるが、便宜上あわせてかかげる。^①

一九一五年 通俗教育研究會 設立

一九一六年 小説二百六十五篇を審査

一九一七年 小説三百九十五篇を審査

参考圖書九十四點を公布

年畫四十八點を審査

一九一八年 小説百八十二篇を審査

参考圖書十二點を公布

各出版社に勸告書を郵送

一九一九年 小説百十三篇を審査

一九二〇年 小説百二十七篇を審査

一九二二年 小説百二篇を審査

一九三二年 小説六十篇を審査

以上のような審査の結果、どのように上等、中等、下等に分類したであろうか。これを示す一覽表は作成されなかったらしく、ほとんど手がかりもない。

しかし、審査はすでにみたように、禁止（閱覽禁止、販賣禁止、出版禁止）を主たる目的とするものであった。この面では、右の一九一八年の項にある、各出版社に勸告書を郵送したという勸告は、編集者にたいして、黒幕小説といったものの出版をやめ、勤苦の美德を提唱することに重點をおけ、という趣旨のものであった。黒幕小説というのは、社會の裏面を描寫したものである。

また、一九三二年七月には、通俗教育研究會の直接の活動ではないが、その趣旨をうけいれた實行團體として「書業正心團」が上海の書籍組合に誕生している。これはもっぱら人心風俗に危害をあたえる淫詞小説を調査し、かつこれを破棄することを目的とし、まず淫褻の書から着手、紙型三十六組、單行本雜誌四萬六千三百九十六冊を破棄したといわれる。九月には通俗教育研究會は、北京の書籍業界にたいし、同様の「正心團」を組織するように勸告をおこなったのである。さらに教育部にたいし、二つの上申書をさしだした。一つは教育部が内務部を経由して警察廳にたいし、書籍業の商人を召集、上海の書籍組合にならって淫書を破棄するよう勸告し命令してもらいたいというものであった。いま一つはだめなピラを取締ってもらいたいというものであった。

ここにいう淫詞小説がいかなるものであったかはわからないが、四萬六千餘冊という歴大な冊數から推して、かなり俗惡なものであったろうと想像できる。

一九一九年一月、北京で創刊された雜誌『新潮』の創刊號にのった一文は、つぎのように、當時の禁止措置を賞讃して

いる。^①

民國五年（一九一六年）……教育部は内務部と協議してこういった種類（黒幕小説）の雑誌小説數十點を禁止した。わたしは現在の當局者も留意すべきだと希望する。……青年に害をあたえるこういった書籍にたいし……教育部は速やかに取締ることができないものか。

このような讃辭と教育部にたいする要望をみると、當時の「禁止」措置は、歡迎されたのである。こんにちの常識から判斷して、これは一種の「檢閲」であつた、したがって、出版の自由を制限するものであつた、と性急に結論づけることはできない。^②

いっぽう推薦の制度があつた。これもすでにみたとおりで、周樹人の創意から出發している。審査によって「上等」と判定されると、「優良ナル小説」として推薦され、さらにそのなかの若干は甲種、乙種いずれかの表彰狀を授與された。ただし、甲種を授與されるのは創作小説にかぎられ、翻譯はすべて乙種となつてゐる。^③

審査は必ずしも出版の年度別、もしくは月別によつて實施してゐるようではない。二、年前の出版でも、とりあげてゐる。これは制度が始まつたときとして、やむをえないことであらう。

圖書を推薦する教育部令は『教育公報』に掲載されたから、『教育公報』をくわしくみることによって、知ることができる。しかし、部令ははじめのころは推薦する小説の書名（篇名でもあるが）をかかげるのみで、翻譯小説は讀者の關心をひこうとして書名に工夫を凝らしてゐるから、原書の見當をつけることが難しく、當惑することが多い。

さいわい、『教育公報』には教育部令のほかに、通俗教育研究會の審査報告が掲載され、小説の概略が紹介され、どのような點が推薦に値するかが記されている。精粗一定しないが、原作を尋ねる手がかりになる。^④

こうした推薦制度がどれほど効果があつたかは、わからない。教育部は、さらに命令や咨文を發し、各省・市・區の學

校や圖書館がこれらの圖書を購入するよう、そしてひろく讀まれるよう周知徹底することを求めたというから、いくらかは讀者をふやしたかもしれない。

推薦は一九一六、一七の二年間のあいだに、六回にわたっておこなわれている。書名の番號は筆者による。翻譯のばあいは、譯書名のつぎに原作者、原作をかかげた。

【第一回】

(一) 『埋石棄石記』

創作。作者は包天笑。上海商務印書館。

(二) 『孤雛感遇記』

創作。作者は包天笑。上海商務印書館。

(三) 『塊肉餘生述』

ディケンズ『ディヴィッド・コッパーフイールド』の翻譯。譯者は林紓。

(四) 『模範町村』

横井時敬『模範町村』。唐人傑、徐鳳書譯述。民國四年五月。商務印書館。

(五) 『義黑』

翻譯。原作者、原作名未詳。

(六) 『冰雪因緣』

ディケンズ『ドンビー父子』。林紓譯。商務印書館。

【第二回】

(一) 『馨兒就學記』

創作。天笑生著。商務印書館。

(二) 『火山報仇錄』二冊

イギリス、ハガード『モンテズマの娘』。林紓、魏易共譯。出版は商務印書館。

(三) 『稽者傳』

原作者はフランス、マルシャン。原作名は未詳。譯者は朱樹人。出版は文明書局。

(四) 『冶工軼事』

原作者、原作は未詳。譯者は朱樹人。出版は文明書局。

(五) 『黒奴籲天錄』

アメリカ、ストウ夫人『アンクル・トムス・ケビン』。林紓、魏易共譯。文明書局出版。

(六) 『愛國二童子傳』

フランス、ブリュノ『二人の子供によるフランス一周旅行』。林紓、李世中共譯。商務印書館出版。

(七) 『孝女耐兒傳』

ドイツ、ケンズ『骨董屋』。林紓、魏易共譯。商務印書館。

(八) 『秘密使者』

ジュール・ヴェルヌ『皇帝の密使』。天笑生譯。小説林出版。

【第三回】

(一) 『美洲
童子萬里尋親記』

周樹人の役人生活

- (一) ウィリアム・アーデン『ジミー・ブラウンのヨーロッパ親探しの旅』林紓、曾宗鞏共譯。商務印書館（民國二年十月三版）

(二) 『二義同囚錄』

原作者、原作未詳。甘永龍、朱炳勳共譯。

(三) 『正魯濱孫漂流記』

ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』。林紓、曾宗鞏共譯。商務印書館（民國三年十一月）。

(四) 『大荒歸客記』

ジュール・ヴェルヌ『征服者ロビュール』。梁丕青、趙尊嶽共譯。商務印書館（民國五年六月）。

(五) 『鷹梯小豪傑』

シャルロット・メリー・ヤング『鷹の巢のなかの鳩』。林紓、陳家麟共譯（民國五年五月）。

【第四回】

(一) 『風俗閒評』

チエホフの短篇集。陳家麟、陳大鑑共譯。中華書局（民國五年十一月）。

(二) 『苦兒流浪記』

エクトル・マロ『家なき兒』。包公毅（包天笑）譯。商務印書館（民國四年三月）

(三) 『棄兒正續篇』

原作未詳。常覺、小蝶共譯。天虛我生潤色。中華書局（民國六年一月）

【第五回】

教育部の推薦内譯

番號	年	月日	創作	翻譯
1	1916	9. 23	2	4
2	1916	11. 21	1	7
3	1917	3. 21		5
4	1917	6. 25		3
5	1917	9. 22		4
6	1917	12. 21	2	1
計	/	/	5	24

周樹人の役人生活

(一) 『社會薰蕕錄正續編』三冊

原作未詳。翠娜女史譯。天虛我生潤色。中華書局（民國六年六月）

(二) 『社會電影樓臺』

コナン・ドイル『ラッフルズ・ハウの行動』。林紓、魏易共譯。商務印書館（民國四年十月三版）

(三) 『歐米名家短篇小說叢刊』三冊

歐米作家四十六人の短篇集。周瘦鵲譯。中華書局（民國六年三月）

(四) 『言情小説 璣司刺虎記』二冊

ヘンリー・ハガード『ジェス』。林紓、陳家麟共譯。商務印書館（民國四年十月）。

【第六回】

(一) 『秦漢演義』四冊

創作。黃士恒著。商務印書館（民國六年七月）

(二) 『湘娥淚』

創作。李定夷著。國華書局（民國三年八月）

(三) 『鄉里善人』二冊

原作未詳。胡君復、憚鐵樵譯。商務印書館（民國六年七月）

創作と翻譯とにわけて統計をとると、上表のようになる。

以上のうち、『風俗閒評』（二冊）はチェホフの短篇二十一篇を収め、『歐美名家短篇小説叢刊』（三冊）は四十六人の作家による四十九篇を収める。

前者はしばらくおくこととし、後者の内容をつぎにかかげよう。¹⁰⁾

- 【イギリス】 (一) ダニエル・デフォー「フェル夫人の幽霊」 (二) オリヴァー・ゴルドスミス「粉ひき屋のワン」 (三) ジェームス・ホッグ「神秘的な花嫁」 (四) サー・ウォルター・スコット「タピストリーのなかの部屋」 (五) チャールズ・ラム「故郷」 (六) ジョン・ブラウン「ラビとその友だち」 (七) ガスカル夫人「セルトンの英雄」 (八) ウィリアム・メイクピース・サッカレー「デニス・ハガチーの妻」 (九) チャールズ・ディケンズ「ある子供の星の夢」 (一〇) チャールズ・リード「役に立った冗談」 (一一) トマス・ハーディ「行き暮れた旅行」 (一二) ルイズ・ド・ラ・ラミー「慰い」 (一三) ロバート・ルイス・ステイヴンソン「マルテロイトの扉」 (一四) サー・ライダー・ハガード「青いカーテン」 (一五) コナン・ドイル「戀人」 (一六) 同「黒い館の主人」 (一七) 同「死の快樂」 (一八) マリー・コレリー「舊式な義務」
- 【フランス】 (一九) ヴォルテール「巨像、あるいは人間の知慧」 (二〇) ジェル・メーヌ・ド・スタール夫人「コリンヌ」 (二一) オノレ・ド・バルザック「エル・ヴェルデューゴ」 (二二) アレクサンドル・デュマ(ペール)「ソランジェ」 (二三) アルフォンス・ドーデ「おちびさん」 (二四) 同「忠實な兵士」 (二五) エミール・ゾラ「洪水」 (二六) フランソワ・コペ「銃彈の穴」 (二七) ギ・ド・モーパッサン「雨傘」 (二八) ポール・ブールジェ「いらくさの地面」
- 【アメリカ】 (二九) ワシントン・アーヴィング「村の誇り」 (三〇) ナサニエル・ホーソン「白い老處女」 (三一) エドガー・アラン・ポー「告白する心」 (三二) ストリー夫人「頂上の歴史」 (三三) エドワード・エヴレット・ヘイル「國のない男」 (三四) マーク・トウェイン「カリフォルニア物語」 (三五) プレット・ハー

ト「価値のない男」

【ロシア】 イワン・セルゲーヴィチ・ツルゲーネフ「ロシア人はどのように死ぬか」 (三七) レフ・ニコラエ

ヴィチ・トルストイ「長い流刑」 (三八) マクシム・ゴーリキー「裏切り者の母」 (三九) レオニード・ニコラ

エヴィチ・アンドレーエフ「赤い笑い」

【ドイツ】 (四〇) ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ「ある物語」 (四一) ハインリッヒ・チョッケ

「マックス・ストルプレー」

【イタリア】 (四二) サルバドレ・ファリナ「別離」

【ハンガリア】 (四三) モール・ヨーカイ「兄弟の決闘」

【スペイン】 (四四) アルマンド・パラチオ・バルデス「海邊の戀」

【スイス】 (四五) ゴット・フリート・ケラー「葬式」

【デンマーク】 (四六) ハンス・クリスチャン・アンデルセン「古い墓碑」

【スエーデン】 (四七) ヨハン・アウグスト・ストリンデベルイ「不死鳥」 (四八) アンナ・コーベルト「わ

れわれの最初の大晦日」

【セルビア】 (四九) ドラクリッチ「復讐」

【フィンランド】 (五〇) ユハニ・アホ「開拓者」

部令にかかけられた書名は、あわせて二十九點である。そのうち、『風俗閒評』と『歐美名家短篇小説叢刊』は選集であるから、それぞれ收録の一篇を一點として数えると、すべて九十七點が教育部によって表彰狀をうけたことになる。

書名としてかかげられた二十九點のうち、創作は五點、他は翻譯書である。これだけの作品が、一九一六、一七の二年間に推薦されたのである。

これらの作品が、どのような觀點から推薦されたかというのは、きわめて興味ある問題である。その趣旨は、小説審査の報告書を逐一、讀むことによって知ることができる。¹⁾

六 周樹人の關與

推薦になった小説をざっと眺めるなら、そこになんらかの傾向があることが感じられよう。さらに、通俗教育研究會による小説審査報告（批語）を讀むなら、それは端的になぜこれを評價するかがのべられているから、より明白に、そこにある傾向を讀みとることができる。¹⁾

周樹人は、どこまで積極的にこうした推薦に關與したのだろうか。

すでにみたように、かれは小説分科會の審査幹事に任命されている。任命は第一回の推薦公表（教育部令第八十八號）のあと、第二回の推薦公表（同第二百二十五號）のまえ、一九一六年十月であるとはいえ、第一回についてまったく無關係であつたとはできないとおもわれる。二一八、二二三、二五四頁參照。

とはいえ、推薦された小説すべてに周樹人が關與していたと斷定することも、困難であらう。

まず「創作」からみてみよう。

この分野でめだつのは、包天笑である。

推薦となり、かつ甲種褒狀をうけた五篇のうち、包天笑の作が三篇を占める。すなわち第一回の『埋石棄石記』、『孤雛

感遇記』、第二回の『馨兒就學記』である。

包天笑は辛亥革命以前に、すでに上海のジャーナリズムにあって有名であった。いくつもの文藝雑誌に關係し、自らも『小説大觀』という大版の季刊文藝雑誌を刊行し、創作もした。執筆した隨筆、論說、小説、翻譯は多數にのぼる。あたかも、中國の菊地寛とも呼ぶべき人物であった。

かれは一八七五年に蘇州の城内で生まれ、一九七三年、九十八歳の天壽を全うして死去したが、一九四九年、七十四歳のとき、それまでの半生を回顧して『劍影樓回憶錄』を執筆した。このなかで、當時、教育部から受賞したこと、また受賞された作品の執筆の動機などについて語っている。

かれの回想によると、『埋石棄石記』、『馨兒就學記』は純粹な創作ではなく、一種の翻案であった。

『埋石棄石記』はある日本の作家の教育小説にもとづくものである、という。誰であったかは忘れたが、有名な作家ではなかった。

『馨兒就學記』は、イタリアの作家、アミーチスの『クオレ』にもとづく。包天笑はアミーチスの名も、『クオレ』の名もあげないが、のちに夏丐尊が翻譯した『愛の教育』は同一の原作によるといっている。ただしこれも日本語からであるという。おそらく、杉谷代水譯の『學童日誌』であろう。杉谷譯もまた翻案であった。

『孤雛感遇記』については言及がないが、これも内容から推してやはり翻案であったろう。

包天笑は創作ばかりでなく、翻譯でも推薦されている。『苦兒流浪記』である。回想のなかでは、これと『馨兒就學記』、『埋石棄石記』（まちがえて『棄石埋石記』としている）の三冊をあげている。『孤雛感遇記』は失念したのであろう。

この三冊が教育部によって推薦され、褒狀まで授與されたのは、包天笑の回想によれば、かれと袁希濤との交遊が原因であつたろうという。包天笑が上海の新聞『時報』社に勤務していたとき、社の休憩室（「息樓」と名づけられた）によ

く訪ねてきたのが袁希濤であつた。

民國成立以後のある年、教育部は突然私に三枚の賞状を送つてよこした。それは私の三部の教育小説を奨励したものであつた。どこからこの意外な譽れがきたのか、まるで天から飛んできたようであつた。商務印書館に問いあわせて、以前時報社の息樓の常連であつた袁觀瀾（希濤）先生が教育部次長の榮職に任じられ、かれが特別にめをかけて下さつたのだとわかつた。そのときの總長が誰であつたか、もはや忘れた。

右はかれの回想記の一節である。回想によれば、この三冊のうちでもっともよく賣れたのが『馨兒就學記』で、戰爭中にもかれの知らない海賊版がでており、おそらく數十萬部でただらうという。つぎが『苦兒流浪記』で、一萬餘をだし、『埋石棄石記』は再版されたかどうか知らない（商務印書館の初版はふつう三千部であつた）。

主人公の名を馨兒としたのは、包天笑夫妻に可馨という男の兒がいたのにちなんだのである。夫妻にはそれまでに何人か子供を生んでいたが、いずれも夭折していた。しかし、その可馨も本書の執筆中、三歳に滿たずに死去した。

『馨兒就學記』はまえにものべたように一種の翻案であつて、原作の日記體はそのまま残したが、日記の日付けは陰曆に改めた（當時はまだ太陽曆を採用していない）。できごととはすべて中國化し、自分の家庭のできごとを記した數節をつけ加えることもした。この部分は「まったく私の創作であつた」と誇らしげに回想し、ついでに清明節の墓參を記した數段落を引用してもいる。

包天笑の分析によれば、『馨兒就學記』がこのように多く出版されたのは、つぎのいくつかの原因があるという。

まず第一に、初版がでたのが辛亥革命の前年（すなわち一九一〇年）で、中國では全國的に小學校が増加したときであつた。

第二に、當時、商務印書館は各省、各大都市に分館を設け、かれらが出版する教科書をさかんに賣りこんでいた。とく

に國語に力をいれていた。

第三に、文章も筋立てもともに興味をひき、内容は中國のことであり、從來の道德をうたっていたから、十一、二歳のようやく知識欲にめざめた兒童にぴったりであった。

そして、さらにのちに多くの小學校では、卒業のさいの賞品に採用したので、一校で數百冊購入した。定價が一冊三角五分であつたのもよかった。^⑩

辛亥革命の直前に全國的に小學校が増設されたという右の指摘は、示唆するところが多い。「教育小説」(兒童讀物でもある)が求められる社會的雰囲気があつたのである。これはまた、教育部が通俗教育研究會をつうじて、積極的に小説を審査・推薦しようとした理由でもあつたにちがいない。

いずれにせよ、包天笑の「創作」小説を積極的に推薦したのは、包がいうように袁希濤であつたとおもわれる。周樹人はおそらく積極的でなく、のちにのべるように、翻譯に積極的な賞揚をくわえているのをみると、創作(じつは翻案であるが)よりは翻譯を、という氣持が強かつたかもしれない。かれはこの小説の審査・推薦に關與したが、しかし推薦になつた小説はすべてかれの自發的な發議、積極的な推進にもとずくとは斷定できないであらう。

しかし、それにしても、かれの机上に教育部としての公文書、あるいは小説分科會の報告書はまわってきたはずである。そしてかれはこれらを読んだはずである。讀んだあと、報告書とつきあわせ、推薦、授賞の可否を考えたとはずである。次長の袁希濤の意響がはたらいっているのも知っていたはずである。そして、かれは承認をあたえている。

これらの推薦について、かれがどの程度の賛成であつたか、そしてどの程度、包天笑を評價したか、その内心はわからないが、上海の多作の文筆家包天笑とは教育部の執務機のうえで、であつたわけであつた。

〔覆批〕の文はかれが筆をとつて認めたものであらう。

翻譯小説については、どのような光景がみられるであろうか。

すでにのべたように、推薦された小説のほとんどが翻譯である。

そしてこれもすでにのべたように、翻譯されたものの書名から原作を思いうかべることは困難である。二六九頁参照。しかしながら、譯者が林紘のばあい、林紘にたいする關心が、本稿執筆の一、二年前から中國においてたかまったこともあって、その研究をつうじて、原作者、原作を探すことは、容易になった¹⁾。

林紘以外の譯者のばあい、原作者、あるいは原作を確定できないものが數篇ある。なお、今後の探索にまきたい。

ざっと、その原作者名をみわたしたばあい、當時の中國の翻譯者が、ディケンズ、ヴェルヌ、といった作者を選択して翻譯しているのは、當時の水準の高さをおもわせ、感服させられる。

しかし、ひるがえって考えると、この感服は、むしろわたしの無知が前提になっているともいえよう。中國近代についてもっぱら政治史的側面から考えると、辛亥革命以前は暗黒、革命によって光明、しかし軍閥支配のもとでふたたび暗黒（さらにいえば、この暗黒による「魯迅」の絶望と寂寥といった紋切り型）といった圖式に支配されやすい。當時の中國の知識界の旺盛な外國文化吸收欲は、かれらにすれば當然であつたのであり、それを一々感服するのは、むしろ侮辱であるとうけとられるかもしれない。

だが、さらに考えると、當時の小説は娛樂の一つであつた。ディケンズ、ヴェルヌ、ハガード、あるいはコナン・ドイル（これはシャーロック・ホームズのものであろう）を選択する傾向そのものは、物語性を喜ぶ、變化のある筋を喜ぶといったもので、いわば大衆文學として、娛樂性が求められているのにはかならない。（ただし、大衆文學だから、娛樂だから、程度が低いとわたしはいおうとしているのではない。）

さらに、ここでもう一つ、考えるべきは、日本における翻譯文學の影響であろう。包天笑の「創作」と「翻譯」がだい

たいは日本語譯をもととしているのは、おそらく唯一の事例ではないとおもわれる。

かれらの翻譯はまず娛樂性を追求したが、しかし娛樂性のみを追求したと考えることも誤りであろう。

たとえば、『アンクル・トムス・ケビン』が譯されたのは、太平洋の彼方のアメリカにたいする關心のあらわれである。横井時敬¹²が譯されたのは、一種の「新しき村」建設の氣運が、中國の青年のなかにひろがりつつあったことを反映している。

もし、このような關心がたしかにあったとすれば、これはすでに「五四」運動を準備するものであった。

そのようにみると、『愛國二童子傳』という譯題をもつ書物が譯出されているのは興味深い。

この原作について、筆者ははじめフランスの中國學者、ポール・パディ教授から教示をうけた。それまで、原著者名も原書名もまったく見當がつかなかったのである¹³。

ついで、その教示にもとづいて、さらに同僚の宇佐美齊助教授に教示を乞うたところ、つぎのような簡潔なメモがかえってきた。

原題：二人の子供によるフランス一周旅行

副題：義務と祖國

小學校の讀本として使われた

「實物教育」のための挿繪二百葉

著者：G・ブリュノ

アカデミー・フランセーズ賞受賞『フランシネ』の著者

周樹人の役人生活

出版：ウージェーヌ・ブラン古典書房、一八七七、パリ

發行部數：一八七七年の初版以後十年間に三百萬部、その後、毎年二十萬部ずつが一九〇一年まで賣れつづけた（計六百萬部）。一九一四年までに七四〇〇部、一九七六年現在、八百四十萬部。つまり一八七七一一九七六の百年間に、平均して年八萬部が賣れたことになる。實際の讀者はこれよりはるかに多いとおもわれる。

物語：ロレーヌ州ファルスブル市に住むアンドレ、ジュリアンという二人の子供がフランス一周旅行をする。地理や歴史や各地方の暮らしを、實際の眼で見、確かめ、學ぶ。フランスという國を知り、フランス國民としての自覺をもつにいたる。一九〇〇年代初頭までのフランス社會（急激な産業化の波がおしよせるまえの）をいきいきと甦えらせる。

著者：G・ブリュノはペンネーム。哲學者でエコール・ノルマル・シュペリユール（高等師範學校）助教授のアルフレッド・フィエの夫人。舊姓および洗禮名はオーギュステーヌ・テュイルリー。哲學者ジャンマリ・ギユイヨの母。他に『フランシネ』（二八六九）という著書がある。

ところで、本書については通俗教育研究會による審査報告には、つぎのように、内容が紹介され、かつ評價されているのである。¹⁵

愛國二童子傳二冊、佛國のブリュノの原著、林紓、李世中の共譯。記すところは普佛戰爭の後、佛がアルザスおよびローレンの半を割きて普に與う。時に佛のファルスブルに孤兒あり、父が垂歿せる時、この命を受く。必ず佛國に返りて佛人となれ、と。しかるに普人は禁令して、凡そ孤兒にして護育者たる人なきは歸國を聽さず。二子、すなわち慷慨發奮し、關を越えて逃遁し、出でてその季父を求む。至るところはみな身を動かし力作して自ら贍る。卒に能く

自立し、季父を求め得てあい偕に歸國す。書の愛國二童子傳の名ある所以はこれをもってなり。全書の大旨を統觀すれば、すなわちその注重するところは、じつに二子の勤苦自業、志行の超卓なるを詳述し、もって青年の立志を獎勵するにあり。ゆえに全書、すべて一事として美德に非ざるはなし。すなわち二童子以外の諸人はみな敦篤の君子にして、樂みて人に善をなす者、その訓範の意深し。その書中の結構ははなはだ簡質をなし、原書はもと幼學のために作れるに似たり。譯文も亦明暢、誠に最後の青年の讀物なり。まさに上等に列し入るべし。

〔覆批〕本書を覆核するに内容は原評に具さに詳し。審査するに獎勵小説章程第三條に合す。まさに乙種褒狀を授與すべきに似たり。

この二つの内容紹介はおどろくほど、かけちがっている。これが同一の書物かとおもうほど、異なる印象をあたえる。あるいは、審査幹事が、なんらかの意圖をもって、譯書のある部分だけをとりあげたとも考えられるが、審査報告は公表されるのであるから、おそらく譯書のとおり紹介したのであらう。とすれば、翻譯者が意圖的にこのような翻譯をおこなったのである。林紓譯は、すでに知られているように、原文に忠實ではない。林紓譯はまず外國語に通じた人間に讀ませその譯出（おそらく口頭であらう）にもとづいて譯文を書くという翻譯であつた。

林紓はおそらく、アルザス・ローレンといったフランスの領土問題にも端を發した物語であることに興味をいだき、もっぱらここに力點をおいて潤色したのである。翻譯書の現物をみないで斷定するのは避けるべきであるが、フランスの風土、産業といった「近代文明」はあまり譯者の關心をひかなかったのであらう。こうした力點のおきかたは、第一次世界大戰にさいして、日本が青島を攻略（一九一四年十一月）、そのまま占領をつづけていたことと無關係ではないであらう。とはいへ、當時の翻譯界が時局問題との關連だけで、翻譯をおこなっていたと斷定することもできない。

チェホフの短篇集が推薦になったことが注目されるのである。これの報告書（批語）とそれにたいする覆批とは文章の

調子が一貫しており、おそらく一人二役で執筆されたものであり、その執筆者は周樹人であつたろう。⁽¹⁶⁾ つぎに、報告書の全文をかかげる。

本書は社會の各種の現狀を敘するが、どれもこれも珍らしい。とりわけ妙なるは、褒貶を露骨にせず、語は多く雋永であり、人を思索せしめるにある。これまた掌録の類に附せしめてよい。推薦すべきである。

〔覆批〕本書を覆審するに、札記體であつて、述べるところは多くロシアの事である。しかし著は何人によるか、何の著から採ったか不詳である。按ずるに札記小説は唐代に盛んで、當時の作者は斐然として觀るべく、降つて近世に至れば、傳承するところのものは聊齋志異、閱微草堂五種となる。諸書はおおむね孤鬼に假託し、味は鄙近なので、その後作者は多くなり、質が低下したと譏られるようになった。蓋し、こういった書は、手あたりしだいに材料を拾つて書物につくりやすい。近時の雜誌では、いろいろ掲載するが、陳腐でなければ濫惡である。本書は外國書から譯したが、用語はきわめて雅、敘述も明潔、冗談をのべても雅を傷わず、婉にして諷多く、遠く唐人の遺響を嗣ぐに足る。近くは泰西の變つた風俗をみることもできる。譯者は蓋し、社會を善導するの意を寓したのであつて、近時にはすこぶる僅見するのみである。よろしく推薦を與えて模範とすべしと考える。

この報告書（批語）を周樹人の執筆であると斷定しているのは、沈鵬年である。

沈鵬年によれば、周樹人がのちに普迅の筆名で發表する中國小説史についての論考にみられる觀點と、この批語の觀點が一致するという。すなわち、（一）唐代において小説が意圖的に創作されるようになったこと。（二）そのあとをうけて『聊齋志異』『閱微草堂筆記五種』が出現したこと。さらにそれは、狐や亡靈に假託して自己の見解をのべたものであることである。⁽¹⁷⁾

沈鵬年はそのように兩者をつきあわせただけでなく、批語にみられる「陳腐でなければ濫惡である」という表現に注目

してつぎのようにいつている。

魯迅先生はここで各種の雑誌に掲載された「陳腐濫惡」な鴛鴦蝴蝶派の流れの小説をこっぴどくやつつけている。¹⁸

これは周樹人として執筆されたものであるが、沈鵬年がこれを「魯迅先生」の文章として引用することは、あながちに咎めることはできない。このときの周樹人は、のちに「魯迅」として同様の趣旨をのべる人間でもあったのである。

だがしかし、ここではチェホフの短篇を「札記體」（當時の字體では「劄記體」）の延長でとらえている。

「札記體」を辭書的にのべるとすれば、つぎのようなことであろうか。

「札記」文體の名。讀書して思いついたこと、悟ったこと、見聞したこと、折にふれてメモしたことが蓄積されて一篇の文章となったものをいう。たとえば、清の盧文昭には『龍城札記』『鐘山札記』があり、趙翼には『廿二史劄記』がある。¹⁹

チェホフの短篇を、右の『龍城札記』あるいは『廿二史劄記』をならべて理解することは、おそらくこんにちのわれわれには不可能である。唐代の小説はともかくとして『聊齋志異』の延長においてチェホフをとらえるのは、チェホフにたいする冒讀である（と考える）。

通俗教育研究會の甲、乙、丙の表彰狀では、札記體は丙種の表彰狀である（それだけ甲、乙、丙に差を設けているわけである）。この譯書に乙種の表彰狀を授與しているとしても、この理解のしかたは、完全に承服できない。

しかし、讀者の水準を考慮したのかもしれない。

あるいは、小説史研究にうちこんでいた周樹人があたまのなかで考えていた分類に、たまたまひきずられたのかもしれない。

批判している、當時の水準の低い（と周樹人が考えた）作品と比較するため、同一の類型にあてはめたにすぎないのか

もしれない。

この時期にチェホフが翻譯紹介された意味は大きい。譯書名が「風俗にたいする軽い批評」となっているのは、あるいはチェホフ理解の程度を疑わせるという反論を招くかもしれないが、文學を深刻なものに考えることがなかったこの時代にあつて、このような紹介のしかたは、讀者にとって手にとりやすかつた。讀者のある部分は、それならわたしも筆をとろうかと、自分のまわりの「風俗」をみまわしたのではないだろうか。數年のちに、中國において、近代文學の概念という「小説」の試みが、俄然、堰をきつたようにしてはじまるが、そのような氣運をもたらしたのは、翻譯がさかんであつたことによるもので、おそらく、なかでもこの短篇集も影響力があつたのであらう。

そしてこの氣運につきうごかされた人間のなかに、周樹人も含まれるであらう。もとより、この短篇集によつて、周樹人はじめてチェホフを知つたとはいえず、この短篇集によつてのみ、チェホフのみに影響されたといふことは、いえない。だが、すでにチェホフの讀者が（中國語による讀者が）存在するといふ事實は、チェホフ的な作品を試みようとするさい、一種の安心感を周樹人を含めた若干の試作者に、あたえたであらう。

四十六人の作家（十四カ國にわたる）による四十九篇の作品を收めた、ヨーロッパ、アメリカ短篇集、『歐美名家短篇小説叢刊』についても同様のことが、いえよう。

ここに收められた作家は、デフォーはじめディケンス、ハーディ、コナン、ドイル、ヴォルテール、バルザック、デューマ、ドーデ、ゾラ、モーパッサン、ホーソン、ポー、マーク・トウェイン、ツルゲーネフ、トルストイ、ゴーリキー、アンドレーエフ、ゲーテ、等々、いやくも文學好きをもって自任するなら、ひととおりは眼をとおしているはずの作家が並んでいる。さらに、アンデルセン、ストリンドベルイなど北歐の作家、また、ハンガリア、セルビア、フィンランドなどの地までも包括している。

これについて、當時、周樹人とともに紹興會館で暮っていた周作人は、のちにつきのように記している。（これを便宜上周作人文の甲と名づける）²⁰

魯迅と周瘦鵑のことは以前にだれだったか、新聞紙上で言及していた。周君が翻譯した『歐美小説譯叢』三冊は出版社から教育部に送って登録したさい、批覆してはなはだ賞讃されたのであるが、そのとき魯迅は社會教育司にあつて科長であつて、このことはかれが執行したのである。批語はそのときに讀んだとはいへ、もはやはっきりしない。周君がイギリス、アメリカ以外の大陸の作家を選んで譯出したことについて、もっとも評價し、惜しむらくは多くないことだ、といつていたとおもう。それはだいたい民國六年夏のことであつた。

『域外小説集』はずっと以前に失敗したにもかかわらず、意外にも似たような傾向をこれに發見して、空谷に足音を聞くといった感があつたのであらう。ひきつづき譯出して新文學に力をつけ加えることを魯迅は望んでいた。どういう理由があつたのか、その後、周君の翻譯はみかけなくなった。

ようやく文學研究會が『小説月報』の編集をひきうけ、ヨーロッパ大陸の、とりわけ弱小民族の作品を翻譯する氣風が、ここに勃興したのである。

たくさんの名著が中國に紹介された。しかしそれは五、六年あとのことである。

ところで、周作人の別の文章は、當時の状況をさらに詳しくのべている。（便宜上、周作人文の乙と名づける）

これは一九一七年に出版され、中華書局から教育部に呈されて審査、登録をうけた。手續をへて魯迅の手に届かれると、かれは一見しておおいに驚き、「空谷の足音」と考え、會館にもち歸つてきた。私とともに稱賛の評語を合作し、部の名義をもって發表した。

周瘦鵑はのちに、周作人のこの二つの文章を引用して魯迅を追想している。²¹

その引用によれば周作人文の甲は、一九五〇年、上海の『亦報』に掲載され、筆者は「鶴生」と署名していたという。表題は「魯迅と周瘦鵬」であった。一九五〇年當時、周作人は匿名に近い筆名でこのような文章を發表、のちに自著にいられたのである。

周作人文の乙は、まえの一文につづいて發表されたといい、掲載紙名を記さないが、おそらくこれも『亦報』であつたろう。筆者は「餘蒼」で、表題は「魯迅の周瘦鵬譯作にたいする賞揚」と題されていた。これものちに自著に收められた断片である。

周作人文の甲はかれの著書、『魯迅の故家』に收録されている。ここに引用したのは、この『故家』からであるが、周瘦鵬は『亦報』掲載のまま引用している。いま照合すると、『故家』で『歐美小説譯叢』となつてゐる箇所は周瘦鵬の文章では『歐美名家短篇小説叢刊』と改められ、『民國六年』は「一九一七年」と改められている。周瘦鵬による加筆訂正であらう。

周作人文の乙は『魯迅の青少年時代』に收められている。いま周瘦鵬の文章に引用されているものと照合すると、若干文章が異なつてゐる。つまり、昔、周作人はつぎのように書いていたのである。

もともと魯迅は當時、教育部の社會教育司で僉事科長であつて、この部門の事〔翻譯の推薦のこと〕を主管してゐて、中華が審査をうけるために送つてきた原稿を紹興會館にもちかえり、自ら閱讀した。先生はもともと翻譯の氣風を提唱する考をもつていたので、本書の批語に特別に賞揚の言葉を加えた。そして、さらにつぎのようにつづけている。

中華書局が當時の批語の原文を探しだすことができるなら、これは魯迅先生の手筆であることを確認することができるであらう。

抗戰前夜、上海の文化工作者は當時の國情を直視して積極的に禦侮をよびかけ、連合戰線を展開した。新聞紙上に、郭沫若、魯迅、周瘦鵑ら數十人の連合宣言を發表したのである。周先生にたいする魯迅の評價は、一貫して高いものがあつた。

周作人のこのような證言によれば、少なくとも『歐美名家短篇小說叢刊』の原批・覆批はいずれも周樹人の執筆であることは、まず疑いない。

また、周作人の證言がなくとも、これだけの魄力をもって周瘦鵑の譯業を肯定する力量をもった批語の筆者は、周樹人以外に考えられない。小説分科會に、ほかに人物は見當らない。

これは魯迅の佚文として、當然かれの全集に收められてしかるべきものである。

批語はつぎのように記されている。

凡そ歐美四十七家の著作、國別にして計十有四。そのなかの意、西、瑞典、荷蘭、塞爾維亞は中國にあつてはみな創見に屬す。選するところも佳作多し。また毎一篇に著者の名氏を署し、ならびに小象略傳を附す。心を用いる、すこぶる懇摯、志は俗人の耳目を娛悅せしむるのみにあらず。近來の譯事の光となすに足る。ただ諸篇は陸續と雜誌に登載せるにより、體例はいまだ統一する能わず、借題の造語も本國の成語を用う。原本はもとよりかつてこれあらず。誠ならざるを免れず。書中に收むるところ英國の小説をもつて最多となす。ただ短篇小説の英文學における、もともと佳製は少なし。ゴールドスミス、およびラムの文は雜著の性質にかかわり、小説においては類せずとなす。歐陸の著作はたいしては入手しやすからず。ゆえにいまだ相當の紹介をなす能わず。またいわんや國をもつて分類し、諸國は種族をもつて次第せざるは、また小失となす。然れども、淫佚の文字坊肆に充塞する時にあたりて、この一書を得たり。讀者をして、いわゆる哀情慘情のほか、なお純潔の作あるを知らしむるは、もとよりまた昏夜の微光、雞群の

鳴鶴なり。

〔覆批〕本書を覆核するに、搜討の勤なる、選擇の善なる、まことに原評のいうところの如く、近來の譯事の光となす。宜しく獎を給し、もつて模範を示すべし。

この批語にみられる熱情（靜かな熱情）には瞠目させられる。

沈鵬年はこの批語も「魯迅」の執筆であるといっている。

包天笑が『家なき兒』を譯しているのも注目される。これを『苦兒流浪記』と題したことは、すでにのべたとおりである。

包天笑と教育部次長、袁希濤の關係については、包天笑自身が記している。二七七—八頁。

したがって、この譯書が推薦になつたのは、他の創作小説と同じく、もっぱら袁の發案であつたろうが、これの審査報告（原批）は、そしてまた覆批も、周樹人に執筆を依頼したのではないかと考えられる。

本書は社會にたいし獨立して生活することを提唱し、寄生的生活者（原文「依頼者」）にたいして鍼砭を下す。譯筆も雋永、寶愛すべく、上等に列して表彰すべきものと考ええる。

〔覆批〕本書は興趣ゆたかで、カミと終始ともにいるのは犬のカピである。流浪時の孤獨がわかるというものである。本書を読むものは、人間は自分で自分を助けなければならないことを知るであろう。また西人の社會が慈善を好むことをみるであろう。原評に賛成し上等に列して表彰すべきであると認める。

マロのこの小説は中國では好まれたらしく、のちに章衣萍が譯して『苦兒努力記』と題し、徐蔚南が譯して『孤零少年』と題しているが、いずれも包天笑譯におくれること十年であつた。しかし、フランス語からの譯であつたろう。

ヴェルヌの作品が二回にわたつて推薦になつてゐるのも注目されよう（第二回、第三回）。周樹人が日本留學時代に、

二篇も譯出しているのを考えると、あるいはかれの發案によって推薦になったのかもしれない、審査報告書（原批）も、また覆批も、かれが執筆したのかもしれない。

『秘密的使者』は、日本では『皇帝の密使』と譯されている。原作の題は『ミシェル・ストロゴフ』、すなわち主人公の名である。

批語はつぎのように記されている。

本書はロシアのシベリア地理を熟知している。ストロゴフが使命を奉じて艱難困苦、百折不撓であるのは、もっとも世道人心に有益である。上等に列すべきである。

〔覆批〕この種の小説は讀めば數益あつて、第一に小説を借りて地理上の知識を注入できる。第二に借りて民族の状況を周知できる。第三にストロゴフの冒險の一節は、人をして冒險心、責任心に富ましめる。第四にストロゴフ母子の慈愛と孝養の心はナージャが萬里親を尋ねるのとあわせて、天性の刻薄なる人間をして自ら愧じしめる。第五にストロゴフとナージャが患難のなかに出會い、互いに助けあい、義をもって自ら持すのは、人をして情を正しく用いることを知らしめる。原評のごとく上等に列し、乙種の表彰狀を授與すべきである。

つぎは『大荒歸客記』、日本語譯では『征服者ロビュール』の批語である。

本書はフランスの飛行船の冒險をのべる。さらにアメリカの探險家とであり、ついに北極をさぐって歸還する。軍人の勇敢、婦人の愛國、書中に強調されている。上等に列したい。

〔覆批〕本書を覆審するにフランスの杜退中尉がある女性をつれて遊び半分に飛行船に乗船したところ、悪者のために繫留索を切斷された。飛行船は上昇し、空中にあって風におし流され、海岸で降下、一隻の北極探險船にであつた。船長燕士が飛行船にのりこみともに北極探險に出發する。ついに北極にいたり、さまざまな歴史を發見する。歸還に

さいしても艱難にであうが幸いにも救出される。規律に服従する中尉の勇徳、愛國の熱情あふれる女性の冒險心、拍德森が學問好きで思慮深いことが記され、青年がこれを読めば、まことに志氣を激發するに足る。

この翻譯は登場人物についても潤色があるようである。

フランスの杜退（無理に宛てるなら、ドゥートイ）中尉は原作ではロビュールで、じつは中尉か否かもわからない謎の男である。

船長燕士というのはジャネット號の一等航海士のことであろうが、かれらは難破しているところを救助されただけである。探險したのは、南半球ではアリューシャン、カナダあたりで、極地としては南極（南極點）へいったのである。好學心のつよい拍德森はとくにだれともいえない。

右の批語の原批は短い。覆批はそれを補うかのようにていねいな説明をくわえている。覆批については、周樹人以外、考えられない。

七 結 語

辛亥革命より以前、中國では新しい文化的な色彩が加わりつつあった。デュマ（フィス）の『椿姫』を林紓が譯して『巴黎茶花女遺事』と題して出版し、たいへんな評判をえたのが、義和團が世間をさわがせはじめた一八九九年である。この年、これの成功をきっかけに、林紓が科擧の受験を斷念し、翻譯を自分の仕事ととして選んだことは、時代の轉換を告げるものであった。

林紓の翻譯は、むしろ潤色ともいうべきものであったが、かれは時代の潮流にすすんで身を投じ、變法維新を主張した

から、その潤色はかえって讀者に喜ばれたのである。かれにつぐジャーナリスト、包天笑も潤色による翻譯をすすめた。包はさらに重譯を厭わず、日本語に譯された西洋文學にもとずいて譯出したが、その日本語譯が、じつは潤色譯というべきものであった。

潤色して譯すことをさらに一步すすめれば、翻案して創作することになる。推薦になった包天笑の創作が、じつはすべて翻案であつたことはすでにみたとおりである。

周樹人はつぶさに、このような翻譯と創作にたちあつたのである。

かれは教育部の役人として、几帳面にその職責をはたした。通俗教育研究會の小説分科會主任を途中で辭任はするが、かれはやはり無關心にはなれなかつたとおもう。

推薦になり、表彰狀をうけた小説はすべて、周樹人の息がかかっていると考えられる。一九一六年二月に小説分科會主任を辭めているが、しかし三月、七月には會議に出席して意見をのべており、十月には審査幹事に任命されている。衆目のみるところ、かれは小説の審査に不可缺の人物であつたし、さらにそれを監督、再審査する教育部社會教育司第一科の科長であつた。

民國初期の文藝界にすこぶる權威があつたのである。ただし、その權威は行政的なものであつた。だが、その行政には、批評的な色彩もあつたのである。

その批評性もこめて、かれは辣腕をふるつたといえよう。清朝末期から民國初期に、きわめて流行した黒幕小説の彈壓にも、かれがまったく力を貸さなかつたとはいえない。かれの審査、すなわち檢閲の能力は、衆目のみるところ、一致して高かつた。これを社會主義體制におきかえると、かれの占めた地位、演じた役割は、現在の中國共產黨中央宣傳部の部長の役割に近い。だがかれが時の權力とは一線を畫したことは念頭におくべきであろう。小説分科會の會議をくりかえし、

審査の基準、手續などを一步步つくりあげたあたりは、むしろ實務家である。

かれは、したがって、その職務（教育部の科長、小説分科會主任、のちは審査幹事）を熱意をもって遂行したといえ、模範的な官吏であつたのである。

かれがその前半、分科會主任をやめるまで、もっぱら上部の要請に抵抗し、審査をひきのばしたという説はうけいれ難い。手續上、それだけの時間が必要であつたのであり、審査の拙速を避けたとみるべきであろう。かれは袁世凱に迎合しなかつたが、政府の役人としてなすべきことはなしたのであるから、ある意味では「協力」したのである。これを「協力」と呼ぶのをためらうあまり、抵抗したのだ、ひきのばしたのだと辯解（周樹人は辯解していいにもかかわらず）したところで、あまり意味はない。民國初期の中央政府は、その部分では建設的で、積極的で、健康で、常識的だったのである。これを全面的な暗黒とみようとするから、無理が生じるのである。

すでにかれは政府機關に勤める役人なのである。科長なのである。官製御用團體の主任であり、幹事なのである。一から十まで、政府の方針、上部の指令に反對する人間として周樹人を描こうとするから、奇妙なことになる。周樹人にはできないこともあるのだ。それを「魯迅」と呼ぶから、無理な説がいちおうなりたつにすぎない。

しかし、袁世凱の権力は強かつたから、周樹人が袁の死によって解放感をおぼえたということはある。したがって、一九一六年六月以降、小説の審査にとくに積極的になつたという説はなりたつ。そして、かれが積極的になつた成果、成績は、推薦になつた小説數十篇を眺めわたして確認できよう。^①

かれはこのように小説の審査にあけくれた。一九一八年五月、「狂人日記」を雑誌『新青年』に發表したのは、はたして偶然であろうか。翻譯が潤色譯であり、創作小説が翻案であるというそれまでの時流を考えあわせると、「狂人日記」も翻案の部類にはいるであろう。これにはモデルがあつたと、周作人はいうが、^②周樹人をとりまく社會的環境は無視でき

ないとしても、かれがそれまでの約二年間、職務として多數の小説を閱讀したという事實は、きわめて大きな意味をもっていると考えられる。

かれは九十餘篇の小説の推薦に關與したが、推薦作をのみ讀んだのではないはずである。もとより、惡しき作品、低劣俗惡な作品はななめにざっと眼を走らせるだけでよかつたろう。しかし、たんなる小説好きの讀者としての讀書ではなかつた。

「狂人日記」發表にさいして、かれははじめて魯迅という筆名を考案した。この作品と筆名は、果實が熟するように生まれたのであろうが、その土壤は、教育部の役人としての生活であつた。魯迅としてではなく、周樹人として役所に勤務した、その役所の仕事、じつはかれをみちびいて、包天笑、林紓、周瘦鵑の仕事ぶりに接觸させたのである。かれらにたいする満足と不満足が、かれにこの小説創作の筆をとらせた。しかし、周樹人のその筆はそれまでの潤色翻案の流れとつづくものであつて、まったく無縁の地點から出發したのではない。

注

小引

(1) この問題については、すでに先行するつぎの論文、著作、資料集がある。

(一) 沈鵬年「魯迅在『五四』以前對文壇逆流的闘争——關於他和通俗教育研究會關係的一段史實」『學術月刊』一九六三年六月號(總七八期)二四—三九頁。

通俗教育研究會そのものと周樹人のこの會における活動にもっとも早く着眼し、かつもっとも徹底的に資料を涉獵したのが、この論文である。

以下、沈論文と記す。

周樹人の役人生活

(二) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社、一九七九年八月。とくに「通俗教育研究會」の節。四五—四七頁。この節は沈論文を多く引用する。また、この節は、つぎの(三)の『魯迅生平史料匯編』にも收録。

本書は全文九六頁の小冊子であるが、教育部における周樹人の活動をほとんど網羅し、概括している。

以下、孫瑛と記すのは本書のことである。

(三) 『魯迅生平史料匯編』第三輯、天津人民出版社、一九八三年四月。

本書は、編集委員 鍾敬文、丁景唐、單演義、吳宏聰、倪墨炎、李樹人、李福田、韓立群、薛綏之。主編 薛綏之。副主編 韓立群。編

集委員會顧問李何林、唐弢、戈寶權。第三輯は「魯迅在北京」、「魯迅在西安」を収録。編著者は前者が韓立群、榮太之、胥克強、董兆初。後者が單演義。孫瑛の重要な部分は本書に収録されている。

以下、『生平史料』と略稱する。とくに第三輯と斷らない。

(2)

この段落の記述については、さらに下記の節「一 周樹人と通俗教育研究會」において述べる。資料は前注(一)にあげた(一)による。

統計は沈論文二七頁。おそらく直接『教育公報』などを閲覧して抽出、計算したのである。沈論文によれば、小説六百三十餘篇を審査した結果、表彰状を授與したのが二十六篇、「上等」と評價し推薦にしたのが七十篇、出版禁止、販賣禁止としたのが三三篇、このほかにも數百點が「下等」として制限を加えられた。新聞にも發行停止を命じたものがある。「上等」、「下等」の判定については、本文にのべる。

演劇については具體的數字は未詳。活動の狀況も未詳。

なお、筆者は右の表彰状(原文「褒狀」)を授與された小説については、その小説審査報告の原文の寫眞を入手することができ、すべて本稿にも引用した。『教育公報』が掲載した教育部部令の一部も同様に引用した。この寫眞入手について盡力たまわった中國社會科學院世界歴史研究所汪同榮先生に感謝する。また原所藏者である機關の好意にも感謝する。

ただし『教育公報』をすべて寫眞撮影することは不可能である。また「上等」と評價された小説七十篇がどのような作品であるか、すべてにわたって読むことは目下のところ不可能である。

また、第二次通俗教育研究會の存在を一九二三年ごろまでと推定したのは、一九二三年には「部款缺發、經濟困難、一切事務、艱於進行」という状態であったからである。これは沈論文からの孫引き。三頁。ただし沈はなにからの引用であるか、記さない。

(4) 前出の沈論文はこの三年間、周樹人(沈論文では魯迅)が一貫して小説分科會の主任であったとする。沈が引用する一九一七年十一月三日

付、教育部が發した「第五四號委任令」(『教育公報』第四年第十六期)はつぎのとおりである。

「茲派兪事戴克讓接充通俗教育研究會小說股主任、仰即遵照。此令」

右につづいて、沈は、つぎのように記す。

魯迅先生的「小説股主任」一職便這樣的被解除了。

すなわち、一九一七年十一月まで、周樹人は小説分科會(原文は「小説股」)の主任であつて、戴克讓がそのあとをひきついだするのである。

しかしながら、つぎのような公文書が存在するのである。

(一)

爲飭知事、本部兪事周樹人請免去通俗教育會小說股主任兼職、應即照准。改派編審員王章祐兼充通俗教育研究會小說股主任。此飭。

(二)

呈爲呈請事。查本會章程第十一條內載、幹事由會長於會員中推選詳請教育總長核定等因、茲由本會推定會員周樹人張宗祥爲小說股審核幹事、理合照章呈請鑒核施行。謹呈教育總長。

教育部指令。據呈推定周樹人張宗祥爲小說股審核幹事等因、應即照准。此令。

右の公文書は原掲載は『通俗教育研究會報告書』(以後、『報告書』と呼ぶ)。ここでは『生平史料』から引用。一七四一五頁。日付はおそらく『生平史料』の編者による。

沈論文は『報告書』からも引用している。右の(一)(二)をみおとしたのは不思議である。本文の記述は、右の(一)(二)にもとづく。

沈論文は、一九一五—一七年の通俗教育研究會の成果のうち積極的に評價できるものを魯迅と結びつけるが、これは右の(一)(二)を知らないことも関連していよう。

なお右の(一)(二)の公文書は、もとは標點符號は附されていない。

(5) この中國の研究者とは沈鵬年である。

ただし前注(4)に引用の教育部の公文書(二)にみられるように、張宗祥も小説分科會の審査幹事に任命されている。報告書の一部は張宗祥も執筆したと考えるべきであろう。

ただし、沈論文も第六回の報告書は除外する。

(6) 「二つの顔」云云は左の拙文にすでのべた。

「周樹人の役人生活―五四と魯迅・その一側面」(京都大學人文科學研究所共同研究報告)『五四運動の研究』第三回⁸。同朋舍、一九八五年一月。

本稿は右の拙文の「附記」にのべた、執筆豫定している四章のうちの一章として構想したが、分量がこれほど多くなるとは意外であった。

一 周樹人と通俗教育研究會

(1) 第一次通俗教育研究會については、沈論文の記述による。前出二四―二五頁。

また孫瑛四五―四七頁。これは沈論文を多く引用する。孫瑛のこの部分は『生平史料』にも收録。一三六―一三七頁。

(2) 伍達は江蘇省武進の人。字は博純。生年未詳、一九一三年死去。魯迅日記の注釋による。

(3) 唐文治はこのあと、政治活動にはいる。章炳麟、張謇らと中華民國連合會、ついで共和黨を組織、北京にいて活躍した。しかしやがて政界をはなれ、上海の南洋工業專門學校長を多年つとめた。のち無錫國學專修館を創立、館長となった。のちに國學專修學校と改稱。一八六五年生まれ。江蘇太倉の人。

傳記についてはつぎを参照した。

周樹人の役人生活

(1) 橋川時雄『中國文化界人物總鑑』中華法令編印館、一九三〇年、[名著普及會、一九八二年覆刻]

(2) 黃惠泉・刀英華『分省・中國人物誌―論人物之地理分佈』波文書局、一九七八年影印(原本出版社未詳、一九三二年版)。ただし、これは園田一龜『新中國分省人物誌』を黃・刀が中國語譯したものである。橋川のこの項の記述は、園田に負うようで、文章が一致する。ただし園田には生卒年の記載がない。

(4) 黃炎培は上海、南洋公學を卒業、日本に留學、教育學を専攻。辛亥革命にさいして陳其美の下にいて江蘇都督府教育科長、江蘇省教育司長となった。さらに、江蘇省教育會副會長、江蘇省議會議員にもなった。一九一四年に省教育司長を辭職。一九一七年、アメリカを視察、歸國して上海に中華職業教育社を創立、理事長になる。

一九二一、二二年、二度にわたって教育總長に任命されたが就任せず。抗日戰中は國民參政會常務委員、一九四〇年に中國民主政團同盟を發起。四五年に延安を訪問、『延安歸來』(日本語譯『延安報告』一九四六年)を著わす。同年、中國民主建國會を發起。一九四八年の政治協商會議に協力。建國後は、中央人民政府委員、政務院副總理兼輕工業部部長、全國人民代表大會常務委員會副委員長、政治協商會議全國委員會副主席、中國民主建國會主任委員。一九六五年十二月二十一日死去。

(5) 日記一九二二年十二月三日。つぎの送付の記事は、日記一九一三年三月三十一日。

會員を任命した通達はつぎのとおりであった。『生平史料』一五四―五頁。原載は『報告書』。

爲飭知事、現在通俗教育研究會章程業經准公布、亟應遴派會員開會研究以策進行、除會長綜理本會事務、應由本部次長兼任外、茲特依照會章第七條第一項、指定本部職員畢惠康、鄧文煥、劉文炳、陳任中、高步瀾、吳震春、王家駒、洪達、周樹人、徐協良、黃中堉、沈

- (7) 蔡元培の講演の内容は『教育雜誌』九卷三號、一九一七年三月十五日發行、「事件」の頁、一一五頁にみえる。「蔡鶴卿先生在通俗教育研究會演說詞」。沈論文も孫瑛もこの講演についてふれない。
- (8) 本稿「小引」の注(4)参照。

二 通俗教育研究會の成立

- (1) この経緯は沈論文による。二七頁。
- (2) 湯化龍の意見書、「呈大總統擬設通俗教育研究會文」の全文は未見。『通俗教育研究會報告書』に所収のはずである。
- 本文に引用したのは、沈論文に引用されているものの孫引。二九頁。原文はつぎのとおり。

……學校而外、尤借有社會教育以補其所不逮。……值此國基甫定、民智未純之時、使非於此項教育積極提倡、不徒人民之德慧不開、社會將日趨於下、而蚩蚩者氓、乏適宜之訓、化龍尤懼無以定志氣而正趨向、其於國家前途關係甚巨。故通俗教育實爲現今刻不容緩之圖。……現擬選集會員定期開會、……丞謀……妥善辦法、以挽頹俗而正人心。

(3) 「通俗教育研究會章程」は未見。

本文の説明は沈論文による。二七頁。ただし沈論文は、この「章程」の内容を説明するにあたって條文を引用せず、「教育部呈擬提倡忠孝節義施行方法」からの引用をもってあてている。また、二代目の會長、張一磨の訓辭も引用している。

「改良」について、沈論文はつぎのようにのべている。

「改良」にあたって、かれらはさらに「忠孝節義ノ精義ヲ闡揚シ、專書ヲ成スヲ勅令シ歌曲ヲ編選シ及ビ圖書ヲ制作スル」など

の使命をおび、「務メテ家喻戶曉ヲ期シ人人ヲシテソノ天良ヲ激發セシメ」「以テ群惑ヲ祛ヒ」帝制運動のために道路を平らにしようにとした。

この引用は、「教育部呈擬提倡忠孝節義施行方法」からである。研究會の會則がはたしてここまで明確にうたっていたかは疑問である。うたっていたとすれば沈論文は當然それを引用したであろう。しかし、「改良」について、このようなイデオロギーを考えていたというのも否定できないであろう。

- (4) 會員に任命した通達の原文は本稿「一」の注(6)に引用した。
- (5) 秘書處の通知はつぎのとおりである。

啓者。奉總長囑、通俗教育研究會亟待籌辦、本部所派會員、應於本月十九日下午二時開預備會討論一切等因、特此通知。

右は八月十八日に發せられた。

- (6) 周樹人らを主任に任命した通達の原文はつぎのとおりである。

爲飾知事、通俗教育研究會現經組織就緒、所有各股主任自應照章分別指定、以資進行。茲派該會會員周樹人爲小說股主任、黃中增爲戲曲股主任、祝春年爲講演股主任。此飾。

右は九月一日に發せられた。

『通俗教育研究會職員錄』には、つぎのようにみえる。

小說股主任 周樹人 豫才 浙江紹興 本部僉事

戲曲股主任 黃中增 南半截胡同山會邑館

講演股主任 祝椿年 芷澗 湖北江陵 本部僉事

順治門外永光寺中街 南 二二二七

蔭庭 京兆宛平 京師學務局通俗教育科長

琉璃廠西門路南祝家胡同 南 一二五三

右の「南 二二二七」とあるのは電話番號とおもわれる。

- (7) 通俗教育研究會の會員の氏名は『通俗教育研究會職員錄』が残っている。『通俗教育研究會第一次報告書』附録、として『生平史料』一四

七一五四頁。

姓名と所屬はつぎのとおりである。

調査幹事 劉宗炎 京師警察廳科員

王家駒 教育部視學

孫伯恒 北京通俗教育會會員

審查幹事 陳寶泉 北京高等師範學校校長

陳懋治 教育部僉事

張繼煦 教育部視學

編譯幹事 許丹 教育部視學

馮承鈞 教育部僉事

吳文潔 教育部主事

(8) 八月十九日の準備の會議から成立總會、その翌日の主任會議の経緯は孫瑛による。四七一四九頁。『生平史料』一三八頁。

(9) 小説分科會の「細則」は原文では「通俗教育研究會小説股辦事細則」である。原文は『生平史料』一六八一七〇頁。もとは『通俗教育研究會報告書』所收。

(10) 「小説審査基準」は原文では「審核小説標準」。原文は『生平史料』一七〇一七二頁。日付は、「一九一五・一二」とする。

(11) 「小説ノ善導改良及ヒ禁止辦法議案」は原文では「勸導改良及查禁小説辦法議案」。原文は『生平史料』一七一七二頁。もとは『通俗教育研究會報告書』。日付は、「一九一五」とする。

(12) この原文は『生平史料』一二二頁。もとは『報告書』所收。

(13) 「優良ナル小説ノ目錄ヲ公布スル議案」は原文では「公布良好小説目錄議案」。原文は『生平史料』一七三頁。もとは『報告書』所收。

(14) この原文は『生平史料』一七三頁。もとは『報告書』所收。

(15) 原題はそれぞれつぎのとおりである。

(一) 「獎勵小説章程草案」

(二) 「小説股進行辦法案」

周樹人の役人生活

原文は『教育公報』第三年第四期「附錄」一一二頁。

これを批准した教育部令は、それぞれつぎの表題、號、日付けである。

(一) 「批通俗教育研究會獎勵小説章程尙屬妥協准即照辦」第三百五十三號、洪憲元年三月十五日

(二) 「批通俗教育研究會小説股進行辦法准照辦」第三百五十四號、洪憲元年三月十五日。

(16) 原文は『教育公報』第三年第四期「公牘」八二一三頁。

「演劇改良議案」は『教育雜誌』第八卷三號（出版年月記載なし。民國五年三月十五日と推定される）の「記事」頁「學事一束」欄、二〇一二ページ、見出し「▲通俗教育改良之新標準」にかかげられたもの。分科會で議決の月日は未詳。二月初旬と中旬と推定される。

三 袁世凱・湯化龍・張一磨

(1) 孫瑛、前出、四七頁。『生平史料』一三七一三八頁。

(2) 文官官秩令については、陶菊隱『北洋軍閥統治時期史話』第二冊、三聯書店一九五七年、二七二八頁に記述がある。

それによると、文官官秩令は一九一四年七月二十八日に公布された。袁によって「上卿」を授與されたのは徐世昌ただひとりである。「中卿」にして「上卿銜」を加えるのは、趙爾巽、李經羲、梁敦彥、の三人、いずれも清朝のときに總督、あるいは尙書に任じられた大官僚。

「中卿」は楊士琦、錢能訓、孫寶琦、朱啓鈴、周自齊、張謇、梁士詒、熊希齡、周樹模、汪大燮ら、舊官僚や立憲君主派。「少卿」で「中卿銜」を加えるのは章宗祥、湯化龍ら。「少卿」は董康、莊蘊寬、梁啓超、楊度、孫毓筠ら。趙秉鈞には上卿が、宋教仁には中卿がそれぞれ追贈された。趙は袁によって毒殺、宋は暗殺された人物である。のちに袁は大正天皇の即位にたいし祝賀と贈勳の特使として農商總長周自齊を派遣することを定めるが、とくに周を「上卿銜」を加えた。

以下、『北洋軍閥統治時期史話』は『史話』と略稱する。

- (3) 『史話』二八頁。
- (4) 『史話』同頁。なお袁世凱の祭天式はジェローム・チェン『袁世凱と近代中國』守川正道譯、岩波書店、一九八〇年八月、二二九—三〇頁にも描かれている。
- (5) 一九一五年のこの祀孔典禮は、チェンの同書三三〇頁。拙稿「魯迅と孔子様」『世界』一九八二年一月號、二四—一五五頁。
- (6) 籌安會の宣言書は、チェン同上書二三九頁。『史話』一一二—一三三頁。
- (7) 籌安會の五人は、チェン同上書三三七頁。『史話』一〇七—一一二頁。八月二十三日、九月一日のことは、チェン同上書二三八頁。『史話』一一三—一四頁。
- (8) チェンは「遠い省からの代表がたった九日間で北京に來ることができたというのは、驚くべきことであつた」と記すが、じっさいは北京在住者が集つたのである。『史話』一一四頁。
- (9) 梁士詒のうごきについては、チェン同上書二四三頁。『史話』一二三頁。
- (10) 投票數については、チェン同上書二四五頁。『史話』一二六頁。
- (11) 『史話』一二六頁。
- (12) 『史話』一二八頁。
- (13) 『史話』一二九—一三〇頁。
- (14) 『史話』一三〇、一三四頁。
- (15) 『史話』一三三—一三四頁。
- (16) 『史話』一三四頁。
チェン同上書二四七頁。
- (17) 『史話』一四五頁。
- (18) 『史話』一三三頁。
チェン同上書二四六、二五三頁。

- (19) 梁啓超の論文は、「奇妙な國體問題」とも譯することができる。原文は「異哉所謂國體問題」。チェン同上書二四二頁。『史話』一四八頁。梁のうごきについては、同じく二五五頁。
- (20) 以下地方の軍閥のうごきについては、チェン同上書二五五—二六二頁。『史話』一五一頁以下。
- (21) 徐世昌らのうごきは、チェン同上書二六二頁。
- (22) 『史話』一八二頁。チェンは馮が直接、抗議文を袁におくってきたように記している。
- (23) 康有爲についてはチェン、二六二—三頁。白蕉『袁世凱與中華民國』三五〇頁。
- (24) 國外からの帝政反對は、チェン同上書二四九—二五一頁。『史話』一四二—一四四頁。一三八—一四一頁。
- (25) 日本にたいする特使派遣とそれが拒否されたことは、チェン同上書一四九、二五一—五二頁。『史話』一四二—一四三頁。
- (26) チェン同上書二六四頁。『史話』一八四—一八六頁。
- (27) 總統と皇帝の使いわけについては、『史話』一四六頁、注〔6〕。
- (28) チェン同上書二六四頁。『史話』一八六頁。
- (29) チェン同上書二六七—二七〇頁。『史話』一八八—二二二頁。
- (30) 『史話』一八二頁。
- (31) 以下、湯化龍について補足しておく。
かれは北京進士館の官費留學生として日本に留學、法政大學に學んだ。湖北諮議局長として辛亥革命にあい、黎元洪都督のもとで民政總長となつた。新政府成立後は湖北選出參議員、さらに同院副議長に推された。一九一四年五月一日から教育總長。
- (32) 陳青之『中國教育史』〈大學叢書〉下冊、商務印書館 一九三五年四月、六五四頁につきのような記述がみえる。
——本期「中華民國成立後の七年間を指す」の七、八年間に教育總長たる人物は五、六回交代した。しかし教育にたいして主張を抱いて

いたのは三人だけであった。一は蔡元培、二は湯化龍、三は范源濂である。蔡氏は浙江の人で、教育哲學者であつた。かれが就任したばかりのときに發表したその教育上の主張は五つの教育上の主義を含んでいた。軍國民教育、實利教育、公民道德教育、美感教育、および世界觀教育である。前の三つは當時の教育界の人士が一般に求めていたもので、あとの二つだけがかれの個人的主張である。

湯氏は湖北の人で、政治家であつた。しかし教育については斷乎たる主張をもつていて、民國三、四年（一九一四、五年）にわたつて、上は大總統にたいし、下は各省の教育行政機關および學校にたいし、しばしばその「國民教育」の意見を説いた。

范氏は湖南の人で、教育實踐家であつた。練達で才略があつた。教育總長を歴任し、極力「軍國民教育」主義を提唱した。

陳青之は右のようにのべたあと、この期の教育思想は（一）軍國民教育、（二）國民教育、（三）實用主義教育であつて、これらをめぐつて全國的な議論が展開されたという。そして、（一）の代表は范源濂、（二）の代表は湯化龍であるが、蔡元培独自の美感教育と世界觀教育の二つの主義はこれに附和するものがなかつたので、當時の教育思潮と認めることはできないという。六五四頁。

この國民教育主義については、大總統である袁世凱、教育總長である湯化龍がそれぞれ主張し、また、民間にもこの聲があつたという。民間の聲は、義務教育を提唱したもので、全國民を一つの型にはめようとする「國民教育」を提唱したのが、袁世凱であつた。湯化龍の主張は袁世凱と異なつていた。それは、國民固有の特性を發揚して世界に誇らうとするともに、生活能力の養成につとめ世界の競争におくれをとらないようにするという二つの側面をもつていた。國民の特性は道德を根本とし、孔子を模範と仰ぐことによって樹立される。六五七—六六〇頁。

(33) 梁善濟のこの訓示は、沈論文からの孫引き。三〇頁。沈論文は「通俗

周樹人の役人生活

(34) 研究會報告書」から引用している。

新任の張一磨がこのようにのべたことは『教育雜誌』第七卷第十一號「民國四年十一月十五日發行」九二頁「學事一束」欄の「張總長の教育政策」、および「通俗教育研究會誌聞」の記事にみえる。これは張の談話を二項目に分けて記したものとおもわれる。

前者の項では、張はまず教員の檢定を實施すべきである、という趣旨をのべたという。

(35) 張一磨の總會における訓示は、沈論文からの孫引き。三〇頁。沈論文は「通俗教育研究會報告書」から引用。

(36) 孫瑛のこの記述は、『魯迅在教育部』五三頁。『生平史料』所收、一四〇頁。

(37) 『史話』一三五頁。

陶がいうように、かれらは袁世凱に非協力であつた。しかし、それがどの程度であつたかは、また別の問題であらう。

徐世昌がそうである。

徐は二十四歳のとき、四歳年少の袁世凱と知りあつて義兄弟のちぎりを結んだ。それからは袁と策謀をねる仲となつた。

辛亥革命のとき、清朝の協理大臣であつたかれは袁世凱の起用を主張し、袁は責任内閣を組織、軍、政の大權を掌握した。

袁が帝制を推進すると、かれは政局に大きな波瀾が生じるとみて、辭職した。

「大事を擧げるとき、少しは退却する餘地を残しておくべきで、親密な人間をすべてまきこむと、萬が一、順調にゆかなくなつたとき、局外者の資格で轉換をはかる人間がいなくなる。いま辭職するのは自分のためではない」

徐世昌は袁にこういつて辭めたといわれる。當時六十歳であつた。

袁世凱は帝政を施したがうまくゆかず、一九一六年三月に帝政を廢止、中華民國の年號を復活させ、徐を國務卿をむかえた。徐ははたし

て衰のために盡力したが、時勢の變化は挽回しがたく一カ月で辭任せざるをえなかった。

(38) 以下、袁希濤、高步瀛の傳記は、つぎの資料などによる。

(一) 外務省情報部編『改訂現代支那人名鑑』一九二八年三月

(二) 橋川時雄『中國文化界人物總鑑』前出。注の(一)(三)参照。

四 分科會の審議と周樹人

(1) 「分科會會議錄」は『生平史料』に收録されている。一五六—一六八頁。表題は「小説股在魯迅主持下召開的十二次會議記錄」。

記錄は簡にして要を得ており、しかも會議の雰囲気うかがわせる。

以下の本文の記述は、これをもとに要約したものである。

孫瑛の著については、すでにふれた。注の小引(1)の(2)。

(2) 孫瑛、五四頁。『生平史料』所收一四二頁。

(3) 孫瑛、五四頁。『生平史料』一四二頁。

(4) 『生平史料』一六二頁。

(5) 孫瑛、五四頁。『生平史料』所收一四二頁。

(6) 『生平史料』一六二—三頁。

(7) 魯迅日記一九一五年十月二十九日の條に「下午張總長招見」とみえる。

一九八一年版『魯迅全集』十四卷一八五頁。

(8) 孫瑛、五四頁。『生平史料』所收、一四二頁。

(9) 『生平史料』一六三頁。

(10) ここでの周樹人の報告、および補足の發言は、いずれも「通俗教育研究會第三次大會上小説股主任報告情況記要」による。これには「周君樹人謂……」として以下發言内容が記されている。引用にあたっては、その全文を譯出したが、原文は引用符にいて引用されていない。

(11) 『生平史料』一六七頁。

(12) 『生平史料』一六七頁。

(13) 『生平史料』一六七—八頁。

(14) 孫瑛、五九頁。『生平史料』所收五九頁。および魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』第一卷、人民文學出版社 一九八一年九月、三四六、三四九頁。

「年譜」はそれぞれ「小説股第十七次會議紀事」、「小説股第二十一次會議紀事」と出所を記すが、會議の模様などは記されていない。

なお、「年譜」によれば、第二七回の會議において、かねて周樹人を小説審査幹事に推薦していた件が、教育部によって裁可されたことが報告されている。出所は「小説股第二十七次會議紀事」。三五二頁。

ただし、周樹人がこの回の會議に出席していたか否かはわからない。

右の第十七、二一回以外に出席していたとしても、「會議紀事」に名前が記されていないということはありうる。

五 禁止された小説・表彰狀を授與された小説

(1) 以下にかかげる統計は、鄭鶴聲「中央對編審教科圖書之檢討」『教育雜誌』第二十五卷第七號、商務印書館、一九三五年七月十日發行。一四四頁。年度別の數字は三一頁下段—三三頁上段の記述による。なお、これの一部は張靜廬『中國出版史料』補編中華書局、一九五七年五月にも收録されている。「清末民初對於民衆讀物編審之經過—一九〇六—一九二三年」一四五—四八頁。

(2) 同右、三三頁上段の記述による。

(3) 同右、同頁。

(4) 「新潮」の創刊號にのった一文というのは、志希「今日の中國の小説界」『新潮』第一卷第一號。一九一九年一月出版。一〇六一—一七頁。

本文の引用は一〇七—一八頁。本文の引用は沈論文の引用をそのまま踏襲した。沈はこの箇所を引用するにあたって、こういつている。—

「これらの措置と行動はかつて若干の進歩的知識分子と青年の賛同をえた。一九一九年一月、北京大學の進歩的學生は『新潮』誌上に、つぎのように記した。沈論文二七頁。

志希の論文は、『中國黑幕大觀』などといった黑幕小説、『玉梨魂』などの四六駢麗體の文章、香艷の詩詩を極力排撃している。沈の引用はその排撃の口調の激しい箇所を綴りあわせたものである。

- (5) 「検閲」は出版の自由を制限するものであった、と性急に結論づけることはできないにせよ、しかしながらなお考えるなら、これはやはり「検閲」である。そして、このとき歓迎されたために、「検閲」はよいものであるという通念をうえつけることになり、これがこののち、こんにちの常識からみて出版にたいする弾壓であるにもかかわらず、検閲する側もされる側も、さほど氣にしないという現象を生じることになったのかもしれない。

- (6) 表彰狀の授與については「發給褒狀條例」三條が制定されている。全文未見。

- (7) ここで、報告書の文章としての性格にふれておきたい。

報告書は審査報告とたたわれているから、通俗教育研究會、すなわち實際にはその小説分科會に所屬する會員の執筆によるものであらう。教育部はたんに教育部令によつて推薦を公布するばかりでなく、その推薦の根據を公表しているわけである。この報告書の末尾には、「覆審するに……」といった書きだしで、教育部の擔當者の判定がさらに記されている（記されていないものもある）。通俗教育研究會が上申し、教育部が批准したという手續が、「報告」に示されていることになる。この教育部による判定の文章は、いわゆる「批示」であつて、中國の官僚機構に傳統的な批准である。

「批示」は教育部が通俗教育會にたいしておこなうものであるから、兩者の間には上下の關係があることになる。「覆批」としてこれを扱ふと、通俗教育會のもともとの報告の部分は、小説にたいしては「原批」を施したことになる。すなわち、通俗教育研究會、じつは小説分科會の報告は、小説にたいして「批示」を加えたわけで、この上者の關係もまた、上下の關係にあるとみることができよう。

しかしながら、報告は通俗教育研究會から教育部に提出（あるいは上申）されるものであるから、「原批」であるとはいつても、露骨に小説にたいして上下關係を示してはいない。一種の小説選評といえる性質のものでもある。

- (8) 六回にわたる教育部令の番號、發令の日付け、さらにその掲載された「教育公報」の號數、掲載頁はつぎのとおりである。部令は「公牘」と題する欄に掲載されているが、同じ號の「報告」と題する欄に、通俗教育會が上申した報告書（「通俗教育研究會審核小説報告」と題する）を掲載しているので、あわせて「報告」欄の掲載頁もかかげる。

【第一回】

部令 第八十八號 民國五年九月二十三日 『教育公報』第三年
第十一期「公牘」一五四頁。「報告」一四一七頁。

【第二回】

部令 第二百二十五號 民國五年十一月二十一日 『教育公報』
第四年第一期「公牘」一〇七一八頁。「報告」一六一二〇頁。

【第三回】

部令 第四百九十三號 民國六年三月二〇一日 『教育公報』第四
年七期「公牘」六九一七〇頁。「報告」六一九頁。

【第四回】

部令 第四百三十六號 民國六年六月二十五日 『教育公報』第
四年第十一期「公牘」五七頁。「報告」二八一九頁。

【第五回】

部令 第六百零二號 〔民國六年〕九月二十二日 『教育公報』
第四年第十五期「公牘」八一二頁。「報告」二九一三頁。

【第六回】

部令 第八百四十八號 民國六年十二月二十一日 『教育公報』
第五年第二期「公牘」四二一三頁。「報告」一一二頁。

なお、部令の文體をうかがうために、推薦第一回のさいの部令をつ

ぎにかかげる。

指令通俗教育研究會據呈送審核模範町村等六種小説報告均屬
允協應准給予褒狀文^{第八十八號}
年九月二十三日

據呈及審核報告等情均悉查模範町村等六種小説業經該會一再審核
各報告均屬允協應准給予褒狀原書發還報告及清單存此令

附原呈

爲呈請事竊查本會前議決獎勵小説章程並擬定褒狀圖樣均經詳奉鈞
部核准在案茲經本會查得小説中有模範町村等六種實足補助我國人
之道德智識與本會所定獎勵章程第二三條相符應給予甲乙種褒狀理
合開清單連同原書暨本會審核報告呈請核准施行謹呈教育總長

計開

埋石棄石記 孤雛感遇記

以上二種皆著作應給予甲種褒狀

塊肉餘生述 模範町村 義黑 冰雪因緣

以上四種皆譯述應給予乙種褒狀

(9)

『風俗聞評』に收録されたチエホフの短篇はつぎのとおりである。英
文の題名はこの内容をかかげた資料からのものである。

上冊

- (一) 「適格之防衛」 Overdoing It
- (二) 「律師之訓子」 Home
- (三) 「可棄」 Not Wanted
- (四) 「肥瘦」 Fat and Thin
- (五) 「盜馬」 The Horse-Stealer
- (六) 「錢螺旋審判」 A Malefactor
- (七) 「乞人」 The Begger

(10)

譯者の周瘦鵬は、各篇のまえに作者紹介をおこない、作者名、原作名
の英文綴り(あるいは英譯の綴り)を記しているので、以下の本文の
ような一覧表を作成することが可能であった。しかし、作品の内容と
照合したわけではないので、おそらく誤りもあろう。

中華書局はすべての出版物を現在も所蔵しており、この周瘦鵬の解
説も原本から筆寫した資料を入手することができた。奥付は本文のと
おりの書名であるが、表紙は「叢刊」が「叢刻」となっている。周瘦
鵬譯述。中華書局一九一七年三月發行。

この資料の筆寫についても汪向榮先生を煩わした。

下冊

- (八) 「惡客」 A Troublesome Visitor
- (九) 「一噫致死」 Death of a Government Clerk
- (十) 「亞若蛇」 Agatya
- (十一) 「寶星」 [記載なし]
- (十二) 「花匠頭之軼事」 The Hyad Gaden's Story
- (十三) 「不許大聲」 Hush
- (十四) 「不掩」 [記載なし]
- (十五) 「山莊」 In the Ravine
- (十六) 「小介哥」 Vanka
- (十七) 「夢囈」 Dreams
- (十八) 「說法」 A Story Without a title
- (十九) 「美術家」 Talent
- (二十) 「書記」 Ivan Matveyitch
- (二十一) 「一個紳士的朋友」 A Gentleman's Friend

なおこれをかかげた資料は、――

蒲稍『漢譯東洋文學作品編目——一九二九年三月止』真善美書店
一九二九年、張靜廬輯注『中國現代出版史料 甲編』所收、二七一—
三三三頁。

(11)

以下に推薦された小説についての審査報告をかかげる。

〔覆批〕の見出しは筆者が加えたものである。

【第一回】

(一) 『埋石棄石記』

これはある小學校教師の六、七年間の學校と家庭における事實を記す。平凡な言行は銘記するに足り、讀めば我を忘れる。文筆もまた俗ならず。上等に列すべし。

〔覆批〕これを讀めば虚榮の念を銷すべく、職に盡すの心を起すべし。近日の小説に多く得べからざるの作なり。擬するに原批の如くし、列して上等となす。

(二) 『孤雛感遇記』

竊かに教育の原理をもつて教授管理を考えると精神を重んじて形式を重んじない。實質科學は實驗を尙んで空談を尙ばない。教育小説は通俗教育の一つであるから、自らともにこの趣旨を體し、學校教育の速ばざるを補うべきである。いま孤雛感遇記を閱讀してますます信じるにいたつた。金士荃が雄兒に遇うことをのべては道德および軍國民教育をもつて自強の氣とするよう諄々と説き、かつこれを愛護し激勵し、しかも不十分であることを恐れた。雄兒はこれによつて歡喜し鼓舞され心に會得するところがあつた。相互に親愛と和氣霽々たる美感があり、まことに深く教育の精神を得たものである。またよく山林蟲鳥をもつて動植物の研究をなし、寫生と寫眞をもつて美術と光學の練習とし、もつて博物の智識を啓き、審美の精神を發しまことに實驗の效用を得たものである。かくて雄兒を人材として育成し、蔚然として品端學粹の域にいたつた。教育の原理を深く明らかにしたのでなければ、できないことである。これは教育小説の模範である。

〔覆批〕孤雛感遇記一冊。吳縣包天孝著。上海商務印書館出版。本會の審議をへて上等に列せられた。これの佳處は原評がすでに

周樹人の役人生活

詳述しており、覆審を畢り謹んで原議に附す。

(三) 『塊肉餘生述』

これはあらまし、遺腹の子の再婚のあと繼父からさまたま虐待され、ほとんど下賤の仲間におちぶれるところであつた。母の伯母によつて庇護され、恵まれた生活になり、ついに文豪になつたという筋である。本筋はきわめて簡單であるが、チャールズ・ディケンズ〔卻而思迭更司〕はこれに波瀾をもちこみ六十四章、二十四萬言とした。富めるかな言たる乎。林畏廬先生がこれを譯されたるとき、作者の最高の心血の書であると歎じたのも、もつともである。余はこれを讀むこと前後凡そ三次、咀嚼に味あり百讀厭かざるを覺えた。書中の優點はきわめて多い。その主たる考えは男女は安りに愛情を用いてはならないというのにある。たとえば、マードストーンが、ミス・コッパフィールドを娶つた目的はもっぱら金銀を入手しようとするにあり、しばらく愛情を媒介としたのである。惜しいことに少婦は無知で、かれの術中に墮ちた。ついに破局はやつてきて、その老ミス・トロットウッドを殺す。道樂息子に欺かれてこれを恨んだからである。

女を産みたがり、男を産むのを厭がったのは、ミス・コッパフィールドと同病だつたからである。ひとり春の蚤が死してなお糸を吐くようなもので、もうひとり孤雛翔ぶ孤雛のように遠くへ離れた。結果がやや異なるにすぎない。

かれは小さなエミリーがステイアフォースに誘惑されたやうなもので、ついに街の女をなり、最後には秋の扇のように棄てられた。これは家柄がちがうからであつた。

ストラン博士がアニーを娶つたのは、枯楊に稊を生じようという年齢になり、結婚しようにも相手がなくなつた(事は本書にみえる)、年齢がかけはなれるからであつた。

デイヴィッドとドーラは圓滿に結ばれ、躊躇してかえつて思い

がつつたのであった。それが結婚してブッチーに會うと笑うより泣くことが多くなった。趣味が一致しないからである。讀者が察しないかとばかり、作者はさらに事例をあげる。

たとえばデイヴィットとアグネス、ミコーバーとその妻、チュランとミリー、ペゴティーとバクスター老人、トラドルズとソフィ、圓滿和合しているか、死ぬまで愛情が渝らないか、である。それもここに由來し、お互いの地位、職業、年齢、趣味はほとんど同じでないのである。

これからすれば、男女の愛情は妄りに用いてよいであろうか。近來、歐風東漸し、吾國の男女に自由結婚するものが多い。大都市にはマードストーンのような男がさらにみうけられる。婦人がこれに注意するよう願うものである。

書中、サロン、學校の腐敗が言及されている。校長は授業をおろそかにして壓力ばかり加え、貧しい學生にたいしては鞭打つが、富豪の子弟には媚びる。かくて教育界の暗黒は形容もできない。これはわが國の以前の私塾とほとんど變らない。

無賴漢の白晝強盜、質屋の不正、旅館や酒肆が羽振りのいい客をもてなす様子、辨護士の證文の偽造などは、とくにわが國の現在の社會狀況に符節を合わせたようである。

これを読むものは、改革の志をもたなくてはならない。詩三百篇は關雎を卷頭におき、かたわら鄭、衛に及ぶ。まことに夫婦をもつて人倫の源としている。しかるに風俗は善良なると惡化せるとに分れた。それで、チャールズ・ディケンズがこれを著すにさいしては、趣旨を鮮明にし、まず男女がやたらと愛情をとりかわさないよう、戒めた。しかし、ロンドンが半ば開化した時代の民間の弊害ある習慣も、これにつれて出現し、諷刺の意味もある。余は、ヤモス一家を敘した個所をとくに愛讀するもので、老漁夫が慈愛にみち率直であるのは、海鷗がこれと遊ぶにふさわしい。

ハムは善をなすに勇氣があり、怨みに報いるに徳をもつてした。ペゴティーは幼い主人を助けるのに力を盡した。彼女は教育を受けたことはなかったが、人格は高尚で心づかいが厚い。これはステイアフォース、ユリアらの及ぶところではなかった。ステイアフォースらは禮儀知らずで野獸である。

〔覆批〕これは本會の審査の基準にてらし、上等に列すべきである。名言警論、美はあふれんばかりで、すこぶる社會を匡正するに足りる。原審者の評語にたいしてはきわめて同意を表わす。

(四)『模範町村』

模範町村小説は政治と社會の二者の間に介在し、ただ趣旨が純正であるばかりでなく敘述は詳明で、その社會に功あるところは、もっとも少なからず、まさに上等に列すべきである。

〔覆批〕模範町村一冊。日本農業博士、横井時敬著。大倉の唐人、傑昭文、徐鳳書の共同譯述。九十二節。民國四年五月、商務印書館初版發行。卷頭に小序一篇あり、翻譯の主旨を略述す。卷末に光緒戊申年清光緒三十四年虞憲敘と署す。蓋しその出版の期なり。その民國四年初版というは、商務印書館がここに至り、その各種の將説を月に小本に印し、半價をもつて發售し、この書もまたその一によるなり。前に本會の審核を経、列して上等となす。原評にいう。「模範町村小説は政治と社會の二者の間に介在し、ただ趣旨純正、敘述詳明なるのみならず、その社會に功あるところ、もっとも少なからず、まさに上等に列すべし」と。

いま覆査一過するに、まず書中の主要人物を左に列す。

稻野村長（豐坂村村長） 花子（村長の娘） 小田春雄（醫學士、のちに花子と結婚せし者） 小田長策（春雄の父） 隆子（春雄の母） お霜（春雄の叔母） 佐野村（醫學士） 波瀾（病院長、醫學博士） 畑豐作（試作場技師） 山原（農學校校長） 富林駒太（執袴の子。のちに稻野村長に化せら

る) 小泉誠(小學校校長)

この書の内容はつぎのとおりである。

小田春雄は東京に暮すこと十餘年であつたが、ある日郷里に歸つた。稲野村長がその村をよく治めているのに感服し、ついに村に住みついて、村を離れなかつた。春雄の父母は權勢を求めてきたが、のちにまた教化され、ついにその子を村長の娘と結婚させ、ここに書物も終っている。

全書みな稲野村長の治績を表彰しているから、これは人を主體とし、作者はこれを記したことになる。蓋し、都會の浮僞の弊に慨歎し、重農主義をもつてこれを救おうと欲したのである。これには組合を組織して、人々が自給でき、しかも一切の公共の事業も歐米文明の軌をいたすにある。蓋し、純乎たる理想の作である。

書中に事實を敘べるところは、みな人の問答の詞をもつて書き、深く小説の作法を得ている。書の佳なところは、原評がすでに盡している。ただ全書を總覽するに、議すべきところがいくつある。天下のことは、理想にばかり頼ることはできない。第三節に「稲野村長が三十幾年一身を犠牲に供して銳意經營したおかげで、今日のような模範たる一箇富有の村とはなつたのである」というが、どのようなことを實施したのか、書中にはあらまじは記されているが、詳しくない。もし誰かがこれにいわれていることをすべて實施したとして、はたして十分な成果をあげられるか、疑わしい。これが、その議すべきことの一つである。

都會は繁華の地で、その純樸はもとより郷里に及ばない。しかし人材の集るところで、學術と政治はここに出る。以前、中學地理教科書の編者が、わが國の京師を首惡の區としていて、これは偏つた議論で學生に示してはならないと批評したことがあつた。この書は義を持して極端に走っており、その意圖は世間が輕佻浮薄であるのを指摘し、これを一掃しようというにある。たとえ

周樹人の役人生活

ば、第四節に「春雄は此時、茶を出さぬのを、何となく物足りなく思つたが、此村のことだから、其も廢したのであらうと、漸と氣がつくと同時に、大いに其文明國流なのに感服した」などといっているのは、卒讀すれば笑うべきであるのを免れない。

春雄が村長に敬服し、ついに父母と考えを異にし、最後には父母を悟らせ、村長の娘と結婚する願いをとげるという話は、近時の青年の頭のなかにあるものから脱出していないようであるが、弊害は小さい。

ただ書中にのべる風俗浮僞の弊は、實利をおろそかにして虚榮を競うにあり、わが國の近日の情形と比較すれば、蓋し甚しいものがある。

かの日本人はすでに早くからこれに留意しているが、わが國人にしてこれを知るものは少ない。また、わが國人の小説を作るものは、たいていが消極主義をとり、述べるところはみな過去の情形である。ところが、これは積極的理想として將來の希望をかけつけていて、これは借りて鏡とすべきであらう。今日、これを譯してわが國に移すのは、まことに原評にいう「その社會に效果あるところ少なからず」というものである。謹みて原議に附し、上等に列する。

〔なお原著は「横井博士全集」第五卷、大日本農會編纂、横井全集刊行會、大正十三年(一九二四年)十二月初版、昭和二年六月再版、二六四—三六四頁〕

(五) 『義黑』

これはある黒種の女奴が幼い主人を守つて難を脱し、萬險を経歴してついに安全を獲得することを述べる。情節は至つて奇であるが、正を詭らない。その忠樸は、頑固、怯懦といえども感動しないではいられない。終りの數節は兒童にとつての教訓であり、とくに教育原理とも合する。譯本の小説にあつてすぐれた書であ

ある。上等に列すべきである。

〔覆批〕覆査はすでに終り、原批にてらして處理する。

(六) 『氷雪因縁』

これは文學家ディッケンズが著したもので、ドンビーという富める商人を述べる。俗物で、つねにその富を誇り、息子を可愛がって娘には冷淡であつた。娘はフローレンスといった。

のちに妻も息子も死に、高慢な婦人を後妻とするが、彼女は娘を可愛がった。そこでドンビーはますますその娘に立腹し、告げ口する人間もいたため、後妻と娘を追ひだした。やがて商賣は不振におちいり、貧しい生活を送るようになり、前事を後悔した。すでに結婚していたフローレンスは父親を迎えて養ひ、やさしく慰めた。全書の文筆は佳、譯筆もまた典雅であつて、載せるところの事實は世間を教化するに足る。いささか表彰すべきであらう。

〔覆批〕覆査を終り、前批にてらし處理する。

【第二回】

(一) 『嬰兒就學記』

これの作者は幼年時代の學校において、一年間に起きた事實を回想している。學校の様子と社會の状況をこまごまと記し、親しみ深く味わいがある。その趣旨は學校と社會を激勵し、正しい軌道にのせようということにはかならない。ゆきとどいた配慮は文章にあふれ、用筆の妙は學生が自ら語る口調をとったところにある。少年が讀むと感動するにちがいない。まことに善本である。

〔覆批〕覆査するに、原批にてらし、上等に列す。

(二) 『英孝子火山報仇錄』

英國のハガード原著。林紘、魏易共譯。卷首に序、譯餘語をかかげる。書は凡そ四十章。みな英の孝子、トーマス・オンピーが自ら語る文體をとっている。全體はいくつかの大きな段落に分けられる。第一章。トーマスが執筆の時代と状況を語る。人生の

經驗を経たあとの氣分が全體に及び、あたかもわが國の小説の楔子のようなものである。第二章から第五章まで。トーマスの母ルシー・ルイザがジョン・ルーシーに殺害されたことを記し、全體の發端とする。このあとの各章は、ここから始まる。また、トーマスがリリーに戀したことをのべ、第三十九章に照應させる。第三、四章はトーマスがジョンを得てのちに失うことをのべる。第五章はトーマスの父がジョンが殺害した原因をのべる。文情の變幻である。第六章から第十章まで。トーマスは復讐する決心をし、スペインにいつて暮す。旅にでて、仇敵にであつた最初である。第十一、十二章。トーマスはスペインを去る。途中で危険なめにであうが死なない。仇敵にであつた二度め。第十三章から第十七章まで。トーマスはメキシコで、何回となく死ぬほどのめにあい、神としてあがめられて、メキシコの王女、オトミに戀される。メキシコの珍らしい土俗をのべる。第十八章から第二十七章まで。メキシコ滅亡の様子をのべる。その間、トーマスは死の危険に遭遇するが、ついにオトミと結婚する。メキシコの大將に任せられ、スペインと對峙する。ジョンはスペイン軍に在る。仇敵とあう三度めである。第二十四章。トーマスはディアシにあうが殺さない。これがのちに命拾ひする伏線となる。第二十七章から第三十六章まで。トーマスはジョンに捕われ、侮辱をうけるが、ついに脱出、オトミとともにわずかに残つたメキシコの領土を守り、ついに力盡き、スペイン軍に投降する。

第三十七章。トーマスはディアシに再會して危險を脱し復讐しようとするが、その仇敵ジョンが火山の噴火口に死ぬのを目撃、全書は結末をむかえる。第三十八章。オトミの死をのべ、第十三章以後にのべたことの歸結とする。第三十九章。トーマスは歸國し、リリーに再會、第二章と首尾照應する。第四十章は餘波で、第一章の邸宅を復興、もつて全書のしめくりとする。

章だては嚴密であるといえよう。ローマ教法律の嚴格、メキシコ土俗の殘忍、スペイン軍隊の横暴は、蓋しもとずくところがあるが、でたらめに書いたのではない。トーマスが九死に一生をえて、ついに復讐の目的を達成するのはわが國の小説『西遊記』が玄奘の取經をのべると、すこぶる似ている。ただ『西遊記』は怪物をまじえるが、こちらは人間だけで、理に近い。第三十九章で、歸國したトーマスがリリーに再會して、友人のふりをするのは、わが國の劇場で演じられる、久しく別れていて再會する夫婦の情景に類似している。ただ、トーマスはオトミのことがあつて、内心にためらいがあり、率直に告白しない。わが國の演劇で演じられる、秋胡と薛平貴の物語に比べて、その心づかいはいかにちがうことか。この書は、もつて國民を感動させ、學者の智識を増進するに足るものがある。譯者は小説界に盛名があり、この書を譯した意圖はその序文や譯餘語にすでに盡されている。本會の定める小説獎勵章程によれば、本會の審査ののち上等に列せられるものは獎狀を授與される。この書はまことに適當するに足る。

〔覆批〕 覆審の意見は原批に同じである。

(三) 『穡者傳』
この書はフランスの一少年が都市に住むのを樂まず、身を田園におき勤苦力作、ついに家を起こし、さらにその子がこれを繼ぎ、その父と同様に働いて、學んだことを農事に應用、ますます發展したことをのべる。敘述された事實を綜觀すると、通俗書の價值あるものである。善行を説き、農家の樂しみを語り、人が都市に奔つて遊民となり、社會を日ましに墮落することがないよう、農村生活に安んぜしめるものである。これが第一。いかなる職業であれ、勤苦忠實してのち成功するものであることをのべ、職業を神聖視する觀念を啓發する。これが第二。バロンとフィリップの失敗をのべ、途中で廢業したり、細心でなく經驗のないものは成

功しないことをのべる。これが第三。ポールが企畫經營した經過は、そのはじめは多くの人が疑っていたが、成功してみると利益も大きく、品種は改良され加工業も發展した。農學が必要であることがわかる。これが第四。小説獎勵第三條により乙種表彰狀を授與すべきである。

〔覆批〕これを覆審するに、趣旨は平正で、農業の各方面を詳しくのべるわけではないが、田園の長所は志向高潔、精勵格闘するにあるところをのべている。したがって社會教育にすこぶる裨益する。最近の小説には農業に言及するものは少ない。原批にてらして推薦し、農學を提唱する一助とすべきである。

(四) 『冶工軼事』

フランスの一郷鎮の自治の情況をのべる。ポールが鍛冶職人でありながら政治知識をもっているのをみれば、教育が普及していることがわかる。ポールが老父の訓戒と友人たちの忠告を守り、社會に身を投じたのをみれば、愛國の誠がわかる。

ハイルヒンらがセスヌを排斥したのは、公的な見地に發しており、いささかも私憤をまじえてはいないのであつて、當世の言行不一致の政客は羞すべきである。ポールは縣長に就任してから重要な施策を實施し、決意したことは實行したが、セスヌに報復しようとはしなかった。

ポールは自分の危險を忘れてセスヌの娘を火事から救出し、セスヌが悔恨したことからすれば、道德は人を感動させるものであることがわかる。著者の苦心、譯者の眼光もみなみではない。上等に列し、乙種の表彰を授與すべきであらう。

〔覆批〕本書を覆審するに、すでに本會の審査により上等に列せられている。内容の長所は原評が列舉している。書中に敍ぶところには軍國の大事に言及せず、一農村のことをいう。小説の本旨にかなっている。譯者の文筆は雅潔で、篇首に辨言があつていう。

「近日の課程條目は國民教育を小學校の緊急課程としている。趣旨は美しいが、成果は期し難い。兒童に名分を教えるには、矜を正して語っても、おぼつかない記憶力で言葉のはしばしを覚えるというのでは無益である。むしろ、事實らしくお話をこしらえて語るのがよい。讀者は運動を組織する様子をみて、意義を身近く感じ、國民として盡すべき義務を守るようになるであらう」と。また、つぎのようにいう。

「先人の著述は忠義勃發、捨身殉國のことを多く記す。國民のなかでも傑出の人物である。本書が述べるのは、たいていが尋常の國民であつて、義務を果し社會にあつて能力を發揮する人間は、みな良い國民として愧じない。國が強くなるのは民にある。良い國民が多いほど、國は強い。本書の出版によって國家のために良い國民を増加させることができれば、區々たる出費は償われる」と。

まことに至言である。これは著者が著作の意圖を語つたもので、朱君はとくに譯出した。その眞意は深い。篇末にフランスの政治の概略を附したのも、讀者に有益である。わが國の共和政體は成立まもなく、自治は芽生えたばかりである。本書は新刊ではないといえ、眞の國民の良藥である。謹みて原議に附し上等と定める。原書は政治的な意味を含むが、表紙には「教育小説」としかかざる。重視しているのは國民教育なのである。覆審の意見は原批と同じである。

(五) 『黒奴顚天録』

本書は米洲の奴禁がいまだ弛まざる以前に白人が黒奴を虐待した慘狀を描寫す。展轉として販賣し、妻子は離析し、鞭笞は横しまに施され、慘として天日なし。人をして卒讀を忍ばざらしむ。譯者の意は國民の自覺心を喚醒し、白人は文明を號すと雖も然れどもその異族に待する、じつに人道の言うべきなく、種族を保存

するは惟だ自強にあるを知らしむるにあり。寓意もつとも深遠をなす。譯筆の曲折深透なるに至りては、能く人をして怒らしめ、能く人をして悲しめしめ小説家の能事を極む。誠に佳本なり。まさに上等の列すべし。

〔覆批〕本書を覆審するに、まさに上等に列するとともに獎勵すべし。

(六) 『愛國二童子傳』

審査報告は本文中に引用。二八二三頁。原文をつぎにかかげる。愛國二童子傳二冊。法國沛那原著。林紓李世中同譯。所記爲普法戰爭後法割亞洛沙室及羅享乃之半與普。時法石蒲城有孤子。父垂歿時。受遺命。必返法國爲法人。而普人禁令。凡孤子無人護育者。不聽歸國。二子乃慷慨奮發。聞關逃遁。出求其季父。所至皆動身力作。以自贍。卒能自立。求得季父。相偕歸國。書之所以有愛國二童子傳之名者。以此。統觀全書大旨。則其所注重。實在於詳述二子之勤苦自業。志行超卓。以獎勵青年立志。故全書所有幾無一事非美德。無一語非嘉言。即二童子以外之諸人。亦皆敦篤君子。樂與人爲善者。其訓範之意深矣。其書中結構。則甚爲簡質。以原書本爲幼學而作。譯文亦明暢。誠一最良之青年讀物也。應列入上等。覆核是書。內容具詳原評。核與獎勵小說章程第三條相合。似應給豫乙種褒狀。

(七) 『孝子耐兒傳』

本書は英國、チャールズ・ディケンズの著わすところにして林琴南、冲叔二先生の譯すところ。原書は末章の結束を除く外はすべて七十二章、通じてネル一人をもつて主人公とす。しこうしてキットはその小影なり。キットが母に事うるは、ネルが外祖父に事うるに同じ。キットは身に奇冤を受け、囹圄に處るといへども、その母を念う心は、いまだかつて須臾も忘れず。ネルは家の不道に遭い、行路の難きを歷るといへども、かの外祖父にたいする眞

枕はいまだかつて少しも衰えず。キットはあざむかれネルもまた
クイルプに逼らる。凡そこれはみな正比例観となすべし。ただ一
はすなわち歎を承くるの萊子、堂前の白髪なお新たにして、一は
すなわち仙去るのエンジェル「ここは原文が解讀できない。原文、
「仙去安琪」、陌上の紅英預め謝するもの。その結果は微かに同
からざるあるはすなわち文章の善く變ずるなり。本書の宗旨は純
として孝を教うるにあり。蓋し極めて價值あるの小説なり。まさ
に上等に列して獎を給すべし。

〔覆批〕覆査するに原批に同じ。

〔八〕『秘密使者』

批語の譯文は本文二九一頁。つぎに原文をかかげる。

此書於俄屬西伯利亞地理頗熟。寫蘇朗笏奉使命。艱難困苦。百折不回。尤
有益於世道人心。應列上等。

覆核此種小説。讀之有數益。一借以輸入地理上之知識。二借以周知民族
之狀況。三寫蘇朗笏之險夷一節。使人富於冒險心。責任心。四寫蘇朗笏母
子之慈孝。與那貞之萬里尋親。使天性涼薄者。儼然自愧。五蘇朗笏那貞相
遇患難之中。互相爲命。以義自持。使人知用情之正。應如原評。列入上等。給
予乙種褒狀。

【第三回】

(一)『美州童子萬里尋親記』

アメリカの少年ジミーは父母が歐洲に居住するため姉の夫の家に
預けられた。姉の夫が虐待するため、耐えられなくなつて家出
し、數萬里を旅して親を探した。フランスの都にいたつて、つい
に父母をとある旅館に尋ねあてた。書中には少年が姉の夫に、い
かに仲たがひしたか、姉の夫がいかに苛刻であつたかを描いてい
る。親を探す少年の旅はあらゆる苦難を嘗め、冒險あり、忍耐あ
り、百折不撓、親を探す目的を達するまでやめなかつた。ジミー

周樹人の役人生活

は少年である。姉の結婚を祝つて靴に米をいれて車に投げこんだ
ところ、誤つて姉の夫の鼻を傷けた。少年のいたずらを責めるべ
きではないのである。米をいれた靴を新郎新婦に投げて喜ぶのは
美しい習俗である。不幸にも鼻にあたつたとしても、姉の夫たる
ものは許すべきなのだ。それを自分の家に預ると、むかしの怨を
はらそうと虐待する。その陰險なことは憎むべきである。本書は
かれの鄙惡の狀を敘述して、讀者の同情をひき起す。そしてジミ
ーがいじめられて憤慨し家を出て二つの大陸にわたつて親を探す。
途中の跋涉はしばしば挫折するが、ついに目的を達する。これを
讀めば、懦夫を立たしめ、頑夫を廉くせしめる。進取の精神を増
進し依頼心の強い狀態から脱却させる。かのロビンソン漂流記は
一代の名作であるが、成人の話である。これは純粹に少年の物語
であるから、青年が讀めば自立心を長せしめることができ、成人
が讀めば、誰でも師として學ぶものをもっている、學ぶべきであ
ると感じるであらう。本書は小さな小説で、篇幅は多くないが、
人心を感動させ、世に裨益あり、まことに貴重である。

〔覆批〕覆審の意見は原批と同じである。

(二)『二義同囚録』

本書はイタリアの愛國者ガリバルディが赤シャツ千人隊を率い、
兩シチリア國を攻取してイタリアの統一をなしとげたことを記し
たものである。歴史を記すのに小説の體裁を用いてはいるが、史
實と合致するところは多い。ガリバルディが千人をもつて兩シチ
リア國をとつたあと、ヴォルトゥルノの戦いによってイタリアの
統一は完成した。これによつても愛國心をもつ數勇の士には不可
能なことではないのである。成功しても功績を誇らないのは忠の手
本であり、フランクが勇を奮つて親を尋ねるのは孝の手本である。
まことに社會に有益な小説である。

記するところは、兵糧や武器を援助したことは、義人ファリ

一ナ人名は第三冊がガリバルディに化けて兩シチリアを奪ったとき、
兩シチリアの王は、じつはフランス人であった。本書にのせるのは
舊王らのことのほかは、實際にあつたことである。書中の人物
はリアンナ、フランクら數人のほか、いずれも實在した。年月日
もだいたい正しい。譯筆のところにすぐれた點は地名、人名に注釋
を加えていることであるが、一、二疏略、誤りがある。たとえば、
ラサップはスエズ運河を開通したレセップのこと、有名人である。
パプアはナボリの北にあるのに、南だと注している。ディク
トールは（第二冊百七十頁にみえる。「總制」と譯すべきであ
る）理解が誤っており、音は譯し意味は譯していない。最近の翻
譯者の通弊である。また譯者は地名について配慮が不足している。
ネプルスは固有の地名では「ナポリ」であり、マシエリス^{四冊二}は
通行の「マルセイユ」に譯すべきである。第二版のときにはこれ
を修正してもらいたい。

〔覆批〕覆審の意見は原批と同じである。

（三）『正魯濱孫漂流記』

本書は正續とも荒島の飄情を記し、情節は奇誕である。ロビン
ソンは餘生を憂へ患ひ、そこで宗教に歸依し、藝術を精研し、も
つてその獨立の生活をなした。儒を立たしめ頑を化するに足
り、じつに社會に功あるの作である。上等に列すべきである。

〔覆批〕本書を覆査するに、まえに本會の審核を経て上等に列せ
られている。本書の原著を按ずるに、歐西にあつてすこぶる人口
に膾炙し、往往にして學校の讀本に採用されている。譯本の首尾
も完全であり、譯筆もまた條達修潔である。その自注によれば教
門の語の煩わしいものは削刪したとあり、譯者の審慎をうかがわ
せる。社會に有益と原評にいうのは殆んど虚譽ではない。

（四）『大荒歸客記』

譯文は本文二九一頁。原文をつぎにかかげる。

此書敘一法國飛艇遇險。復與美國探險家相遇。遂探北極而回。軍人之勇
敢。婦女之愛國。書中皆三注意焉。擬列上等。
覆核此書。敘法國一中尉名社退者。偕一女。郎游登飛艇。忽爲奸人將繁繩
割斷。艇遂上升。空中乘風蕩颺。至海濱下降。遇一探極船。船主燕士約乘飛
艇共探北極。卒底其地。發見探極之種種歷史。歸時偏歷艱險。幸而獲濟。書
中寫中尉服從規律之勇德。女郎愛國之熱誠。冒險之性質。把德森之好學
深思。青年讀之。實足以激發志氣。

（五）『鷹梯小豪傑』

本書はクリスチーナの父が盜賊となつたが、娘は伯父伯母の教
えをうけ、すぐれた女になつた。教えられたことにもとずき、盜
窟の老伯爵とその子女を感化した。そののちも道を踏み誤らず、
子を教えて家風は墮落しなかつた。ついにその夫とめぐりあい、
一家がまとまつた。本書の意圖するところを考えると、家庭教育
を重んじ、教えるところは孝弟節義のことにほかならない。文筆
は雅馴で感銘を残す。上等に列したい。

〔覆批〕本書を覆査するに、前に本會の審核を経て上等に列せら
れている。本書の佳處は原評がすでに盡している。いま全書を瀏
覽すると、作者の意は、民治が野蠻から文明に入るの一朝一夕
のことではない。これを實現するには政府の驅使に頼るのではな
く、婦人少年の精誠もこれを導く力がある、ということである。
クリスチーナがかやわい女性でありながら、多くの不良を感化し、
皇室に忠ならしめ、宗教に歸依させた。至誠に發したのではなく
て、どうしてこのように感化できたであらうか。本書が上等に列
し、推薦に與るべきであるのは疑いないことである。

【第四回】

（一）『風俗閒評』

この批語は本文中に引用。二八四頁。

本文中にのべたように、これは周樹人の執筆と推定される。つぎに原文をかかげる。

是書敘社會各種現狀。無奇不有。尤妙在不著褒貶。語多簡永。耐人思索。此亦附掌錄之類也。應給獎。

覆核是書爲割記體。所述多俄國之事。而不詳著自何人。採自何書。按割記小說。盛於唐代。當時作者。斐然可觀。降至近世。所傳誦者爲聊齋志異。閱微草堂五種。諸書大抵假託狐鬼。取意凡近。嗣後作者益繁。均不免自鄒以下之譏。蓋此類之書。隨手撿拾。成書至易。近時雜誌。附載各種。非陳腐卽濫惡。此書譯自外籍。而吐屬譚雅。敘次明潔。讀不傷雅。婉而多諷。遠足嗣唐人遺響。近可見泰西殊俗。譯者蓋隱寓勸導社會之意。近時頗稱僅見。似宜給獎。以示模範。

(一)『苦兒流浪記』

これの批語は本文中に引用。二九〇頁。つぎに原文をかかげる。

此書提倡社會。獨立生活。足爲依賴者。痛下鍼砭。譯筆亦嶽奇。簡永。至可寶愛。擬列上等給獎。

覆核是書。饒有趣味。全書與可民相始終者。惟描比一犬。以見流浪時之零丁孤苦。讀其書者。可知人之宜自助。亦能見西人社會之樂善好施。贊同原評。認爲宜列上等給獎。

(三)『棄兒正篇』

本書の正續二篇は棄て兒のジョフ・ニューランのことをのべる。全書はジョフが自ら語った話になっている。ジョフは孤兒院をでてから、さまざまなめにあい、ついに父親と再會する。話の轉換は想像もつかず、しかも情理に合致する。ところどころ滑稽がまじるのも興味深い。蓋し作者は用筆の法を深く知っているので、

周樹人の役人生活

人を褒めるときも誇大視せず、人を貶しても情を過ぎない。近時の言情小説がもっぱら私語をつつり、社會小説の徒が謾罵を事とするのとは、自ら逕庭する。書中の諸人を觀るに、友誼を重んじて勢力を軽くし、任俠を尙んで遊惰をいやしめる。みな國民の借鏡とするに足る。書は凡そ七十八章、主要人物は十數人にすぎないが、情節は奇幻で、しかも脈絡は呼應し、小説の能事を盡せりといえる。上等に列し、乙種の表彰を授與すべきである。

〔覆批〕覆審の意見は原評と同じ。

【第五回】

(一)『蕪籟錄正續編』

一舟人の少より壯にいたるを敘す。經るところの歴史は老教師に遇い、盜黨に遇い、豪放の舟長、活潑の小友に遇い、兩たび富商に遇う。みな誠實慈善、一はその孤露を憐れみこれを收養し、その後さらに女をもつてこれに嫁す。一はその堅定を重んじ財産をもつてこれに貽る。書中に敘するところ、みな中下流社會の情形にして各人の性質は美惡同じからず、瑕瑜また互いにあらわるも、その大旨は善を獎め惡を懲らしむるに在り。因果を言わずと雖も、これを讀めば自ら能く人をして深く悟らしむ。その點綴する處に至ってはもつとも趣味多し。獎を給せんと擬す。

〔覆批〕本書の内容を覆審するに本會が給獎せる棄兒の一書とすこぶる相類する處あり。西國の小説は多く孤兒を收育することを嘉言す。蓋し、一はもつて獨立の精神を獎進し、一はもつて慈善の性質を養成するにあつて、意なきに非ざるなり。本書中の主人をジャコブとなす。全書みな本人の自述の詞となす。西國の小説は多くの體裁あり。その諸人の面目性情を摹繪する、往往にして出するに滑稽をもつてし、もつて讀者の興趣を引起するに足る。もしこの體裁を用いるに非ざれば、もとより言の親切にして味を有することかくのごとき能わざるなり。原評に書中の敘ぶるとこ

るはみな中、下流社會の情形と謂うは、まさにもつてこの書の獨り際經を具うるをあらわすもの。わが國の舊時の設部はたいていは風雅を揄揚するに非れば富貴を鋪張し、その思想とこれとは、もとより同日にして語るべからず。そのなかにただジャコブがトンベールの遺産を得しこと、およびサラと結婚せしことを述べるは、なお西國の小説に習見する情節にして、篇末に本旨を結明して首尾の章法呼應せるはほとんど疵なくして擗るべし。譯筆は流利調達、時に逸趣を具え、まことに佳構と稱す。まさに原議に照らして上等に列し獎を給すべし。

(二) 『電影樓臺』

一科學家が電をもつて造金するの術を發明し、その富は匹ふるなし。ついで電をもつて人を濟わんとするも、また人の恃むありて情さんことを慮り、一教士および貧畫師に託し調査の職に任ず。これを行うこと數日、畫師は畫を抛つて事を事とせず。その父は富者の家を行竊し、よつて瘋となる。その妹は未婚夫と約を解き、富人の意思に迎合しこれを婚と訂す。その事すでにみな敗露す。牧師また來りて言う。村人の助を受くる者、みな情して事を事とせず、と。富者すなわち黄金の祟をなし、もつて人を誤らしむるに足るを知り、また電をもつてその財産を燬ちて死するを斂す。〔覆批〕譯本の小説の習見するは探險、言情、偵案の諸種にはかならず。この書は體は寓言に近く、初めてこれを讀めばその設想すこぶる奇なるを覺ゆ。しかもなかに至理を含み、透譯してもつてわが國人を餉すれば、もつとも對症の藥石とならん。覆核一過するに原評の定めて上等に列し獎を給すとなすに深く同意を表するものなり。

(三) 『歐美名家短篇小説叢刊』

これの報告は、本文中に引用した。二八九頁。
本文中にのべたように、これは周樹人の執筆と推定される。そ

れで、つぎに原文をかける。

凡歐美四十七家著作。國別計十有四。其中意西瑞典荷蘭塞爾維亞。在中國皆屬創見。所選亦多佳作。又每一篇著者名氏。并附小象略傳。用心頗爲懇摯。不僅志在娛悅俗人之耳目。足爲近來譯事之光。惟諸篇似因陸續登載難誌。故體例未能統一。命題造語。又係用本國成語。原本固未嘗有此。未免不誠。書中所收以英國小說爲最多。唯短篇小說在英文學中。原少佳製。古爾斯密及蘭姆之文。係雜著性質。於小說爲不類。歐陸著作。則大抵以不易入手。故尚未能爲相當之紹介。又況以國分類。而諸國不以種族次第。亦小失。然當此淫佚文字充塞坊肆時。得此一書。俾讀者知所謂哀情慘情之外。尚有更純潔之作。則固亦昏夜之微光。雞羣之鳴鶴矣。
覆核是書。搜討之勤。選擇之善。信如原評所云。足爲近來譯事之光。似宜給獎以示模範。

(四) 『環司刺虎記』

一英人のドイツ國に流寓し、二姪女を教え養うを斂す。ジェスは其の長女なり。英大尉ありて、また職を棄ててこれにつきて稼を學び、次女に鍾情す。ついでまた長女の己を愛するを知り、ほとんどその情を移さんとす。しかれども、ジェスその妹を愛し、言を託して旅行し、情人をもつて妹に讓る。その後、英とドイツと開戦し、大尉は危を冒してジェスをむかえ、困國のなかにあること數月、瀕死のときに二人は互いに愛情を言い、また婚約を訂す。しかれども、ついに死なず。ときに大尉に情敵モローあり、大尉がその次女を奪うを恨み、兵を引いて次女の叔に逼り、強いて次女を己に嫁せしむ。まさに危急のとき、ジェスすでに返り、夜に幕中に入りモローを刺す。己もまた勞頓すること過甚、山中に斃する。この書、佳處はなほだ多きは序中にすでにこれを言えり。斂するところの各人の性質は、下は走卒黑奴に至るといへども、ま

た一の雷同者なし。まことに名著なり。上等に列して獎を給せんと擬す。

【覆批】本書を覆審するに、主要人物はジョンとベッシーとなす。そのベッシーとジェス二人の性情は一は舒にして一は慘、一は直にして一は曲、一は自然にして一は矯作、一は和平にして一は激烈、生と枯と並び寫して、雙管齊しく下るの妙あり。その後、ベッシーはついに美滿の結果を獲、危險の境、悲慘の事はすなわちみなジェスの一身に集る。作者のここにおける、蓋し微旨を具し、ベッシーのモローを拒絶して侃侃として撓げざる、ジェスの妹を愛するが故に自らその情愛を割くるはもっとも作者の特筆なり。宜しく原評に照らして上等に列し獎を給すべし。

【第六回】

(一)『秦漢演義』

本書の佳處は序文、および凡例にあますところなく歴舉されているが、はじめは溢美ではない。引用の書籍は史、漢、通鑑を除くほか、ままた他書を探るが、いずれも出處を注記している。最も讀者に有益なのは書中の挿畫で、あるいは古圖より摹寫し、あるいは新意より出で、そのもっとも雅なるものを選び、編者が慎重であるのをうかがわせる。ただ歴史小説は載籍に根據をおく。鑿空して選述するものがあるにしても、いくらかは憑藉するところがあつて着手しやすい。とはいへ、また難しいところがある。蓋し、書物とするにさいし、剪裁しなければ興味は索然、人をして睡らんと欲せしめる。これがその缺點の一である。事實を虚構して筆にまかせて敘述すれば、神仙妖鬼が登場し、でたらめばかりになる。缺點の二である。舊時の説部は、ただ列國演義、三國演義がもっとも有名であるが、本書は秦漢四十餘年の歴史を首尾一貫している。列國志に比べて書物にしやすいとはいへ、根據のない記述は一字もない。これは三國演義よりも勝っている。その文

筆はきわめて簡單平直、小學生にこれを讀ませれば、史實を記憶させるのに便で、またすこぶる有益である。

【覆批】本書を覆審するに得失は原評に詳しく、異議はない。ただ小説は虚を陷むに難からず、實に徴するに難い。歴史小説は編纂にもっとも難い。わが國の普通の人民の歴史觀念が薄弱であるのは、じつに歴史小説が發達していないことによる。然るに談話が三國の事迹に及べば婦孺も多くこれを語ることができ。とすれば、三國演義の功はむしろ陳壽の三國志以上であることは疑いない。今日、このような歴史小説を編纂してわが國人の歴史觀念を啓發するにあたって、作者はここに宏願をのべてこの書を著した。その價値は三國演義に及ばないとはいへ、二十二史演義に比べれば、これ以上のものがある。宜しく褒獎を給してもって來者を勵ますべきである。

(二)『湘娥淚』

瀏陽の寒士、陳次強の妻を敘述する。辛亥の役に次強は筆を投じて從軍、故郷では動亂が起る。妻は姑および子供を携えて避難するが、その困苦は名狀しがたい。途中、姑は死亡し、子もまた夭折した。妻は賊のためにかどわかされ、危難に直面すること四度であつた。危難のなかに隣家の女に会い、形影あい依り、飢渴を免れた。民國が成立したが、夫もまた殺害された。妻は姑、夫、子を葬つて自分も殉死した。本書は烈女傳として讀むことができ、文筆は雅雋で烈婦林婉儀を述べて人を感動させる。凜たること氷霜のごとく慈孝は人に過ぎる。もとより貴い人格である。これは事を記した小説の上乗なるものである。宜しく上等に列し、甲種の褒狀を給すべきである。

【覆批】本書に記すところを覆審するに、まさに事實であり、その情節は悲劇に類する。傳記としてその事を觀れば、世を諷するに足り、小説として觀れば、亂離悲慘の事をもつぱら記す。他書

と蹊徑獨絶するを願れば、原評の列して上等とし獎を給するに深く同意を表わす。

(三) 『郷里善人』

本書はチュチュルダが賢明で、至らざるなきを敘述している。その小ロトにたいしても感化主義を用い、仁というべきである。エンナにたいしても、助力を求められて頑徒を征服して智というべきである。リップを敗ったことは大いに剛強不屈の氣概があつて、いわゆる巾幗にして鬚眉なる者であり、これは勇である。この三者があり、女のなかの師となすに足る。もっとも奇れているのは兒女を教導するは家庭教育の常であるとはいへ、活潑なる精神、整齊なる態度、精勤の志氣、いずれも學校教育の及ぶべからざるものである。そこで、リオネールの家が模範的な學校とされるのは、まことに虚言ではない。全書に統觀するに宗旨は正大、意義は精詳、詞藻もまたはなはだ繽紛、まことに社會教育に功あるの作である。上等に列して獎を給すべし。

〔覆批〕 覆審の意見、原評の如し。

六 周樹人の關與

(1) 沈論文は小説の推薦にはっきりした傾向性を指摘し、これと周樹人の關連を認めようとし、一九一六年に推薦になった二十六點の小説について、つぎのように分析する。沈論文三三—三四頁。

——これらは四類に分類できる。

第一類。被壓迫者、たとえば労働者、農民、黑人奴隸など、いわゆる「下層社會」の生活と闘争を描いたもの。五點。二〇パーセント。

『黒奴顛天録』、『治工軼事』、『穢者傳』、『模範町村』、『義黒』

第二類。兒童、青少年の正直無比の人格、勇敢進取の精神を描寫した。十二點、四六パーセント。『棄兒』、『苦兒流浪記』、『美洲童子萬里尋親記』、『英孝子火山報仇錄』、『塊肉餘生述』、『孝女耐兒傳』、

『愛國二童子傳』、『穽兒就學記』など。

第三類。婦人の高尚な人格と勇敢な精神を描いたもの。三點。一一パーセント。『冰雪因緣』、『大荒歸客記』、『璣司刺虎記』。

第四類。その他は六點。二三パーセント。資本主義を攻撃したものとして、『電影樓臺』、使命を全うするものとして『秘密使者』、獨立した生活をもって怯懦な人間を教化するものとして『魯濱遜漂流記』。ほかに歴史小説として『二義同囚記』。

沈論文は、それぞれの小説を示すにあたつて、それぞれの小説にたいする批語一部を引用している。たとえば、エクトル・マロ『サンファミュー(家なき兒)』を原作とする『苦兒流浪記』については、批語の「社會にたいし獨立して生活することを提唱し依頼者にたいして鍼砭を下す」を引用するというぐあいである。

しかしながら、小説の審査にあたつて、はじめからこのような分類が意識されていたかどうかは疑わしい。すなわち、はじめから、被壓迫者、『下層社會』や兒童、青少年の正直無比の人格を描いた作品を推薦にしようという意圖があつたかどうか、疑わしい。ただし、一種の正義感、倫理感、積極的精神のうたわれているものを選択しようという心構えはあつたであらう。すなわち、小説によって、社會人心を教化しよう、あるいは、小説は社會人心の教化に役立つものでなければならぬ、という前提にたてばこのようなところに落着くであらう。この前提は存在したのだと考えられる。その存在を證明するものとして、沈論文の上記の四分類は役立つ。

十九世紀の小説からすぐれたものを選択すれば、しぜんこのようなところに落着くのではないだろうか。すなわち、推薦者が選擇するより以前に、翻譯者が選擇しており、その選擇がよかつたということである。

なお、本論文においてとりあげた小説は、推薦になり、かつ賞狀を授與されたものである。このほかにも、上等に列せられるだけで賞狀

は授與されない小説があったが、それがどのような小説であつたかについては、『教育公報』にいちいち當って調べることをできない現在では、あきらめざるをえなかつた。上記の二六點のほかに、「上等小説」が七〇點あるのである。沈論文三三頁。

その「上等小説」として、沈論文はつぎのようにあげている。

『匈奴奇士録』——ハンガリア、カマルの作

『撒克遜劫後英雄略』——イギリス、スコット、

『蟹運郡主傳』——フランス、デューマ(ベール)

『賊史』、『紅紫露傳』——イギリス、デッケンズ、

『心獄』——ロシア、トルストイ、

など。

さらに周作人のつぎのような回想を引用している。

「魯迅先生が日本に留學したとき」讀んで感服したのはスコットの『撒克遜劫後英雄略』であつた。……サクソンの遺民とノルマン人が對抗した情況に暗示的な意味を讀みとつたと語つたのである。それで特に重視したのであつた」(周啓明『魯迅的青少年時代』中國青年出版社、七八頁)

そして、沈論文は、つぎのように結論づける。

「とすれば同書が上等に列せられたのも原因のないことではない」沈論文三四頁。

沈論文のようにみてくると、こうした推薦には周樹人がかなり積極的に關與しているということになる。

(2)

以下、人物事典的な説明を補足する。——

包天笑。はじめ本名は包公毅。字は朗孫、號は天笑。筆名は笑、餘翁、秋星閣、且樓。江蘇省吳縣の人。一八七五年生まれ、一九七三年死去。享年九十八歳。

十七歳のとき父が亡くなり、生計をたてるため蘇州の自宅で塾をひらいた。まもなく富豪の家庭教師に雇れた。

周樹人の役人生活

やがて南京の高等學堂で學んだあと、上海の金粟齋譯書處に勤めて翻譯に従事した。それから山東省青州に赴き、中學堂に勤めた。

そのかたわら、上海の『時報』(一九〇四年創刊)に隨筆や小説を投稿、しばしば採用された。一九〇六年(光緒三十二年)に上海にてたまたま『時報』社を訪ね、論説や小説を執筆することを條件に、社員となった。

かれはまた『小説林』の編集もひきうけた。これは曾孟樸が創刊した雑誌で、曾孟樸は『藥海花』を同誌上に連載中であつた。女學校(女子蠶業學校、城東女學校)で教えるほか、いくつかの文藝雜誌にも關係(編集、出版)し、さらに商務印書館にも勤務した。

そのころ執筆したのが、『苦兒流浪記』、『警兒就學記』、『埋石棄石記』で、いずれも『教育雜誌』にまず掲載された。

かれはまた、詩壇の結社の一つ、南社にも参加した。

一九四七年、上海から臺灣にゆき、ついで香港にゆき同地の香港『文匯報』、『新晚報』に寄稿、同地で一九七三年に死去。

『劍影樓回憶錄』香港・大華出版社 一九七一年六月。自序は一九七一年二月、香港で執筆。このとき九十六歳。

本文の記述は同書の「在商務印書館」と題した章に記された回想によつてゐる。同書三八五—三八八頁。

『埋石棄石記』については、これのもとになった日本の小説は、教育について見解をのべたところが多く、師弟の關係については中國の尊師重道と一致するものがあつた、と回想している。

當時、かれは商務印書館發行の雑誌『教育雜誌』の編集にも従事していた。そのため同誌に小説を寄稿しなければならなかつた。以下に掲載巻號をかかける。

(一)『警兒就學記』第一年第一期(宣統元年正月二十五日發行)

——同年第十二期(同年十一月二十五日)

(二)『孤雛感遇記』第二年第一期(宣統二年正月十日)——同年

第十二期(同年十二月十日)

(三)『埋石裏石記』第三年一期(宣統三年一月十日)——同年十二期(民國元年三月十日)

(四)『苦兒流浪記』第四卷第五號(民國元年八月十日)——第六卷第十二號(民國三年十二月十五日)

ただし、途中で休載がある。

(5) 杉谷代水譯については前田晃による。前田晃譯『クオレ』岩波書店(岩波少年文庫一〇〇八)一九五五年九月。「あとがき」二八三—四頁。

(6) 『孤雛感遇記』は『教育雜誌』によってみることが出来る。物語は、麗娃郷という風光明媚な土地にやってきた金士奎中尉が、父を戦争で失った孤兒、孫雄兒を知り、これに學資を援助するところから始まる。

(7) 息樓と袁希濤については『劍影樓回憶錄』三二九頁。

(8) 同上書三八八頁。

(9) 同上書三八六—八七頁。

(10) 同上書三八七頁。

(11) 薛綏之・張俊才『林紓研究資料』福建人民出版社 一九八三年六月。

〈中國現代文學史資料叢編(乙種)〉

本書を惠贈された薛先生の令息、薛雲青先生に感謝する。

同書の巻頭に、曾憲輝の「林紓傳」がかかげられている。以下はその要約である。

林紓。字は琴南、號は畏廬、冷紅生。晩年は蠡翁、踐卓翁。清光緒八年壬午の科擧に合格(舉人)。

一八五二年、福建省閩縣(今の福州)に生まれた。子供のときから讀書を好んだ。進士にたびたび落第。二十歳のときから教師、五十歳で北京の金臺書院などで教えた。一八九七年、フランスから歸國した王子仁(曉齋主人)がパリでデューマ父子が小説家として有名で、椿

姫が評判になっている話をした。そこで王と共譯、『巴黎茶花女遺事』と名づけて一八九九年、福州で出版、たちまちベストセラーになった。嚴復が「可憐なり一巻の茶花女、斷ち盡す支那蕩子の腸」とうたったほどである。

當時、日清戦争に敗北して知識人は變法維新をとんでいた。嚴復、夏曾佑「本館附印小説緣啓」、梁啟超「譯印政治小説序」など、小説の社會的役割を強調する主張があらわれた。林紓も「獨だ小説の一道のみは尙お人を感ぜしむるに足るを念う」とのべたことがある(『英孝子火山報仇錄』序)。「巴黎茶花女遺事」のあと、「黑奴籲天錄」を譯したのも、有益な書を提供して愛國心をよびさますという考えにたったからで、黒人奴隸に黃色人種の運命をかさね、悲憤にたえなかったという。

一九〇三年から、京師譯書局を主宰し、友人高鳳謙が在職する商務印書館をつうじて出版した。かれは原文に通じなかつたので、誤りも多く、程度の低い作品を選んだこともあって終生の遺憾事としたが、口頭で譯してゆくのを聞いて外國文學の流派の區別がつくようになった。『撒克遜劫後英雄略』、『孝女耐兒傳』はよく原文の風格をおとさず、ユーモアの味をつたえた箇所もある。『迦蘭小傳』は世界文學史に地位はないが、林紓譯によって光彩を増した。數十年にわたって百七十餘點(二百七十一冊)を譯出した。

かれは『金陵秋』などの長篇小説も創作した。それは國事を經とし、愛情を緯とするものであった。『天妃廟傳奇』など、社會的事件を題材とした傳奇も創作した。詩集、古文集、筆記小説もある。繪畫にも才能を發揮し、一畫に必らず「絶句」を題した。

愛國的感情も強く、『馬關條約』には上書して臺灣の割讓に反對した。維新運動にさいしても御史臺に三たび赴き、上書した。上書が却下されると憤慨して當局を非難した詩をつくった。辛亥革命ののちは保守に傾き、五四時期の思想、文學革命が理解できず、とりわけ口語

文に反対した。廢帝溥儀の結婚式には祝賀の獻品をし、それに返禮がきたさい地に伏して頓首、泣いた。一九二四年十月、北京で死去。三一〇頁。

- (12) 横井時敬。河出孝雄編『日本歴史大辭典』河出書房新社 一九五九年十一月、第一九卷二一頁にはつぎのように記されている。――

よこいときよし 一八六〇―一九二七 明治・大正期における農學・農政界の指導的人物。熊本縣士族の出身で、熊本洋學校・東京駒場農學校を卒業。福岡縣立農學校教諭のとき鹽水選種法を考案した。一八九四(明治二七)年農科大學助教授、九九年農學博士となってドイツに留學し、歸國後教授に昇進した。老農(篤農)らの經驗主義による農事改良が重んぜられた時期に、科學的な農學の普及發達に努力し、近代農學確立の開拓者となった。晩年は農業教員養成所主事、東京農業大學學長を兼ね、農業教育振興に力を盡した。「鹽水選種法」「稻作改良論」「農業經濟學」など多くの著書があり、全集に集録されている。(三橋 時雄)

- (13) ポール・パディ Paul Bady. エコール・ノルマル・スーペリオール教授。中國文學。とくに老舍にくわしい。かれの教示をうけたのは一九八四年十二月十四日付私信。記して感謝する。

- (14) 宇佐美齊のメモ。これをうけたのは一九八五年一月三十一日。記して感謝する。

- (15) この審報報告(批語)の原文は、前節五の注(11)にかかげた。

- (16) この審査報告(批語)の原文は、前節五の注(11)にかかげた。

- (17) 沈論文。三六頁。

- (18) 同右。三六頁。

- (19) 『辭海』(一九七九年版)上海辭書出版社 一九八〇年八月、縮印本。この引用は周遐壽(周作人)『魯迅的故家』人民文學出版社 一九五七年九月、一六四頁。序文は一九五二年二月二十九日。上海雜誌公司 一九五二年十一月初版。

周樹人の役人生活

- (21) 周瘦鵬の追想とは、かれの「一瓣心香拜魯迅」。『拈花集』上海文化出版社 一九八三年六月。三二―三四頁。

「心香」というのは、佛のままで香を焚くように、誠意を盡すということ。この一文はおそらく一九六一、二年ごろに書かれた。この一文のまえにおかれた文章に一九六〇年十一月のことが記され、本書の自序は一九六二年八月となっている。

これによれば『歐美名家短篇小說叢刊』は一九一七年二月に出版されており、一九一八年というのは再版の年であるという。當時二十二歳であったかれは結婚費用を準備するために本書を編譯したのである。包天笑の序言もあった。

本書のあと、かれが翻譯の筆を棄てたということはなく、一九三六年、大東書局から『世界名家短篇小說全集』四冊を出版している。二十八カ國の八十篇を収め、ソ連が十篇を占め、ほかにもポーランド、チェッコ、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアなどの作品も収めた。

教育部が推薦したとき、かれはすでに中華書局をやめて二年たっており、しばらくたって賞状が轉送されてきた。中華書局が本書を教育部に送ったことは、はじめ知らなかった。本書の批語を誰が書いたかも、知らなかった。「當時、魯迅先生は教育部に在職していて自ら審査し批を加えられた。これも解放後になって知ったのである。一昨年、北京魯迅著作編集室の王士菁同志がやってきて、魯迅先生の批語がわたしのところにないか、質問した。借用して使いたい、とのことだった。わたしは一度も讀んだことがないのである。おそらく當初は中華書局にあったのであろうが、事は三十餘年をへだて、人間もいれかわっているから、探してもみつからなくなっているであろう」三四頁。

周瘦鵬の傳記は、あらましつぎのとおりである。

名は國賢。筆名は紫羅蘭齋主人。江蘇省吳縣の人。一八八二年生れ。六歳で父を喪い。母に育てられた。民立中學卒業。『小説月報』に發表の「愛之花」で知られるようになった。のち、脚本を書いたが、觀

客は多かった。一九一一年八月二十四日、上海『申報』（一八七二年四月三十日）に「自由談」欄が創設され、もっぱら鴛鴦蝴蝶派の作品をのせたが、この欄の編集はかれであった。一九三二年十二月、紙面が刷新され編集は黎烈文に代った。一九一四年六月六日『禮拜六』週刊が創刊。王鈍根とともに編集、かれの小説、隨筆、翻譯はたいていがこれに掲載された。一九二一年九月『半月』が創刊され、編集長となった。一九二二年夏『紫蘭蘭花片』月刊を創刊。一九六九年に死去。

かれは鴛鴦蝴蝶派の作家で、多数の著作がある。翻譯にすぐれ、ゴリキーの小説を最初に翻譯したのもかれである。しかし作品も情味にあふれ感銘をあたえる。著作に「秋海棠」、「藥海濤」、「新秋海棠」、「我們的情侶」、「滑頭世界」、「奇談大觀」など。

右は李立明『中國現代六百作家小傳』香港・波文書局 一九七七年十月、による一九七—九八頁。

(22) 沈論文はつぎのようにいっている。沈論文三五頁。

『域外小説集』が出版されて八年のち、本書は中國において十九世紀歐米各國の進歩的作家作品の再度の集中的紹介であった。

文化の逆流が全國に彌漫したさいにあつて、この譯本（『歐米名家短篇小説叢刊』のこと）はあきらかに格別に貴重なものであつた。

したがつて魯迅先生のこれにたいする評價はとりわけ高いものがあつて、「昏夜の微光、雞群の鳴鶴」に喩えている。魯迅先生は當時、この譯書を肯定的に評價するとともに、實事求是をもつて原著の得失と譯文の不足を指摘した。たとえば譯者が原題の

「Max Stolprian」を「破題兄第一遭」と譯し「Corinne」を「無可奈何花落去」と譯したことについて、魯迅先生は嚴肅に「命題の造語も本國〔中國〕の成語を用う。原本はもとよりかつてこれあ

らず。誠ならざるを免れず」と指摘している。これはまさに魯迅先生が讀者にたいしてきわめて強く責任を負うところである。

(23) この報告書の原文は、五の注(11)にかかげた。

(24) 『皇帝の密使』新莊嘉章譯、集英社、一九六七年十一月。ヘジュール・ヴェルヌ全集、全十二巻のうちの第四巻。

(25) この批語の原文は、五の注(11)にかかげた。

(26) 『征服者ロビュール』手塚伸一譯。集英社、一九六七年十月。ヘジュール・ヴェルヌ全集、第三巻。

批語の原文は五の注(11)にかかげた。

七 結 語

(1) 袁世凱の死によつて周樹人が活潑になった一つの例として、かれが袁世凱が制定し施行しつゝあつた「教育綱要」の廢止を主張したことがあげられる。一九一六年八月三日、教育部參事室は「教育綱要」をどのように取扱うか(一)全面的廢止、(二)實施したものを取消すに止める(三)「綱要」と學制は別個のものであるから、區別して扱うといった三つのうちどれをとるか、部内に問うた。周樹人の回答は

(一)であつた。中國第二歴史檔案館「魯迅主張廢止袁世凱『教育綱要』簽注一則」『歴史檔案』一九八一年二月號。四三—四四頁。

(2) 「狂人日記」は『新青年』四卷五號(一九一八年五月刊)に掲載された。

(3) のちに周樹人はこのころの中國文壇の事情にふれている。「上海文藝の一瞥——八月十二日、社會科學研究會の講演」一九八一年版『魯迅全集』四卷所收、二九—三〇七頁。これははじめ『二心集』所收。

副題の日付は誤っており、講演をおこなつたのは一九三二年七月二十日。

ここでは、かれはいうまでもなく「魯迅」として講演している。

このなかで、かれは林紆の『迦茵小傳』にふれ、また雑誌『眉語』發刊や鴛鴦蝴蝶派文學にふれている。二九四頁。

それらは、上海を中心にするものであり、つづいて上海に出現した創造社もその氣風をうけつぎ、しかも古い上海をしのぐことができな

かった、ともいつている。二九六頁。

この記述は周樹人が民國初期の上海文壇をどのようにみていたかをうかがわせる。林紓、『眉語』、鴛鴦蝴蝶派文學にたいする口調は辛辣である。『全集』編者による注釋は、この派に屬する雜誌をいくつかあげ、なかでも『禮拜六』が影響力があったといい、これによつた作家として包天笑、陳蝶仙、徐枕亞、周瘦鵬、張恨水の名をあげている。魯迅は筆名を天虛我生ともいつた陳蝶仙が『眉語』を創刊したといつてゐるが、注釋はこれは誤りで、高劍華の編集であるという。三〇五頁。

(4) のちに「狂人日記」執筆當時のことにふれ、「狂人日記」を生みだし

たのは、かつて讀んだ外國の小説百餘篇と醫學上の若干の知識であるといつてゐる。この「百餘篇」のなかには、通俗教育研究會の主任、また審査幹事、そして教育部の科長という立場における小説審査のために讀んだ小説が含まれてゐると考えられる。「我怎么做起小説來」(わたしはどのようにして小説を書きはじめたか) 一九三三年三月五日執筆。『南腔北調集』所收。一九八一年版『魯迅全集』四卷五一—一五頁。

なお、「狂人日記」にはモデルがあつた。周遐壽(周作人)『魯迅小説裏的人物』一〇—一二頁の「狂人是誰」(狂人は誰か)。